

# 島根県西川津遺跡出土品 1

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所蔵資料再整理事業報告書 2

2021. 3

島根県教育委員会



# 序

島根県古代文化センターと埋蔵文化財調査センターは、島根県の特色ある歴史文化に関する出土品の活用を目的とした「考古基礎資料調査研究事業」を行っています。本報告書は、同事業の一環として平成 29 年度から令和 2 年度にかけて実施した、松江市に所在する西川津遺跡出土遺物の再整理事業報告です。

西川津遺跡は、朝酌川の河川堆積によって形成された松江平野の北部に位置し、山陰最大級の弥生拠点集落として知られる朝酌川遺跡群のひとつです。昭和 55 年度から平成 22 年度にかけての発掘調査の結果、縄文時代から近現代に至るあらゆる種類の遺物が良好な状態で出土し、自然環境の変遷やそこに暮らした人々の様子を具体的に明らかにできる、県内でも数少ない貴重な遺跡です。しかしながら、出土遺物の量が莫大なため、その全貌が明らかにされておらず、十分に活用されているとは言い難い状況にありました。

このため、先ずは昭和 55・56 年度調査の報告書非掲載遺物を中心とした出土品の再整理を実施しました。本事業では、その内容を明らかにするとともに、データベース化を行うなど、出土品の利活用を図るために必要な基礎資料を整理しました。

本書が地域の歴史や埋蔵文化財への理解と関心を深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、この事業を進めるにあたり、ご指導・ご協力を頂きました関係者各位の方々に深く感謝の意を表します。

令和 3 年 3 月

島根県教育委員会

教育長 新田 英夫

# 例　言

1. 本書は文化庁国庫補助を受けて実施している考古基礎資料調査研究事業のうち、収蔵品の公開・活用を目的とした、西川津遺跡出土品の再整理事業に伴う調査成果をまとめたものである。
2. 本書で報告する遺跡は下記のとおりである。

西川津遺跡Ⅰ（松江市西川津町字宮尾坪内 558 外；朝酌川河川改修事業に伴う発掘調査）

西川津遺跡Ⅱ（松江市西川津町字宮尾坪内 588 外；朝酌川河川改修事業に伴う発掘調査）

3. 当事業は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが古代文化センターから予算令達を受け、平成 29 年度から令和 2 年にかけて実施した。調査組織は次のとおりである。

実施主体　島根県古代文化センター考古基礎資料調査研究事業出土品再整理部会

## 【事務局】

平成 29 年度

丹羽野　裕（文化財課長）、廣江耕史（古代文化センター管理監）、萩　雅人（埋蔵文化財調査センター所長）、石橋　聰（同総務課長）

平成 30 年度

萩　雅人（文化財課長）、廣江耕史（古代文化センター管理監）、椿　真治（埋蔵文化財調査センター所長）、石橋　聰（同総務課長）

平成 31 年度・令和元年

萩　雅人（文化財課長）、中島正顕（古代文化センター長）、椿　真治（埋蔵文化財調査センター所長）、和田　諭（同総務課長）

令和 2 年度

萩　雅人（文化財課長）、中島正顕（古代文化センター長）、椿　真治（埋蔵文化財調査センター所長）、和田　諭（同総務課長）

## 【客員研究員】（五十音順）

岩本　崇（島根大学法文学部准教授）、大谷晃二（島根県立三刀屋高等学校教諭）、大橋泰夫（島根大学法文学部教授）、村田裕一（山口大学人文学部准教授）、吉田　広（愛媛大学ミュージアム准教授）

## 【出土品再整理事業調査担当者】

平成 29 年度

（古代文化センター）原田敏照、岩橋孝典、岩本真実

（埋蔵文化財調査センター）池淵俊一、是田　敦

平成 30 年度

（古代文化センター）原田敏照、東山信二、岩本真実

（埋蔵文化財調査センター）是田　敦、神柱靖彦、守岡正司

平成 31 年度・令和元年度

（古代文化センター）是田　敦、原田敏照、勝部智明、岩本真実

（埋蔵文化財調査センター）深田　浩、岩崎孝平、種田陽介、守岡正司

令和2年度

（古代文化センター）松尾充晶、是田 敦、岩本真実

（埋蔵文化財調査センター）深田 浩、伊藤 智、東森 晋、廣江耕史、守岡正司

4. 整理作業にあたり、客員研究員の他、以下の方々からご指導いただいた。記して感謝の意を表します。（五十音順：肩書は当時）

田畠直彦（山口大学大学情報機構）、中村唯史（島根県立三瓶自然館課長代理）、山崎頼人（小都市教育委員会文化財課）、渡邊正巳（文化財調査コンサルタント（株））

5. 本書で使用した第5・6・58・66図は国土地理院発行1/25,000地形図（松江）を使用して作成したものである。

6. 本書に掲載した写真は深田が撮影した。

7. 本書の執筆は、第1章を守岡・深田、第2～3章を深田が執筆した。第4章は第1・2・5節を深田、第3節を原田が執筆し、第4節は村田裕一氏に玉稿を賜った。また本書の編集は深田が行った。

8. 本書付属のDVDには、本書掲載遺物の観察表、本書所収の遺跡から出土した総ての遺物の一覧データ及び写真を収録している。

9. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

# 本文目次

第1章 事業に至る経緯と経過	1
第1節 事業の目的と実施に至る経緯	1
第2節 調査の方法	2
1.目的	2
2.実施の手順	2
3.作業実施対象資料の選定	6
第3節 事業の経過	7
1.平成29年度の実施状況	7
2.平成30年度の実施状況	7
3.令和元年度の実施状況	7
4.令和2年度の実施状況	8
第2章 位置と環境	9
第1節 遺跡の位置と地理的環境	9
第2節 歴史的環境	10
1.旧石器時代	10
2.縄文時代	10
3.弥生時代	10
4.古墳時代	12
5.古代	13
6.中世	13
第3章 西川津遺跡の再整理	14
第1節 遺跡の概要と過去の調査及び報告書作成の概況	14
1.遺跡群の発見	14
2.朝酌川河川改修に伴う発掘調査	14
3.松江島根線道路改築事業に伴う発掘調査	16
第2節 昭和55・56年度の調査	17
第3節 出土遺物の再整理	19
1.出土遺物の統計分析	19
2.土器・土製品(非掲載)の図化	21
(1)縄文土器	21
(2)弥生土器	26
(3)その他	49
3.石器の統計分析	51
4.石器(非掲載)の図化	53
5.木製品の統計分析	64
6.木製品(非掲載)の図化	64
7.試掘調査(昭和54年度)出土遺物の図化	66

第4章 総括	67
第1節 西川津遺跡の縄文土器	67
1. 縄文土器出土量からみた西川津遺跡の動態	67
2. 周辺地域における縄文時代遺跡の動態	68
3. 西川津遺跡の動態における自然環境の影響	71
第2節 西川津遺跡の弥生土器	73
1. 弥生土器出土量からみた西川津遺跡の動態	73
2. 特徴的な出土遺物	75
3. 小結	77
第3節 西川津遺跡出土土器の圧痕レプリカ法調査の結果	79
1. 調査の方法	79
2. 調査対象と観察結果	79
第4節 西川津遺跡の弥生石器	87
1. 非定型的な剥片石器類	87
2. 施溝分離石器製作技術体系	91
3. 黒曜石製の調整剥離痕のある剥片（RF）および使用痕のある剥片（UF）	95
4.まとめ	96
第5節 結語	98
1. 西川津遺跡（昭和55・56年度調査）の「再整理」の成果	98
2. 今後の課題と活用に向けて	100

# 挿図目次 1

第 1 図 収蔵庫の現状 ······ 1	第 35 図 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (19) ····· 47
第 2 図 西川津遺跡の位置 ······ 1	第 36 図 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (20) ····· 48
第 3 図 再整理事業実施要領 (抄) ······ 3	第 37 図 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (21) ····· 50
第 4 図 遺跡周辺地形分類図 ······ 9	第 38 図 昭和 55・56 年度調査出土遺物 ······ 51
第 5 図 西川津遺跡の地形分類図 ······ 11	第 39 図 昭和 55・56 年度調査石器出土量 ······ 52
第 6 図 朝駒川遺跡群の調査区配置図 ······ 15	第 40 図 昭和 55・56 年度調査出土石器 (1) ······ 54
第 7 図 昭和 55・56 年度の調査区 ······ 17	第 41 図 昭和 55・56 年度調査出土石器 (2) ······ 55
第 8 図 昭和 55・56 年度調査の調査グリッド 及び土層模式図 ······ 18	第 42 図 昭和 55・56 年度調査出土石器 (3) ······ 56
第 9 図 昭和 55・56 年度調査区の土層図 ······ 18	第 43 図 昭和 55・56 年度調査出土石器 (4) ······ 57
第 10 図 昭和 55・56 年度調査の年度別遺物出土量 ····· 19	第 44 図 昭和 55・56 年度調査出土石器 (5) ······ 58
第 11 図 昭和 55・56 年度調査の遺物出土量 ······ 20	第 45 図 昭和 55・56 年度調査出土石器 (6) ······ 59
第 12 図 昭和 55・56 年度調査出土縄文土器 (1) ····· 22	第 46 図 昭和 55・56 年度調査出土石器 (7) ······ 60
第 13 図 昭和 55・56 年度調査出土縄文土器 (2) ····· 23	第 47 図 昭和 55・56 年度調査出土石器 (8) ······ 61
第 14 図 昭和 55・56 年度調査出土縄文土器 (3) ····· 24	第 48 図 昭和 55・56 年度調査出土石器 (9) ······ 62
第 15 図 昭和 55・56 年度調査出土縄文土器 (4) ····· 25	第 49 図 昭和 55・56 年度調査出土石器 (10) ······ 63
第 16 図 昭和 55・56 年度調査出土縄文土器 (5) ····· 26	第 50 図 昭和 55・56 年度調査出土木製品の出土量 ····· 64
第 17 図 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (1) ····· 27	第 51 図 昭和 55・56 年度調査出土木製品 ······ 65
第 18 図 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (2) ····· 28	第 52 図 昭和 54 年度試掘調査出土遺物 ······ 66
第 19 図 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (3) ····· 29	第 53 図 昭和 55・56 年度調査及び鶴場地区における 縄文土器の時期別出土量 ······ 68
第 20 図 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (4) ····· 30	第 54 図 昭和 55・56 年度調査及び鶴場地区における 縄文土器の土器型式別出土量 ······ 69
第 21 図 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (5) ····· 32	第 55 図 島根県の縄文時代遺跡数の推移 ······ 70
第 22 図 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (6) ····· 33	第 56 図 鶴場地区土層断面図 ······ 71
第 23 図 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (7) ····· 35	第 57 図 昭和 55・56 年度調査及び布田遺跡における 弥生土器の時期別出量 ······ 74
第 24 図 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (8) ····· 36	第 58 図 西川津遺跡・布田遺跡の弥生土器時期別出土量 ····· 75
第 25 図 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (9) ····· 37	第 59 図 貝殻施文における鋸歯状圧痕の数量と向き ····· 76
第 26 図 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (10) ····· 38	第 60 図 西川津遺跡出土種压实痕等土器実測図 ······ 81
第 27 図 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (11) ····· 39	第 61 国 西川津遺跡出土土器の圧痕レプリカ法調査資料 1 ····· 84
第 28 図 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (12) ····· 40	第 62 国 西川津遺跡出土土器の圧痕レプリカ法調査資料 2 ····· 85
第 29 国 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (13) ····· 41	
第 30 国 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (14) ····· 42	
第 31 国 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (15) ····· 43	
第 32 国 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (16) ····· 44	
第 33 国 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (17) ····· 45	
第 34 国 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (18) ····· 46	

## 挿図目次 2

第63図 西川津遺跡出土土器の圧痕レプリカ法調査資料3	第65図 施溝分離石器製作技術体系構造概念図	94
····· 86	第66図 西川津遺跡の立地環境復元図	99
第64図 西川津遺跡出土の不定型な剥片石器類における 器種認定基準と特徴	····· 88	

## 表目次

表1 本報告の対象となる報告書・遺跡一覧	2	表6 昭和55・56年度調査及び鶴場地区出土縄文土器	
表2 出土品分類表(西川津遺跡)	4	総括表	67
表3 朝釣川遺跡群のコンテナ数概算	8	表7 昭和55・56年度調査出土弥生土器総括表	73
表4 周辺の遺跡一覧	12	表8 西川津遺跡出土種実圧痕一覧	77
表5 朝釣川遺跡群の調査履歴	16	表9 施溝分離石器製作技術体系関連石器一覧表	93

## 図版目次 1

図版1. 1.昭和55・56年度調査出土縄文土器(1)	図版10. 1.昭和55・56年度調査出土弥生土器(11)
2.昭和55・56年度調査出土縄文土器(2)	2.昭和55・56年度調査出土弥生土器(12)
図版2. 1.昭和55・56年度調査出土縄文土器(3)	図版11. 1.昭和55・56年度調査出土弥生土器(13)
2.昭和55・56年度調査出土縄文土器(4)	2.昭和55・56年度調査出土弥生土器(14)
図版3. 1.昭和55・56年度調査出土縄文土器(5)	図版12. 1.昭和55・56年度調査出土弥生土器(15)
2.昭和55・56年度調査出土縄文土器(6)	2.昭和55・56年度調査出土弥生土器(16)
図版4. 1.昭和55・56年度調査出土縄文土器(7)	図版13. 1.昭和55・56年度調査出土弥生土器(17)
2.昭和55・56年度調査出土縄文土器(8)	2.昭和55・56年度調査出土弥生土器(18)
図版5. 1.昭和55・56年度調査出土弥生土器(1)	図版14. 1.昭和55・56年度調査出土弥生土器(19)
2.昭和55・56年度調査出土弥生土器(2)	2.昭和55・56年度調査出土弥生土器(20)
図版6. 1.昭和55・56年度調査出土弥生土器(3)	図版15. 1.昭和55・56年度調査出土弥生土器(21)
2.昭和55・56年度調査出土弥生土器(4)	2.昭和55・56年度調査出土弥生土器(22)
図版7. 1.昭和55・56年度調査出土弥生土器(5)	図版16. 1.昭和55・56年度調査出土弥生土器(23)
2.昭和55・56年度調査出土弥生土器(6)	2.昭和55・56年度調査出土弥生土器(24)
図版8. 1.昭和55・56年度調査出土弥生土器(7)	図版17. 1.昭和55・56年度調査出土弥生土器(25)
2.昭和55・56年度調査出土弥生土器(8)	2.昭和55・56年度調査出土弥生土器(26)
図版9. 1.昭和55・56年度調査出土弥生土器(9)	図版18. 1.昭和55・56年度調査出土弥生土器(27)
2.昭和55・56年度調査出土弥生土器(10)	2.昭和55・56年度調査出土弥生土器(28)

## 図版目次 2

- 図版 19. 1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (29)  
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (30)
- 図版 20. 1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (31)  
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (32)
- 図版 21. 1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (33)  
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (34)
- 図版 22. 1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (35)  
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (36)
- 図版 23. 1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (37)  
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (38)
- 図版 24. 1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (39)  
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (40)
- 図版 25. 1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (41)  
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (42)
- 図版 26. 1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (43)  
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (44)
- 図版 27. 1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (45)  
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (46)
- 図版 28. 1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (47)  
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (48)
- 図版 29. 1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (49)  
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (50)
- 図版 30. 1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (51)  
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (52)
- 図版 31. 1. 昭和 55・56 年度調査出土遺物 (1)  
2. 昭和 55・56 年度調査出土遺物 (2)
- 図版 32. 1. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (1)  
2. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (2)
- 図版 33. 1. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (3)  
2. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (4)
- 図版 34. 1. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (5)  
2. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (6)
- 図版 35. 1. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (7)  
2. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (8)
- 図版 36. 1. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (9)  
2. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (10)
- 図版 37. 1. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (11)  
2. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (12)
- 図版 38. 昭和 55・56 年度調査出土木製品 (1)
- 図版 39. 1. 昭和 55・56 年度調査出土木製品 (2)  
2. 昭和 54 年度試掘調査出土遺物

## 第1章 事業に至る経緯と経過

### 第1節 事業の目的と実施に至る経緯

島根県教育庁埋蔵文化財調査センターは、平成4年（1992年）に開設され、再来年度で30周年になる。平成9年には本館に隣接していにしえ学習館を増設し、県内の埋蔵文化財の調査研究の拠点として重要な役割を担ってきた。

この期間、県内各所で数多くの発掘調査を実施し、現在埋蔵文化財調査センターに収蔵されている出土遺物の総計は、コンテナ数に換算して32,490箱（令和2年4月5日現在）に達している。

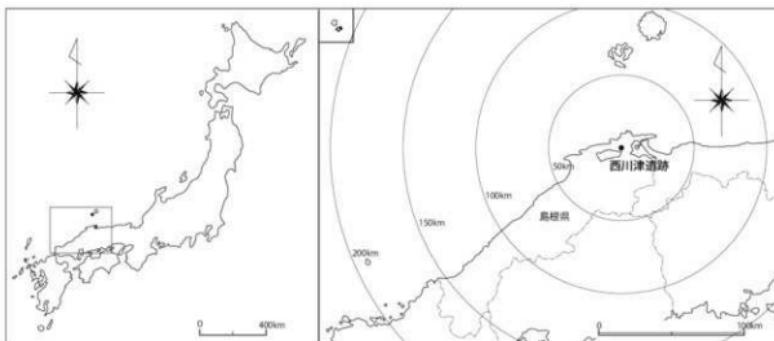
このような膨大な出土品は、埋蔵文化財調査センターに持ち帰った後の整理作業において、大まかには報告書に掲載される資料（掲載資料）と掲載されない資料（非掲載資料）へと分別される。報告書に掲載され公表された掲載資料に関しては、報告書の記載に基づいて整理・収納され、完全に閲覧・貸出が可能な状態となっており、これまで県内及び県外からの多数の見学・貸出の要望に対応し、出土品の活用がある程度図られている状況にあると言える。しかし、このような掲載資料はコンテナ数に換算して8,785箱にすぎず、全体の約27%にすぎない。それ以外の73%に及ぶ非掲載資料に関しては報告書作成時に分別・収納された後は、収蔵されたままの状態にあると言わざるを得ない（第1図）。

本来、記録保存の対象となる遺跡に関しては、出土資料総体に対する解析があつてこそ、対象遺跡の正当な評価が可能となるのであって、ごく一部の資料しか公開していない現状の問題点については、かねてから内部でも指摘されてきた。特に、昭和期に遡る調査の一部については、報告書作成期間や費用の問題で十分な報告に至っておらず、正当な遺跡の評価が行われていないのが実態であった。

こうした現状を鑑み、受託調査量が落ちingいてき



第1図 収蔵庫の現状  
(下段が掲載資料、上段が非掲載資料)



第2図 西川津遺跡の位置

た平成20年代前半から、これらの非掲載資料について再整理を行い、新たな保管・公開・活用を行う取り組みの検討を内部で開始した。平成23年度に検討プロジェクトチームを結成し、試案により短期間試行期間を設けた後、平成24年度から一部文化庁国庫補助事業を受けて出土品再整理事業に取り組むこととなった。第Ⅰ期を平成24年度から28年度とし、意宇平野の集落遺跡を対象に再整理を実施し、平成28年度に『意宇平野の集落遺跡 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所蔵資料再整理事業報告書1』として刊行した。併せて平成27年9月には、島根県立八雲立つ風土記の丘の平成27年度企画展「古代出雲文化発祥の地 意宇の開発史」で調査成果の展示活用を行った。

平成29年度からは、第Ⅱ期として西川津遺跡出土品の再整理を開始した（第2図、表1）。西川津遺跡は昭和50、60年代とかなり以前に調査が行われたこともあって、その重要性にも関わらず出土品の整理や遺跡の評価が十分に行われていない状況にあり、遺跡における集落の消長及び性格・内容の解明が主たる課題となっている。

## 第2節 調査の方法

### 1. 目的

実際の作業にあたっては、まず以下の3点の目的を設定した。

①センターで収蔵する総てのコンテナ（掲載・非掲載資料の両者を含む）について、内容と分量を把握する、②非掲載資料中から報告書作成時に洩れていた重要遺物の掏いだしを行う、③対象遺跡における、各調査地区・種類・時期ごとの出土遺物量の定量的な把握を行う。

以上の作業を積み重ねることによって、対象遺跡・地域の歴史像の再構築を試み、最終的にはその成果を整理報告書または特別展の開催などの手段によって公開・活用を図ることを最終的な目的とした。

### 2. 実施の手順

作業体制は、専属の調査員を確保できないことから、センター内勤の調査員数名、専属の整理作業員1名により実施した。実際の分類作業においては実施要領を作成し、それに基づいて作業を行った（第3図）。

作業の概要是、分類・計測・写真撮影・一覧表作成・写真データ整理・遺物再収納・資料検討の工程からなる。分類作業は、まず種別毎に大別し、さらには時期毎に細別基準を設け、出土量の重量計測を行った。遺物の計測の分類基準は表2に基づいて実施したが、石器については、村田裕一氏の指導により細分したので、石器の分類基準が前回とは異なっている（第4章第4節参照）。計測データはデータベースソフト（Microsoft社ACCESS）により入力作業を行った。

分類時に重要遺物を確認した場合、別途重要遺物として分別した後、図化が必要な遺物について

表1 本報告の対象となる報告書・遺跡一覧

掲印年度（元号）	調査対象遺跡	所在地（現在の名称）	報告書名	調査の概要
昭和55年度	西川津遺跡	松江市西川津町	島根県教育委員会 昭和55年「朝的川河川改修工事に伴う 西川津遺跡発掘調査報告書1」	縄文時代から中世の遺物混合層・旧河道
昭和56年度	西川津遺跡	同上	島根県教育委員会 昭和57年「朝的川河川改修工事に伴う 西川津遺跡発掘調査報告書2」	同上

## 再整理事業 作業実施要領（抄）

## 1. 目的

- (1) 収蔵コンテナ全てについて内容と分量の確認
- (2) 非掲載遺物から重要遺物の抽出
- (3) 地点・種類・時期毎の定性的な把握
- (4) 新たな追加発見・地域像の再構築
- (5) 上記の成果を公開・活用

## 2. 調査対象

対象は埋蔵文化財調査センターに収蔵されている全ての遺物（掲載、非掲載を問わない）

## 3. 分類適用の判断基準

別添の石器・木器・金属類関連・構文土器・弥生土器・土器類・須恵器・中世土器陶磁器・近世陶磁器分類基準を適用し作業をおこなう。

## 4. 各作業工程

作業は分類・写真撮影・一覧表作成・写真データ整理・遺物再収納・資料検討の各工程からなり次の要領で実施する。

## A. 分類作業

- (1) 非掲載コンテナから遺物を取り出し分類を実施する工程を指す。
- (2) 分類はコンテナに入っている袋単位で実施する。
- (3) 分類時に重要遺物を確認した場合、別にスペシャルコンテナを設けて収納することとする。（重要遺物は、非在地系遺物・漆や顔料の付着遺物・報告書掲載遺物はないもの等）
- (4) 本器については真空パックの本身が分かるものは、そのまま分類する。中身が判別できないものや色が残っている等状態が悪化する可能性があるものは、バックから一度は真空パックする。
- (5) 遺物そのものからは時間が判断できない場合でも、併存遺物等で時期が判断されるものはそのカテゴリーに分類し、その後参考に記しておく。

## B. 写真撮影

- (1) 分類された遺物ごとにデジタルカメラで写真撮影を実施する。
- (2) 写真撮影時には、分類された遺物ごとに番号を振り、番号ラベルも一緒に撮影する。

(3) 遺物は、基本的に重ならないように面上に広げた状態で各遺物が判別できるよう俯瞰撮影する。

## C. 撮影データ

## D. 遺物計量

- (1) 分類された遺物ごとに計量し記録する。
- (2) 計量は、土器等は1g単位、石器は1/10g単位でおこなう。木器や大型の石製品は点数をカウントする。

## E. 一覧表記入

- (1) 当初の袋ごとに、調査区、グリッド、出土層位、各分類の重量を一覧表に記入する。
- (2) 重要遺物の詳細は備考欄に記述する。
- (3) 掲載品については、遺物管理台帳に重量を記入する。

## F. 遺物内収納

- (1) 分類作業・写真撮影・遺物計量・一覧表記入が終了したらコンテナへ再収納する。

(2) 分類した遺物単位で小袋に入れ、元の袋にまとめて収納する。元の袋・分類した遺物にはそれぞれ番号を付けて収納する。

(3) 重要遺物は、別に設けたスペシャルコンテナへ収納する。

## G. 写真データ整理

- (1) 遺跡ごとにフォルダを作成する。<【例：大般歴道 2012】
- (2) 撮影した写真データのファイル名を変更する。<【例：010102】

## H. 資料の検討

- (1) 遺跡における各分類の重量比を算出し、比較検討材料としておく。
- (2) 重要遺物については必要に応じて別途検討会・指導会等を実施する。

## I. 掲載品について

- (1) 報告書掲載品のコンテナについても、同じ要領で作業を実施する。
- (2) 遺物の計量で、復元部分（石斧・Q テックス部分）がある場合は、割合を自分量で算出して、補正する。

(3) 重要遺物がある場合は、スペシャルコンテナへ収納する。

- (4) 未処理の木製品については、真空パックの状態を確認し劣化の恐れがある場合は、一度空けて再度パックする。

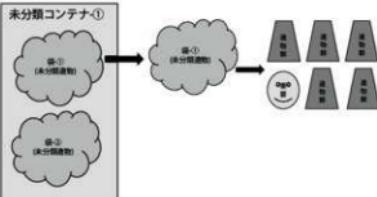
## J. 重要遺物の取扱い

- (1) 特別コンテナに再収納後、実測・写真撮影を実施する。掲載品については、必要に応じて再実測・写真撮影をおこなう。

(2) 重要遺物については追跡又は整理年度ごとに何らかの方法で公開する。

## A. 分類作業

- ① 元から袋ごとに遺物を分類する。
- ② 重要遺物は別にしておく。
- ③ 分類した遺物群ごとに分類記号番号を付ける。



## B. 写真撮影

- ① 分類した遺物群ごとに写真撮影をする。
- ② 写真には、分類された遺物群の分類記号番号も一緒に写し込む。
- ③ 各遺物が判別できるよう撮影する。
- ④ 写真データは1MB程度のものとする。



## C. 遺物計量

- ① 分類した遺物群単位で、計量する。
- ② 計量は石器 1/10g の単位、土器等は 1g 単位でおこなう。
- ③ 木器や大型石製品は点数をカウントする。

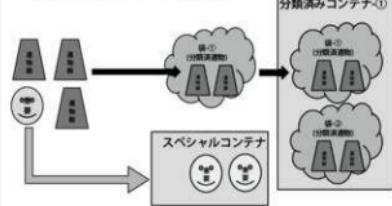


## D. 一覧表記入

- ① 初回の袋単位で、各分類の内容・重量・出土層位・出土地区・出土グリッド等を記録する。
- ② データは写真データとリンクできるように整理する。
- ③ 掲載品は、別途遺物管理台帳に重量を記入する

## E. 遺物再収納

- ① 分類した遺物を袋にまとめて、元の袋単位に戻してコンテナへ収納する。
- ② 重要遺物はスペシャルコンテナへ収納する。
- ③ 分類した遺物群を袋にまとめて、元の袋単位に戻してコンテナへ収納する。
- ④ 重要遺物は特別コンテナへ収納する



第3図 再整理事業実施要領（抄）

表2 出土品分類表(西川津遺跡)

分類 記号	時期等	分類	内容説明
★01	個別に詳細別記	重要遺物	別コンテナへ移動し、別途調査・研究が必要なもの。特殊品・稀少品・搬入品だけではなく、通常のものでも遺跡の正当な評価のために必要なものも含む。
D01	岡文	上製品	重要遺物（スペシャル）以外の上製品。
D02	弥生	上製品	重要遺物（スペシャル）以外の上製品。
D03	古墳～平安	上製品	重要遺物（スペシャル）以外の上製品。
D04	中世	上製品	重要遺物（スペシャル）以外の上製品。
D05	古墳～平安	土製支脚	上製品とは別にする。重要遺物（スペシャル）としないものはこちらに分類。
D06	古墳	埴輪	上製品とは別にする。重要遺物（スペシャル）としないものはこちらに分類。
D07	唐文～近世（不詳）	土鍾	上製品とは別にする。年代不詳な土鍾。
J01	岡文鉄削初期	出現期土器群	深鉢形、無文・有文（多様）。豆粒文含む。
J02	岡文鉄削期初半	隆起線文系	隆起線＝粘土を貼り付けによる隆起状の「隆帯文」・素麁状の「隆起線文」。工具引きはみ出しによる繊細の「微（細）隆起線文」に分類。
J03	岡文鉄削期中葉	爪形文系・円孔文系	指や爪、工具で刺突・押圧・掻み出して全面施文、厚手。口縁に沿って小円孔や円形刺突を列状・散文、薄手。
J04	岡文鉄削期後半	多縫文系	横・縦・斜の直線、破綻、点を組み合わせた幾何学的文様を。押圧施文や回転斜縫文・羽状縫文で表現。（押圧優勢→回転優勢）。薄手。
J05	岡文草創期	その他	別に分類が可能なもの。
J06	岡文草創期（不詳）		草創期に含まれると考えられるが、詳細が分からぬもの。
J07	岡文早期前半	押彫文系	大川式・神奈奇式とされるもの。市松文や、ネガティブな稍凹文）が特徴。
J08	岡文早期中葉	押彫文系（黄鳥式）	ボジティブ山形・小粒稻文で口縁内面に施文。無文も多く併存。
J09	岡文早期後半	押彫文系（高寺式）	冊状文から発展した口縁内面施文、外面に粗い凹型文や燃文。
J10	岡文早期後半	押彫文系（椎谷式）	離形山形文が基本で、突窓・沈窓を付加するもの。／燃系文・沈窓文・貝殻条痕文だけのもの。
J11	岡文早期末	繩文条痕文系	いわゆる繩文土器。貝殻条痕に繩文施文（内面繩文施文なし）・表裏繩文施文：広義の差異式→窄縫式：羽島下巣I式・福呂式・長山式。
J12	岡文早期	その他	別に分類が可能なもの。
J13	岡文早期（不詳）		早期に含まれると考えられるが、詳細が分からぬもの。
J14	岡文前期前葉	轟B式	貝殻条痕文を基調とする上施文。柔軟地に口縁部ミミズバ状隆帶文（+刻み）→十刺突文・押引文・沈窓文/条痕施文。
J15	岡文前期前半	西川津式	幅広の隆帶（有文・無文）貼り付けと押引文。
J16	岡文前期前葉～後葉	北白川下刷式	器面に貝殻と竹管状・つづ状工具を用いて、多様な刺突文やいわゆる爪形文を施すもの。
J17	岡文前期末	特殊突彫文系	北白川下巣3・大歳山併行の土器群。器面に突帯を貼りつけ、その上に突帯よりも幅の狭い竹管状工具で平行柱線を引く。あるいは押し引いた特殊突彫文を施す。
J18	岡文前期	その他	別に分類が可能なもの。
J19	岡文前期（不詳）		前期に含まれると考えられるが、詳細が分からぬもの。
J20	岡文中期初頭	鷹島式	地縛文に平行柱状文を描く上施文。頸部内面に鋭稜、口縁内面の段状肥厚。口縁外側への施文など大歳山式の特徴を引き継ぐ。
J21	岡文中期前半～後半	船元式・里木式	地縛文に平行柱状文を描く上施文。
J22	岡文中期	北白川C式	縛文時代を通して最も器形変化が豊かで、文様意匠・器形が多岐にわたる。口縁部に格内形・方形の内面文をおき、合間に溝文などを配置。
J23	岡文中期	その他	別に分類が可能なもの。
J24	岡文中期（不詳）		中期に含まれると考えられるが、詳細が分からぬもの。
J25	岡文後期初頭～前葉	磨消繩文	中津式・福原K式 II式併行のもの。
J26	岡文後期前葉	前半舟縫帶文	舟縫式・崎の島I・II式併行。
J27	岡文後期中葉	後半舟縫帶文	舟式・崎の島I・古・新舟縫。
J28	岡文後期後葉～末	円線文系	元往古山II・吉池式四隅。
J31	岡文後期前半	西日本酔彌系	酒匱里I・III式併行の上施文。
J32	岡文後期後半	凸縫文系	前池式～沢田式併行のもの。
J33	岡文晚期	その他	別に分類が可能なもの。
J34	岡文晚期（不詳）		晚期に含まれると考えられるが、詳細が分からぬもの。
J35	岡文後期～晩期	粗製	後晩期に贈与する粗製土器。
J36	岡文（不詳）		縛文時代に含まれると考えられるが、詳細が分からぬもの。
HY1	弥生終末～古墳初期	弥生上源～古式上師器	草田5～7で区別される困難な資料
HY2	弥生～古墳	弥生上源・上師器	弥生前中期・古墳初期で縛屈が不明な資料
Y01	弥生前期前半	I・1・2様式	松本編年（1992）に基づく。
Y02	弥生前期後半	I・3・4様式	松本編年（1992）に基づく。
Y03	弥生前期（不詳）		
Y04	弥生中期前葉	II様式	松本編年（1992）に基づく。
Y05	弥生中期中葉	III・1・2様式	松本編年（1992）に基づく。
Y06	弥生中期後葉	IV様式	松本編年（1992）に基づく。
Y07	弥生中期（不詳）		
Y08	弥生後期前葉	V・1様式	松本編年（1992）に基づく。
Y09	弥生後期中葉	V・2様式	松本編年（1992）に基づく。
Y10	弥生後期後葉	V・3様式	松本編年（1992）に基づく。
Y11	弥生後期末葉	V・4様式	松本編年（1992）に基づく。
Y12	弥生後期（不詳）		
Y13	弥生（不詳）		
H01	古墳前期	小谷式	淡黄色系の土器群。鼓形器台・底脚環が段階まで。上縁は小谷2式（草田7期）まで。
H02	古墳前期～中期	微妙なもの	位置づけが単体で判断できないものなど。
H03	古墳中期前半	松山1期	赤褐色色系の土器群で内面肥厚型、小型丸底壺の盛行期。精製环の出現以前。
H04	古墳中期後半	松山2・3期	須恵器出現以降の土器群。精製环、橢形高环出現以降。
H05	古墳中期～後期	微妙なもの	位置づけが複数で判断できないものなど。

分類記号	時期等	分類	内容説明
H07	古墳後期		長財器・瓶などだが、古代との区分は難しい。共伴須恵器で判断。
H08	古墳後期～古代		長財器・瓶などだが、古墳後期との区別は難しい。共伴須恵器で判断。
H09	奈良～平安		畿内系陪土師器、口縁の分厚い・長財器などを指標とする。共伴須恵器で判断。
H10	古墳～平安（不詳）		
S01	古墳中期	大谷1期	MT15以前。口縁大型化以前は取りあえずここに突っ込む。初期須恵器を含む。
S02	古墳後期	大谷2～4期	蓋環口縁の大型化～天井へ向り残存まで。
S03	古墳終末期	大谷5～6 b～c期	飛鳥I～II期。輪状つまみ大型蓋出現以前。
S04	古墳後期～終末期		
S05	古代I	大谷6 d～8期	出雲III～IV期。輪状つまみ出現以降～蓋を作り段階まで。
S06	古墳終末期～古代I		
S07	古代II	出雲V期	蓋消滅以降。
S08	古代I～II		
S09	古墳～平安（不詳）		
S10	奈良～平安	瓦	
C01	中世前半	中世土師器	10～14世紀。廣江編年（2006）I～4段階。
C02	中世後半	中世土師器	15～16世紀。鷺山編年（2009）環E・F類、皿d・e類
C03	中世（不詳）	中世土師器	
C04	中世	中世須恵器	東轆系・龜山・勝間田を含む。
C05	中世	中世瓦質土器	
C06	中世	国産陶器（輪削）	
C07	中世	国産陶器（瀬戸）	
C08	中世	国産陶器（吉野器系）	越前・常滑。
C09	中世	国産陶器（その他）	产地が別に分類できるもの。
C10	中世	国産陶器（不詳）	产地など詳細が分からぬもの。
C11	中世前半	中国青磁	大宰府編年 A～F期。
C12	中世後半	中国青磁	山本編年（2007）G～K期。
C13	中世（不詳）	中国青磁	
C14	中世前半	中国白磁	大宰府編年 A～F期。
C15	中世後半	中国白磁	山本編年（2007）G～K期。
C16	中世（不詳）	中国白磁	
C17	中世	中国青白磁	
C18	中世	中国青花	
C19	中世	中国陶器	
C20	中世	中國陶磁器（不詳）	中国陶磁の可能性があるが、詳細が分からぬもの。
C21	中世	朝鮮陶磁	
C22	中世	その他の貿易陶磁	
C23	中世	不詳	中世の可能性が高いが、詳細が分からぬもの。
C24	中世	瓦	
K01	近世以降	土師器	
K02	近世以降	瓦質土器	
K03	近世以降	陶器	
K04	近世以降	磁器	
K05	近世以降	真	
K06	近世以降	ガラス	
M01	鉄製品	利器	刃物類。刀の金具などが刃部と一緒に出土した場合はこちらにまとめる。
M02	鉄製品	部品・部材	釘・鍵・鎖・金具など。刀の金具などが単独で出土した場合はこちらに含める。
M03	鉄製品	容器	鉄鍋など。
M04	鉄製品	その他	用途不明のものを含める。
M05	銅製品	践抜	
M06	銅製品	その他	用途不明品も含める。
M07	その他の金属製品		金・銀・鉛製品など（例…鉛筒玉）。
M08	鉄製鍊物	ちぎり	ガラス質溶融物を含む。
M09	鉄製鍊物	製鍊系鉄鍊・製鍊滓	製の鍊工場に伴うもの。
M10	鉄製鍊物	その他の	砂鉄・鉄溶岩・再結合滓など。
M11	鍛冶関連遺物	羽口・ちぎり	ガラス質溶融物を含む。
M12	鍛冶関連遺物	鍛冶系鉄鍊・鍛冶津	極端鍛冶滓や左右筋など鍛冶工経途上の鉄塊を含む。鍛冶道路・構造に伴う製鍊系鉄塊（鍛冶原料）はこちらに分類。
M13	鍛冶関連遺物	その他	別鉄・鐵鍊（半製品）、金床石、再結合滓、鍛造削片・粒状滓など。
M14	鍛造関連遺物	羽口・ちぎり（溶解炉）	ガラス質溶融物を含む。
M15	鍛造関連遺物	鉄造塗	
M16	鍛造関連遺物	その他の	銅鏡、珊瑚、とりべ、錫型など。
M17	その他の金属生産遺物	羽口・ちぎり	ガラス質溶融物を含む。
M18	その他の金属生産遺物	鉛津	
M19	その他の金属生産遺物	その他の	鉛石、すりなど。
M20	不明金属生産遺物	羽口・ちぎり	生産した金属が不明のもの。ガラス質溶融物を含む。
M21	不明金属生産遺物	鉛津	生産した金属が不明のもの。
M22	不明金属生産遺物	その他	生産した金属が不明のもの。
W01	木製品	工具	斧柄、その他の柄の柄・ハラ・櫂・櫂・作業台・凳火具・その他・不詳など
W02	木製品	農耕・土木具	鋤・耙除・鍬・田下駄・収穫貝・杵・臼・その他・不詳など
W03	木製品	容器・食事具	頸物容器・指物・曲物・挽物・底板・杓子・匙・杓文字形・釣瓶・箸・その他・不詳など
W04	木製品	漁撈具	たも棒・ヤシ・薪・浮子・襷・ねむこし・その他
W05	木製品	武器・武具	弓・鉛・箭・刀剣装具・馬具・その他
W06	木製品	その他の生活具	筋織具・織機・編具・調度品・簪・櫛・履物・服飾具・楽器・遊戯具・日用品・天秤竿・舟材・櫂・漁船具・その他

分類記号	時期等	分類	内容説明
W07	木製品	祭祀具・埋葬具	形代・盃串・彫像・威儀具・棺材・葬具・その他
W08	木製品	建築・器具・施設等の部材	柱・梯子・杭・棒状・板状・その他
W09	木製品	木飾等	
W10	木製品	その他	加工材・切削等・燃えさし・編物類・自然木・原本・その他
W11	木製品	種子	
I01-01	石器（処理・加工工具） 【IV類】	尖頭器・細石刃・石鏟	
I01-02	石器（狩獵具【I類】）	尖頭器・細石刃・石鏟	
I01-03	石器（狩獵具【I類】）	尖頭器・細石刃・石鏟	
I02	石器（造形物【II類】）	石鍛	
I03	石器（植物質材料加工工具） 【III類】	磨石・敲石・円石・石皿・台石	
I04-01	石器（処理・加工工具 【IV類】）	スクレイバー類・ナイフ形石器・台形様石器・石匙・RF・UF	
I04-02	石器（処理・加工工具 【IV類】）	スクレイバー類・ナイフ形石器・台形様石器・石匙・RF・UF	
I04-03	石器（処理・加工工具 【IV類】）	スクレイバー類・ナイフ形石器・台形様石器・石匙・RF・UF	
I05	石器（伐採加工工具 【V類】）	磨製石斧・局部磨製石斧	
I06	石器（土掘り工具・収穫工具 【VI類】）	打製石斧・石包丁・石鏟	
I07-01	石器（工具【V類】）	楔形石器・石鎌・石鋸・鍥器・砥石	
I07-02	石器（工具【V類】）	楔形石器・石鎌・石鋸・鍥器・砥石	
I07-03	石器（工具【V類】）	楔形石器・石鎌・石鋸・鍥器・砥石	
I08-01	石器素材	原石・細石刃核素材・石核	
I08-02	石器素材	原石・細石刃核素材・石核	
I08-03	石器素材	原石・細石刃核素材・石核	
I08-04	石器素材	原石・細石刃核素材・石核	
I08-05	石器素材	原石・細石刃核素材・石核	
I09-01	剥片・チップ		
I09-02	剥片・チップ		
I09-03	剥片・チップ		
I09-04	剥片・チップ		
I09-05	剥片・チップ		
I10-01	石製品（装身具完成品）玉類		
I10-02	石製品（装身具完成品）玉類		
I10-03	石製品（装身具完成品）玉類		
I10-04	石製品（装身具完成品）玉類		
I10-05	石製品（装身具完成品）玉類		
I10-06	石製品（装身具完成品）玉類・块状耳飾・垂饰品（勾玉等）		
I11-01	石製品（装身具未完成品）玉類未完成品		
I11-02	石製品（装身具未完成品）玉類未完成品		
I11-03	石製品（装身具未完成品）玉類未完成品		
I11-04	石製品（装身具未完成品）玉類未完成品		
I11-05	石製品（装身具未完成品）玉類未完成品		
I11-06	石製品（装身具未完成品）玉類・块状耳飾・垂饰品（勾玉等）		
I12	石製品	筋神車・塊状石斧・岩偶・石刀・石棒・立石	
I13	石器・石製品（その他）	上記以外、石ではあるが石器・石製品か不明なもの	

## ＊遺物時期分類に使用した文献

赤澤秀則 1992「出土遺物・時期」『南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会

出雲市教育委員会 2009『梁山遺跡Ⅲ』

岡田裕之・土器検討グループ 2010『出雲地域における古代須恵器の編年』『出雲國の形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター

大谷晃二 1994『出雲地域の須恵器の編年と地域色』『島根考古学会誌』第11集

大谷晃二 2001『上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室』『上石堂平古墳群』平田市教育委員会

小林達雄編 2008『続観 織文土器』『続観 織文土器』刊行会

島根県古代文化センター 2006『島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成』

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川出版社

戸沢充則編 1994『縄文時代研究辞典』東京堂出版

太宰府市教育委員会 2000『太宰府奈路跡XV・陶磁器分類編一』

西 広海 1978『土器の時期区分と型式変化』『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』奈良国立文化財研究所

廣江耕史 2006『出雲の土器様相』『山陰における中世前期の諸様相—伯善・出雲を中心として— 第5回山陰中世土器検討会資料集』

深澤芳樹 2002『山田寺下層の土器について』『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所

松本岩雄 1992『出雲・隠岐』『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編』木耳社

松山智弘 1991『出雲における古墳時代前半期の土器の様相—大東式の再検討—』『島根考古学会誌』第8集

- 松山智弘 2000 「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」『島根考古学会誌』第17集  
 山本信夫 2007 「山陰の貿易陶磁と傾向－集落における消費形態及び北部九州と日本海交流に関する基礎的検討－」『波原遺跡 森広遺跡 片山遺跡』下関市教育委員会  
 山本信夫 2010 「貿易陶磁の分類・編年研究の現状と課題」『貿易陶磁研究』No.30 日本貿易陶磁研究会

は実測・写真撮影を行った。作業工程の詳細に関しては実施要領のとおりである（第3図）。

### 3. 作業実施対象資料の選定

平成23年度に作業検討チームを編成し、先述の実施要領に基づいて試験的に作業をおこなったところ、調査員1名、整理作業員1名体制で一日当たり4箱の分類が可能であることがわかった。実際に調査員1名が当該業務に専従することは他業務との兼ね合いから不可能であり、他の計量・入力・収納作業も合わせると一日当たり1～2箱が限界と思われた。特に西川津遺跡Ⅲ～Vは大量の遺物があるため早急には着手できないが、西川津遺跡I・IIは遺物量も170箱程度であり、一定期間においてある程度の成果が見込めることが予想された（表3）。これにより、西川津遺跡I・IIの出土品を再整理対象資料として選定したが、当該地点は旧河道出土品が多いため、集落の消長を示すと考えられる出土量の把握に重点を置いた。

## 第3節 事業の経過

### 1. 平成29年度の実施状況

前述のとおり、平成29年度から文化庁国庫補助事業を受けて出土品の整理作業に着手した。

平成29年度は調査員2名、整理作業員1名の体制で西川津遺跡I（昭和55年度報告分）の整理作業に着手した。作業は同じく考古基礎資料調査研究事業の墓制調査として実施していた大草丘陵古墳群（東百塚山古墳群・西百塚山古墳群）の調査の合間を見計らって対応し、細片一片に至るまで種別・時代別に再分類し、重量を計測して定量的把握を行うとともに、写真撮影・データベースの作成を進めた。最終的に掲載品10箱の分類・計測作業を完了し、非掲載品は63箱中33箱完了し、非掲載品のうち重要遺物について実測作業にも着手した。

全体的には弥生時代前期の土器が圧倒的に多く、中期後葉以降は減少傾向にあることがうかがえた。また目立った重要遺物の再発見はなかったが、綾羅木系土器を抽出し、またテーマ研究「山陰弥生文化の形成過程」との関連で、種子圧痕のサンプリング資料を15点抽出することができた。（第4章第3節）

### 2. 平成30年度の実施状況

平成30年度もほぼ同様な体制・予算により、考古基礎資料調査研究事業の墓制調査で実施した大草丘陵古墳群（西百塚山古墳群）の調査の合間に作業を進めた。当年度は西川津遺跡Iの非掲載資料のうち残りの30箱分と、西川津遺跡II（昭和57年度報告分）の掲載品22箱と非掲載品74箱について整理を進め、非掲載品のうち重要遺物の実測作業も行った。最終的に西川津遺跡Iの非掲載資料について分類・計測作業を終了した。

また石器については村田裕一氏の指導を受け、粗製剥片刃器・不定形刃器・石庖丁様石器等を抽出するなど、分類を見直したことで石器の利用方法や生産方法について新たな知見を得ることができた。

### 3. 令和元年度の実施状況

令和元年度は、昨年度に引き続き西川津遺跡Ⅱの非掲載品74箱の分類・計測作業や重要遺物の実測作業を進めた。石器についても再度村田氏の指導を受け、分類作業を終えることができた。

なお、当初当該年度で西川津遺跡Ⅱの分類・計測作業に目処をつける予定であったが、非掲載土器11箱分を次年度に持ち越すことになった。また、次年度に予定する再整理作業及び調査成果の公表に向け、報告書の体裁や内容について検討を行った。

### 4. 令和2年度の実施状況

事業の最終年度となる令和2年度は、前年度から持ち越した西川津遺跡Ⅱの非掲載土器11箱の分類・計測作業を進め、8月で作業を終えた。その後は重要遺物の実測・トレース作業を行うと共に、これまでの調査成果の整理作業を進め、年度後半に報告書作成作業を行った。

今後は、今回作成したデータベースや遺物画像を本報告書やホームページ等で公開し、地域研究の場や島根県立古代出雲歴史博物館の企画展等で積極的に活用していく予定である。

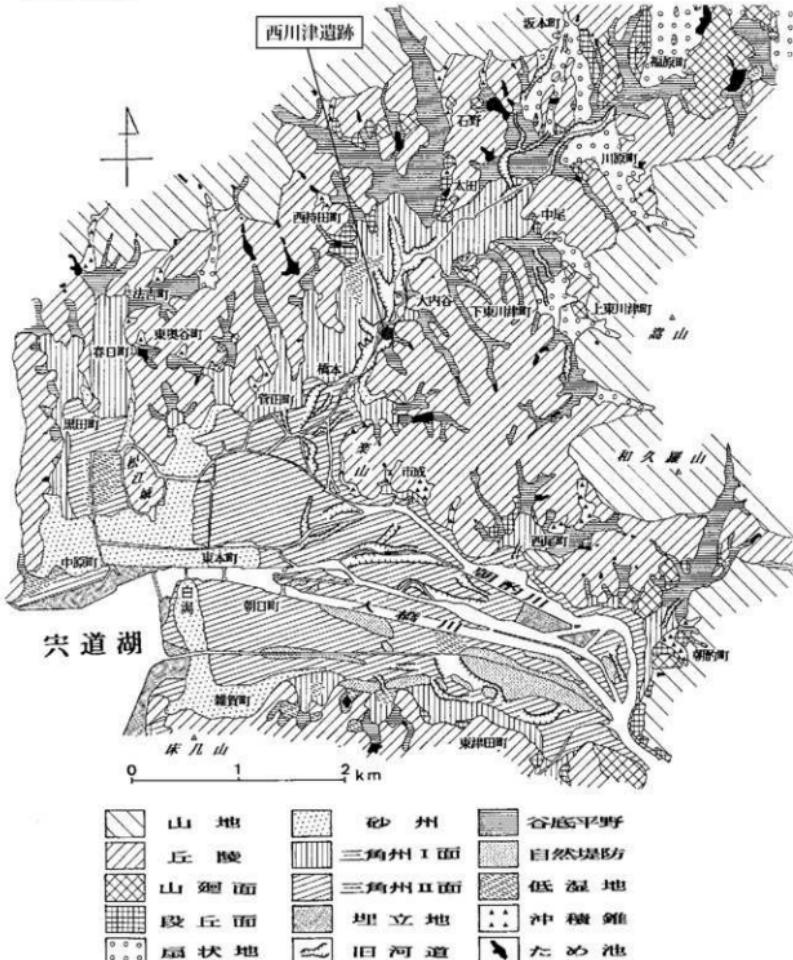
表3 朝酌川遺跡群のコンテナ数概算

報告書名	土器・貝・骨		石器		木製品		金属製品		計	掲載率
	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載		
西川津Ⅰ	4	61	1	2	5	0	0	0	73	13.7%
西川津Ⅱ	4	59	1	3	17	12	0	0	96	22.9%
西川津Ⅲ（海崎地区1）	30	138	8	6	1	10	0	0	193	20.2%
西川津Ⅳ（海崎地区2）	48	221	2	40	54		1	0	366	28.7%
西川津Ⅴ（海崎地区3）	36	523	12	81	42		0	0	694	13.0%
西川津Ⅵ	37	204	2	7	22	7	1	0	280	22.1%
西川津Ⅶ	26	115	2	1	15	11	1	0	171	25.7%
西川津Ⅷ	21	173	4	3	10	16	1	0	228	15.8%
西川津Ⅸ	8	20	2	0	5	1	1	0	37	43.2%
西川津・荷持古墳	38	135	20	16	15	4	1	1	230	32.2%
西川津・古屋敷Ⅱ	56	202	65	50	51	55	1	0	480	36.0%
タチヨウⅠ	25	172	2	13	7	10	0	0	229	14.8%
タチヨウⅡ	13	19	1	1	24	5	0	0	63	60.3%
タチヨウⅢ	78	413	1	19	67	6	1	0	585	25.1%
タチヨウⅣ	55	53	1	2	17	17	1	1	147	50.3%
原の前	16	72	1	3	10	1	3	0	106	28.3%
計	495	2,580	125	247	362	155	12	2	3,978	25.0%

## 第2章 位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

西川津遺跡は松江市西川津町に所在し、大橋川に流れ込む朝酌川の河川堆積によって形成された松江平野の北部に位置する。松江平野は宍道湖東岸に広がる東西4km、南北2.5kmの低湿な三角州平野である。



第4図 遺跡周辺の微地形分類図(1/60,000)(林1991から転載)

西川津遺跡は朝釣川と持田川の合流地点から朝釣川周辺に広がる低湿地遺跡であり、第4図の微地形分類図では遺跡のほとんどは旧河道にあたるが、朝釣川上流側の西川津遺跡鶴場地区（第6図）は三角州I面とされた北端部付近にあたり、両側には旧河道が存在し、背後には低湿地がみられる。また鶴場地区の北側では、朝釣川と持田川が合流しており、そこから北東方向に中尾付近まで三角州I面が広がっている。この三角州I面とされている範囲が、西川津遺跡の集落等の生産基盤となる部分であった可能性が考えられる。

## 第2節 歴史的環境

西川津遺跡が位置するのは、朝釣川流域及び周辺の低丘陵に古墳をはじめ多くの遺跡が分布する地域である（第5図）。

### 1. 旧石器時代

現在の地形とは大きく異なり、谷合になっていたと考えられ、この時代の遺跡は知られていない。ただし、西川津遺跡(1)やタテチョウ遺跡(3)において、尖頭器や細石刃核と考えられる石器が出土しており、付近に旧石器時代の遺跡が存在する可能性がある。

### 2. 繩文時代

気候が温暖な時期にあたり、海水面の上昇によって現在の宍道湖が山際まで広がっていたと推定される。縄文土器が出土している遺跡として、西川津遺跡、タテチョウ遺跡、島根大学構内遺跡(27)、金崎遺跡(20)、城の越遺跡(40)、削上遺跡(82)が挙げられる。西川津遺跡や原の前遺跡(2)ではアカホヤ火山灰が古宍道湖の湖底堆積層に包含されており、前期～中期にかけて宍道湖がこの付近まで広がっていたことが分かっている。島根大学構内遺跡の橋縄手地区からは、アカホヤ火山灰の純粹層を挟んで早期末～前期末にかけての遺物群が層位的に出土している。また平成20年の西川津遺跡C区の調査では、縄文時代早期の地形とともに土器が出土しており、当時の地形復元が可能である。西川津遺跡鶴場地区で確認された微高地は、その堆積状況から縄文時代後期頃の海退期における河川の堆積作用によって朝釣川周辺に形成された可能性がある。また、鶴場地区の北側上流に所在する削上遺跡では、詳細は不明だが縄文土器が出土しており、早くに陸地化したであろう上流域に縄文遺跡が存在する可能性が想定される。

### 3. 弥生時代

縄文時代の終わり頃には、宍道湖の汀線もタテチョウ遺跡付近まで後退して、河川の堆積作用によって微高地や湿地帯が形成されていったと考えられる。この時代の遺跡には、西川津遺跡・タテチョウ遺跡をはじめ貝崎遺跡(7)、橋本遺跡(4)などが知られる。西川津遺跡のこれまでの調査では前期の貝塚や大溝、前期～中期の掘立柱建物等が検出され、遺物は前期～中期の大量の土器や木製農耕具、石器、骨角器等が出土している。タテチョウ遺跡では前期～後期の土器・石器・木製品が出土している。両遺跡からは土笛や漆塗櫛、貝輪、緑色凝灰岩製の管玉等の装身具、分銅形土製品、流水文銅鐸等の遺物が出土し、また木器・石器・玉類の未成品も出土するなど、弥生時代の拠点集落の様相を備えた遺跡といえ、朝釣川周辺の微高地に存在した集落の一端が明らかになりつつある。

集落の様相に対して、この時代の墳墓や水田等の状況は不明であるが、低地北側の丘陵に立地す



第5図 西川津遺跡と周辺の遺跡 (1/15,000)

表4 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	西川津遺跡	24	薬師山古墳	47	前田古墳	70	家ノ脇遺跡
2	原の前遺跡	25	馬込山古墳群	48	一の谷古墳	71	長池Ⅰ遺跡
3	タテチョウ遺跡	26	苅捨古墳・堂頭山城跡	49	家の上古墳	72	長池Ⅱ遺跡
4	橋本遺跡	27	島大構内遺跡	50	J 1 6 遺跡	73	宮ノ前遺跡
5	納佐遺跡	28	道仙古墳群	51	貝崎南古墳	74	田尻古墳
6	古屋敷古墳	29	持田川流域条里遺跡	52	I68 古墳	75	法事前遺跡
7	貝崎遺跡	30	深田古墳群	53	I67 古墳	76	祖田畠遺跡
8	柴古墳群	31	川津城跡	54	J 5 9 遺跡	77	古屋敷Ⅱ遺跡
9	太田古墳群	32	柴遺跡	55	大佐遺跡	78	先田遺跡
10	福山古墳群	33	J15 遺跡	56	藤ヶ谷遺跡	79	大内谷奥遺跡
11	国石古墳群	34	大内谷古墳群	57	国石遺跡	80	ドンド遺跡
12	大源古墳群	35	貝崎B遺跡	58	杉谷古墳群	81	大内谷遺跡
13	尾山横穴群	36	米田遺跡	59	杉谷遺跡	82	削上遺跡
14	松の前古墳群	37	140	60	宮尾古墳群	83	上井ノ森遺跡
15	小丸山古墳群	38	141	61	坂口古墳	84	京田遺跡
16	和田上遺跡	39	142	62	鶴場遺跡	85	柏木遺跡
17	宮垣古墳群	40	城の越遺跡	63	柴Ⅲ遺跡	86	松江城下町遺跡
18	納佐池遺跡	41	宮田古墳群	64	貝先遺跡	87	松江城下町遺跡
19	川津古墳群	42	浜弓古墳群	65	番貫Ⅰ遺跡	88	井上古墳
20	金崎古墳群	43	上浜弓古墳群	66	番貫Ⅱ遺跡	89	空山古墳
21	堤壠遺跡	44	山崎古墳	67	後谷Ⅰ遺跡	90	千原遺跡
22	J 1 4 城跡	45	柴Ⅱ遺跡	68	長池Ⅲ遺跡		
23	首田小丸山古墳	46	後田古墳	69	後田Ⅱ遺跡		

る沢下遺跡（島根県 2008）で四隅突出型を呈す弥生墳墓が確認されており、朝酌川遺跡群の弥生集落との関連性が注目される。

#### 4. 古墳時代

朝酌川流域の低丘陵には多くの遺跡が分布し、出雲地方における古墳の密集地の一つとなっている。前期に遡る古墳は少ないが、柴尾2号墳や苅捨古墳(26)が知られる。苅捨古墳は22×20 mの楕円形を呈する円墳で、舟形木棺2基・箱形木棺1基が検出され、中心の第一主体部からは銅鏡2面・水晶製勾玉1点・碧玉製管玉2点・ガラス玉74点が出土している。この古墳は規模や副葬品からみて朝酌川流域の首長墓と考えられるものである。中期以降になるとさらに多くの古墳群が出現する。大部分は須恵器を伴う時期のものであり、山崎1号墳(44)、柴古墳群(4基)(8)、馬込山古墳群(4基)(25)、金崎古墳群(11基)(20)、上浜弓古墳群(9基)(43)、古屋敷古墳(6)等があり、一辺20 m以上の方墳が相当数築造されるようになる。山崎1号墳は一辺15 mの方墳で、割竹形木棺を直葬し溝水溝を伴う埋葬施設が検出されており、副葬品として鉄刀・鉄劍や長頸鏡など多数の鉄器が出土している。また、この時期の古墳群の中で注目されるのは金崎古墳群である。1号墳は全長35 mの前方後方墳で、小形の竪穴式石室をもち、副葬品には倣製内行花文鏡、子持勾玉等の玉類、劍、矛等の武器、各種の須恵器があり、朝酌川流域一帯の首長墓と考えられる。

後期には朝酌川流域の古墳は不明であるが、北側の丘陵には太田古墳群(9)や薄井原古墳といっ

た横穴式石室をもつ古墳が築造される。特に薄井原古墳は全長 50 m の前方後方墳であり、当地域最大級の古墳である。

集落遺跡は調査事例が少なく、柴遺跡(32)や堤廻遺跡(21)が知られるのみである。朝釣川遺跡群の河川堆積物にもこの時代の土器が大量に含まれていることから、川治いには未発見の遺跡が存在する可能性が高いが、現段階では詳細不明である。

## 5. 古代

733(天平 5)年に作成された『出雲国風土記』によれば、奈良時代の西川津町一帯は島根郡に属し、郡家は山口郷内に比定されている。郡家の所在地には諸説あるが、松江市福原町の芝原遺跡では規則性をもつ掘立柱建物群が発見されており、郡家の可能性が指摘されている。朝釣川は、『出雲国風土記』には水草川とあり、その水源は 2 つで、途中で合流し入海(宍道湖)に注いでいたとする。なお、現在は朝釣町で大橋川と合流している。この時期の遺構には、タテチョウ遺跡の船着き場と推定されている杭列があり、付近からは「驛」と墨書きされた須恵器が出土している。柴Ⅲ遺跡(63)では平安時代初頭の掘立柱建物が十数棟確認されており、古屋敷Ⅱ遺跡では掘立柱建物や縄文陶器が出土するなど平安時代後期の集落跡とみられる。

## 6. 中世

西川津地域は中世には「長田郷」と呼ばれるようになった。遺跡としては、川津城跡(31)や堂頭山城跡(26)などの小規模な山城や、馬込山古墓群(25)、上浜弓古墳群(43)等の中世末～近世にかけての古墓が知られている。近年の調査で朝釣川遺跡群からも古代末～中世の陶磁器や土師器などが出土しており、また、西川津遺跡 D 区の調査では建物群が検出されるなど、朝釣川を取り巻く丘陵縁辺部にこの時期の集落が営まれていたことが明らかとなった。

### 【参考文献】

- 石橋逸郎・近藤正 1971 「松江・馬込山古墓群」『鳥取県埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ 鳥取県教育委員会
- 田中義昭 1996 「弥生時代拠点集落としての西川津遺跡」『山陰地域研究』12号 島根大学汽水域研究センター
- 田中義昭 2011 「弥生時代拠点の研究」新泉社
- 鳥取県埋蔵文化財調査研究センター 1997～2005 『鳥取県埋蔵文化財調査研究報告』1～8
- 鳥取県教育委員会 1979～1992 『タテチョウ遺跡発掘調査報告書』I～IV
- 鳥取県教育委員会 1980～2003 『西川津遺跡発掘調査報告書』I～IX
- 鳥取県教育委員会 1995 『原の前遺跡発掘調査報告書』
- 鳥取県教育委員会 2008 『恵谷古墳群・岩鼻古墳群・上講武殿山城跡・砥石遺跡・沢下遺跡・元宮遺跡』
- 鳥取県教育委員会 2011 『堀崎古墳・西川津遺跡』
- 鳥取県教育委員会 2011 『金ヶ谷遺跡 4 区・一の谷古墳』
- 鳥取県教育委員会 2011 『山辺遺跡・鞍切遺跡・米坂遺跡・貝先遺跡』
- 鳥取県教育委員会 2013 『西川津遺跡・古屋敷Ⅱ遺跡』
- 林正久 1991 「松江周辺の沖積平野の地形発達」『地理科学』第 46 卷第 2 号
- 松江市教育委員会 1984 『山崎古墳』
- 松江市教育委員会 1993 『上浜弓 1 号墳発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会・松江市教育文化振興財團 1994 『柴尾遺跡発掘調査報告書 (I)』
- 松江市教育委員会・松江市教育文化振興財團 2011 『西川津遺跡 C 区・古屋敷Ⅱ遺跡』
- 松江市土地開発公社・松江市教育委員会 1986 『堤廻遺跡』
- 松江市 2012 『松江市史 史料編 2 考古資料』
- 山本清 1982 『古代』『川津郷土史』川津公民館

## 第3章 西川津遺跡の再整理

### 第1節 遺跡の概要と過去の調査及び報告書作成の概況

#### 1. 遺跡群の発見

朝酌川流域では、中流域の水田耕作や小規模な水道工事等の際に土器が発見されることが古くから知られていた。また下流域の水門工事の際には多量の土器群が出土したことがあり、遺跡が広範囲にわたって存在することが予想されるようになった。こうした中、1949年に山本清氏によって下流域の小字名豊町に所在するタテチョウ遺跡の試掘調査が行われた結果、弥生時代前期の土器を中心とした各時代の遺物が出土する低湿地遺跡であることが明らかとなった。

一方で、1967年には中流域において国道431号の島根町大芦に向かう道路の三叉路付近の電話線埋設工事で出土した土器群が注目された。それらは弥生時代前期～後期の土器、磨製石斧、環状石斧未成品、石鏃、古墳時代の土師器等で、これらの発見を契機として、周辺一帯は西川津遺跡として認識されるようになった。

#### 2. 朝酌川河川改修に伴う発掘調査（第6図、表5）

1977年からは、タテチョウ遺跡（島根県1979ほか）を皮切りに、朝酌川の河川改修事業に伴い本格的な発掘調査が実施された。そのうち西川津遺跡は1980年から開始され、2001年まで数次にわたり断続的に調査が実施された（島根県1980ほか）。特に海崎地区の調査では、弥生時代前期及び中期の生活面が残存しており、掘立柱建物や貯木場と考えられる杭で囲まれた施設跡、貝塚といった遺構が残され、木製農耕具類や鳥形木製品をはじめとする大量の木製品、磨製石器類、各種の骨角器、土笛、分銅形土製品、アツソデガイ製の貝輪といった遺物のほか、人骨、獸骨、魚骨といった動物遺存体やドングリ、トチノミ、クルミ、ウリ、炭化米といった植物遺存体も出土した（島根県1987・1988・1989）。このように低湿地遺跡という条件にもよって弥生時代の多種多様なものが残されるなど、山陰を代表する弥生時代遺跡であるとともに、西川津遺跡＝弥生時代の拠点集落としてのイメージを我々に植え付けた調査でもあった。

その後の調査（II区～VII区）では、それらを裏付けるかのように弥生時代前期の人面付き土器や銅鑄片が出土するなど、弥生時代を中心としながら縄文時代から近世にかけての様々な遺物が出土し（島根県1999・2000・2001・2003）、西川津遺跡の大規模な弥生集落跡というイメージが定着していった。ただし、弥生時代前期を中心とする明確な遺構は、海崎地区以外の調査ではほとんど確認されず、集落本体の実態は不明な状態が続いている。

1992年の調査では、タテチョウ遺跡と西川津遺跡の両遺跡の間から原の前遺跡が確認され、朝酌川に沿った流域一帯に大規模な遺跡が存在することが判明した（島根県1995）。このことから、現在では各遺跡を総称して朝酌川遺跡群と呼称している。

#### 3. 松江島根線道路改築事業に伴う発掘調査（第6図、表5）

朝酌川の河川改修事業に伴う調査が完了した後、新たに松江島根線道路改築工事によって、西川津遺跡の調査が再開されることになった。この調査はこれまで朝酌川に並行して行ってきたものとは異なり、川を横断する形で調査区を設定しており、その結果、これまでの調査では得られなかつた成果があった。2007年の調査（C区）では、朝酌川周辺の縄文時代早期の面が確認され、土器



第6図 朝釣川遺跡群の調査区配置図 (1/7500) (島根県 2013 より引用、一部改変)

や杭等が出土した（島根県 2011）。また、D区では中世の掘立柱建物が確認され、河川周辺の状況が明らかとなった（島根県 2011）。また 2008 年の B 2 区の調査では、弥生時代前期の貝層が残存しており、弥生時代前期の生活面の様相が改めて確認された（島根県 2011）。さらに 2009 年～2011 年の鶴場地区的調査（A・B 1 区）では、朝酌川西岸の微高地上から弥生時代前期以降の遺構が検出され、前期及び後期の環濠の可能性もある大溝の存在が確認されるなど、初めて西川津遺跡における弥生時代集落本体の様相の一端が明らかとなった（島根県 2013）。

表 5 朝酌川遺跡群の調査履歴

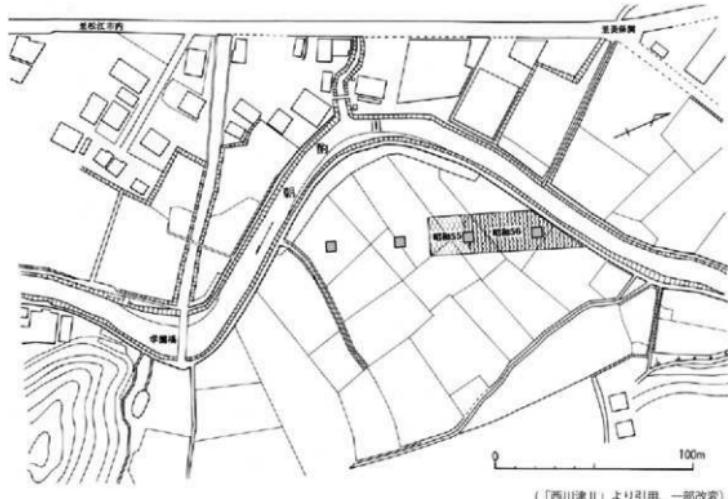
調査年度	調査主体	調査遺跡	調査区名	調査地点 (西川津町)	主な遺構・遺物	報告書(刊行年)
1974	松江市教育委員会	タテショウ遺跡		1112 外	弥生土器、円筒埴輪	タテショウ遺跡 (2020 年 3 月)
1977	島根県教育委員会	タテショウ遺跡		橋本堅町	磨製石剣、石舌、土馬、土笛	タテショウ遺跡 I (1979 年 3 月)
1978	島根県教育委員会	タテショウ遺跡		橋本堅町		タテショウ遺跡 I (1979 年 3 月)
1979	島根県教育委員会	西川津遺跡	Ⅲ区、宮尾坪内地区	宮尾坪内	試掘調査	
1980	島根県教育委員会	西川津遺跡	Ⅲ区、宮尾坪内地区	宮尾坪内 558	鳥形木製品、漆塗上器	西川津遺跡 I (1980 年 12 月)
1981	島根県教育委員会	西川津遺跡	Ⅲ区、宮尾坪内地区	宮尾坪内 588	撫頭、又蹠、斧柄	西川津遺跡 II (1982 年 3 月)
1983	島根県教育委員会	西川津遺跡	海崎地区	609-20 外	貝塚、貯木場、骨角器、木製品	西川津遺跡 III (1987 年 3 月)
1984	松江市教育委員会	タテショウ遺跡		1361-1	布目瓦、建築部材	タテショウ遺跡 (1985 年 3 月)
1984	島根県教育委員会	タテショウ遺跡		橋本堅町	弥生土器、木製品	タテショウ遺跡 II (1987 年 3 月)
1984	島根県教育委員会	西川津遺跡	海崎地区	大海内崎	鳥形木製品、玉類	西川津遺跡 IV (1988 年 3 月)
1985	島根県教育委員会	タテショウ遺跡		橋本堅町 1363-1	撫頭、又蹠	タテショウ遺跡 II (1987 年 3 月)
1985	島根県教育委員会	西川津遺跡	海崎地区	大海内崎	貝塚、貯木場、鉄矛、斎串	西川津遺跡 V (1989 年 3 月)
1987	島根県教育委員会	タテショウ遺跡		橋本堅町 1358-3	斎申、塔婆、祓綱笠	タテショウ遺跡 III (1990 年 3 月)
1988	島根県教育委員会	タテショウ遺跡		橋本堅町 1125-3	木製高环、斎申、土笛	タテショウ遺跡 III (1990 年 3 月)
1990	島根県教育委員会	タテショウ遺跡		1261	外来系土器	タテショウ遺跡 IV (1992 年 3 月)
1990	松江市教育委員会	タテショウ遺跡		1262	弥生土器	市教委 1991-1992
1991	島根県教育委員会	タテショウ遺跡		1127	外来系土器	タテショウ遺跡 IV (1992 年 3 月)
1992	島根県教育委員会	原の前遺跡		1164-9	撫頭、人形代、噴砂、4 世紀の 護岸跡	原の前遺跡 (1995 年 3 月)
1993	島根県教育委員会	原の前遺跡		1164-9		原の前遺跡 (1995 年 3 月)
1994	島根県教育委員会	西川津遺跡	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ 区	647-1	土笛、腰 (こて)、板碑形塔婆	西川津遺跡 VII (2000 年 3 月)
1995	島根県教育委員会	西川津遺跡	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ 区	1165	雄 (そり)、杵	西川津遺跡 VII (2000 年 3 月)
1996	島根県教育委員会	西川津遺跡	Ⅱ・Ⅲ区	1170-1・563-1	杭、弥生土器	西川津遺跡 VI (1999 年 3 月)
1997	島根県教育委員会	西川津遺跡	V区	595-2・563-1	銅鐸、弥生後期の護岸跡?	西川津遺跡 VI (1999 年 3 月)
1998	島根県教育委員会	西川津遺跡	V区	600	人面付土器、貝塚	西川津遺跡 VIII (2001 年 3 月)
1999	島根県教育委員会	西川津遺跡	V区	600	灰釉陶器、5 世紀の護岸跡	西川津遺跡 VIII (2001 年 3 月)
2001	島根県教育委員会	西川津遺跡	Ⅲ・IV区	560・609	杭列、弥生土器	西川津遺跡 IX (2003 年 3 月)
2006	松江市教育委員会	西川津遺跡	C区	南崎 596-7・597- 6-7・8・598-1 ・599-4、鶴場 6 28-1	杭列?、繩文土器、弥生土器	西川津遺跡 C 区・古層敷Ⅱ道路 (2011 年 3 月)
2007	島根県教育委員会	西川津遺跡	C区		繩文早期の溝、石組遺構	菊捨古墳・西川津遺跡 (2011 年 3 月)
2008	島根県教育委員会	西川津遺跡	B・D区		銅薄片、弥生前期の貝層、卜骨	菊捨古墳・西川津遺跡 (2011 年 3 月)
2009	島根県教育委員会	西川津遺跡	鶴場地区	鶴場 627-2・9.10	弥生の大溝、土笛、ガラス勾玉	西川津遺跡・古層敷Ⅱ道路 (2013 年 3 月)
2010	島根県教育委員会	西川津遺跡	鶴場地区	鶴場 628-1	弥生前期の溝、絵画土器	西川津遺跡・古層敷Ⅱ道路 (2013 年 3 月)
2011	島根県教育委員会	西川津遺跡	鶴場地区	鶴場 624-13, -14-16	弥生前期の溝、木器未製品、漆	西川津遺跡・古層敷Ⅱ道路 (2013 年 3 月)

## 第2節 昭和55・56年度の調査

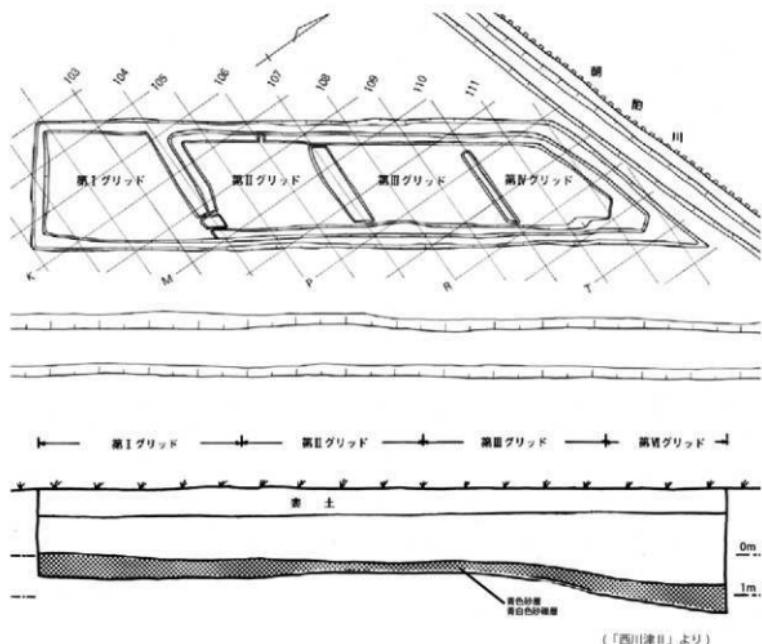
第1章で述べたように、今回の再整理作業は、西川津遺跡の昭和55・56年度調査出土品を対象とした。この調査は初めて西川津遺跡で行われた本格的な発掘調査であり、コンテナにして総数169箱分の遺物が出土している。調査個所は朝酌川遺跡群とした朝酌川の中流域で、学園橋と嵩見橋の間の西川津遺跡Ⅲ区(宮尾坪内地区)内にあたる。また、大溝など弥生前期から後期にかけての集落遺構が検出された鶴場地区や海崎地区は、上流に約400m離れた位置にある(第6図)。

調査は、まず昭和54年度に対象地に計4個所のグリッドが設定されて試掘調査(第1次調査)が行われ、遺物の出土の多かった上流部を対象に、東西15m、南北72.5mの約1,000m<sup>2</sup>の調査区が設定された(第7図)。昭和55年度の第2次調査は、調査区を20m毎に4つのグリッドに分けて、7月7日から10月5日までの期間で行われた(第8図)。遺物包含層である青白色砂礫層から足の踏み場もない程の遺物が1mの厚みをもって堆積するという予想以上の出土量であったため、調査範囲を調査区の1/3(第Iグリッド)に留め、残りの2/3の部分が翌年に持ち越されることとなった。明確な遺構は確認されなかったが、遺物は青白色砂礫層(12層)を中心に上層の青色砂層(9層)や暗青灰色粘砂層(11層)からも出土した(第9図)。基本的に出土状況を記録しながら遺物の取り上げが行われているが、層位的には同一土層内に各時代、各時期のものが上下混在している状況であった。弥生土器のほか縄文土器や土師器類、農耕具等の木製品がコンテナ73箱分出土しており、うち10箱が掲載分、63箱が非掲載分である。報告書は「西川津遺跡発掘調査報告書Ⅰ」として昭和55年12月に刊行されている(島根県 1980)。

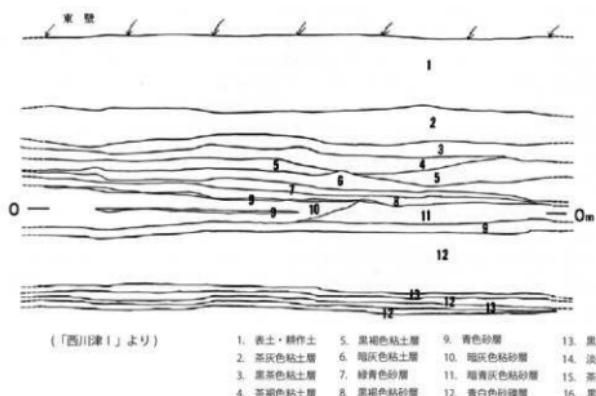
翌年の昭和56年度には、第3次調査として昨年度から持ち越した残り2/3の部分(第II~第IV



第7図 昭和55・56年度の調査区



第8図 昭和55・56年度調査の調査グリッド及び土層模式図



第9図 昭和55年度調査区の土層図

グリッド)の調査が行われた。調査は6月5日から着手され、第2次調査と同様に青色砂層や青白色砂礫層から弥生土器を中心とした遺物が出土している。量的には上層から順に古い時代のものへと続く傾向があるが、層位的には同一土層に各時代・各時期の遺物が混在しており、河川の氾濫に

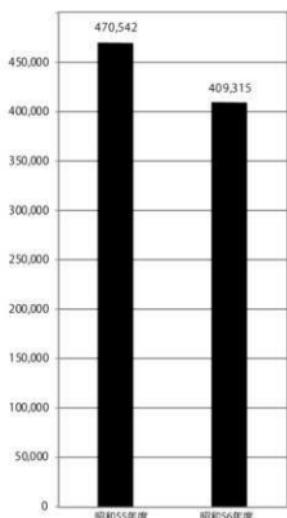
より集積された状況であることがうかがえる。出土状況の図化や出土位置の記録は行われていないが、遺物は縄文土器、弥生土器をはじめコンテナ 96 箱分出土しており、うち 22 箱が掲載分、74 箱が非掲載分である。また遺構としては、第Ⅱグリッドで石組み遺構と杭が検出されている。石組み遺構は黒色粘土層（13 層）上面で拳大から人頭大の河原石が集積したもので、層位的に縄文時代に遡る可能性も考えられている。杭は直径 5～10cm のものが不規則に打ち込まれており、層位的に大半は古墳時代以降のものとされる。報告書は「西川津遺跡発掘調査報告書Ⅱ」として昭和 57 年 3 月に刊行されている（島根県 1982）

### 第3節 出土遺物の再整理

#### 1. 出土遺物の統計分析

西川津遺跡の昭和 55・56 年度調査出土遺物に関しては、第 1 章で述べた方法により掲載・非掲載を問わず総べての遺物を分類・計量してデータベース化を行い、さらに非掲載遺物のうち重要遺物については図化を行った。

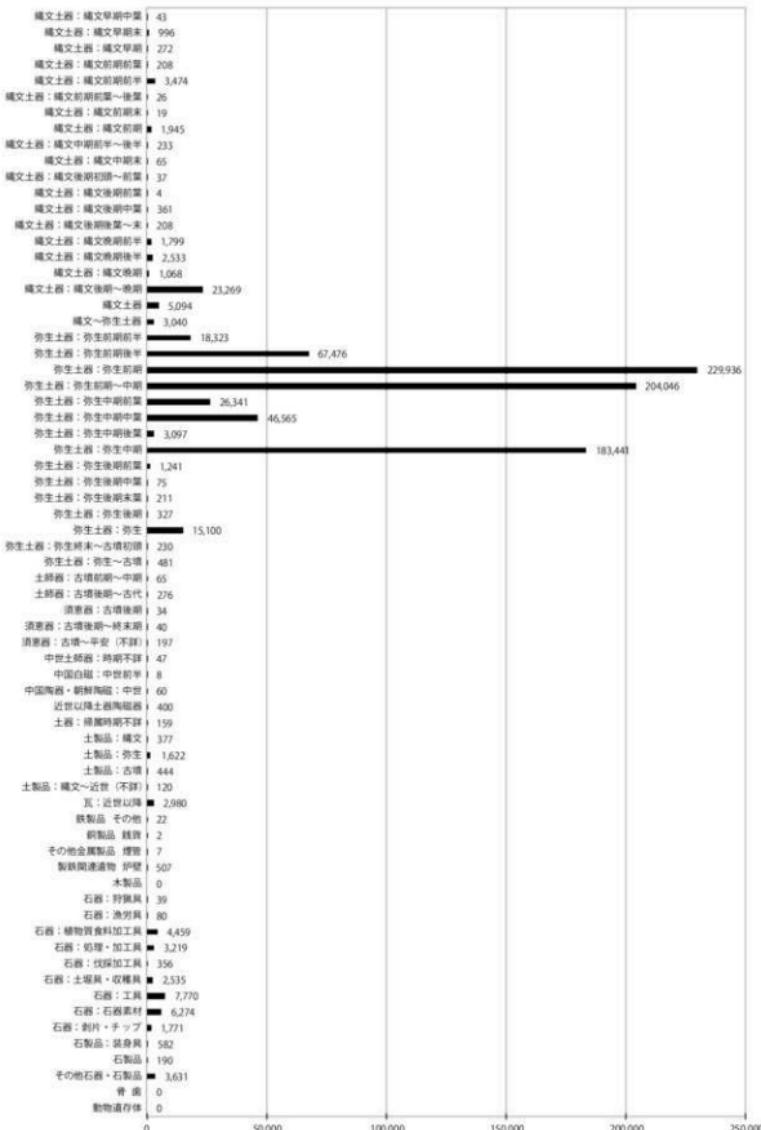
第 10 図は、昭和 55・56 年度調査で出土した遺物の年度別総重量（木製品を除く）である。55 年度が約 470kg（うち非掲載品 451,756 g）、56 年度が約 409kg（うち非掲載品 392,199 g）で、総量は約 879kg（うち非掲載品 843,955 g）となる。一見してわかるとおり、55 年度調査の方が調査面積は狭小であるのにかかわらず（調査区面積 1,100m<sup>2</sup> のうち約 300m<sup>2</sup>）、重量的には約 60kg も上回っていることが明らかとなった。元からして当該年度の調査は朝酌川の氾濫原を対象としており、調査区内における遺物分布の濃密度は氾濫原での遺物の集積状況を反映していることが想定される。一方で、『西川津遺跡 II』（1982）によれば、「調査区の上流部では遺物の出土が認められないので、本遺跡の範囲は宮尾坪内地区に限定されることが判明した。」とされ、上流部は遺物量が減少することが示唆されるなど、上流の海崎地区や鶴場地区との関係を含め西川津遺跡の拠点集落としての集落構造を反映している可能性もあり興味深いといえる。



第 10 図 昭和 55・56 年度調査の  
年度別遺物出土量（単位：g）

続いて第 11 図は、当該年度出土遺物の木製品を除いた種別毎の出土量である。詳細な帰属時期が判定できなかった資料も多いが、一見して弥生時代前期から中期にかけて遺物量が突出することが瞭然である。具体的には土器・土製品の総量約 845kg のうち、弥生時代前期～中期に属すると判定できた土器の出土量は約 779kg に及び、実に総量の 9 割以上が当該時期の土器となる。

細かく出土量の推移を見ると、古くは縄文時代早期中葉から遺物が認められ、早期末から前期にかけて出土量が増加し、その後は増減を繰り返しながら、晩期に遺物



第11図 昭和55・56年度調査の遺物出土量(単位:g)

量が増加することがうかがえる。弥生時代前期前半にはさらに出土量が増え、前期後半に最も大きなピークがあることを指摘できる。中期前葉には一旦出土量が減少するが、中期中葉には再び増加に転じる中、中期後葉には急減する。後期以降は相対的に低調といえ、古代以降も出土量は一定程度認められるが、各時期で300 gを超えることはないのが明らかとなった。

このような出土量の変遷は、第4章で他地域や他地区の状況と比較しながら改めて検討を試みたい。また、石器については別項を設けて検討する。

## 2. 土器・土製品（非掲載）の図化

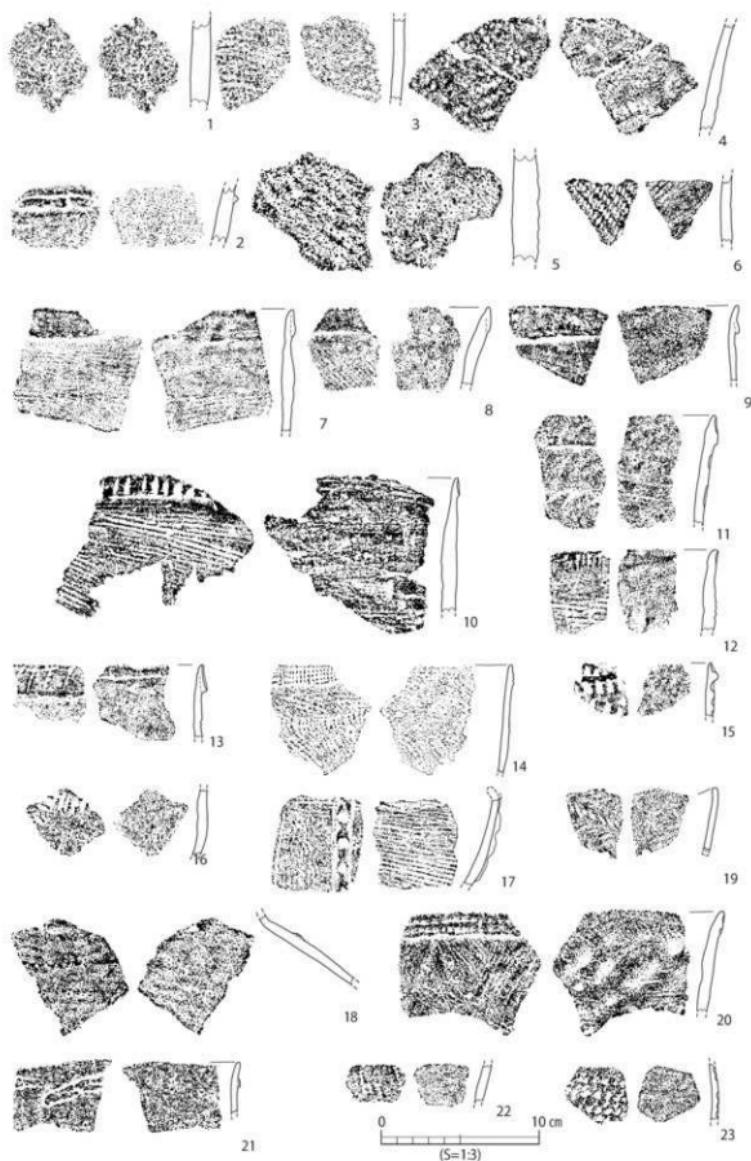
先述のとおり、非掲載資料のうち、比較的遺存状況の良好な資料について図化を行った。以下時代順に概要を述べる。

### (1) 繩文土器

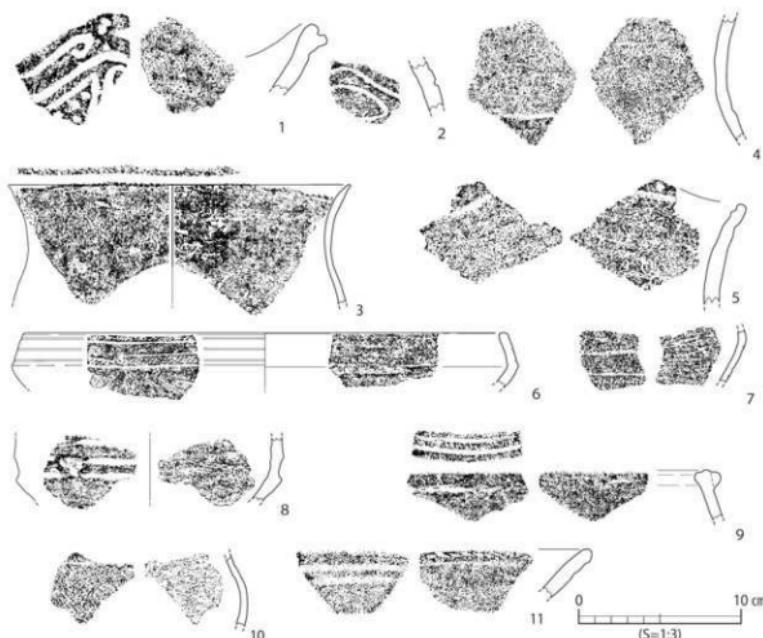
第12図は縄文時代早期～前期の土器である。1～6は早期の深鉢で、1は押型文土器で、黄島式に相当するとみられる。2は口縁下方の破片とみられ隆帯が貼り付く。3～6は胎土中に纖維が含まれるもので、外面に縄文が施される。1が早期中葉、2～6は早期末に相当するとみられる。7～21は前期の深鉢である。7～18は前期前半の西川津式で、7～15は口縁に隆帯を貼り付けて肥厚させている。また8は、内面の2箇所に果実種子の圧痕が認められる。19は半截竹管による連続刺突文が施される。北白川下層式に相当するとみられる。20・21は口縁直下に隆帯が付き、連続刺突文が施される。22・23は小片のため器種不明だが、22は外面に縄文が施され、23は3連の押し引き刺突文が施される。羽鳥下層式とみられる。

第13図は中期～後期の土器である。1・2は中期の深鉢で、外面に太めの沈線や刺突が施される。3～5は後期の深鉢で、3は肥厚しない口縁端部に縄文が施される。4は頸部に段をもち、5は口縁内外面に浅い凹線文が施される。3・4は沖丈式、5は元住吉山II式に併行するとみられ、3・4は後期中葉、5は後期後葉～末に相当する。6・7は浅鉢である。沖丈式に併行するとみられる。8は壺形の形状とみられ、貝殻復縁圧痕や凹線文が施される。宮窓式に相当する。9～11は器種不明品で、9は口縁に突帯がつき、上面に縄文や沈線が施される。10は薄手の胴部に細い縄文が施される。11は口縁外面に凹線文、内面に刻み目が施される。10は沖丈式、11は元住吉山II式に属するとみられ、後期中葉～後葉に相当する。

第14図・第15図1～13は晩期の土器である。第14図1～8は晩期前半期とみられる深鉢で、1は口縁が大きく外反する。2は頸部に強いナデがあり、滋賀里IIIa式併行とみられる。3は波状口縁の外面に沈線が施される。4は口縁端部に刻み目をもち、内面に連続刺突文が施される。5は頸部がくびれ、口縁端部に刻み目に入る。6は口縁が内湾気味に立ち上がり、端部に刻み目をもつ。7は外面に半截竹管による連続刺突文が施される。いずれも篠原式中・新段階～谷尻式併行期に相当するとみられる。第14図9～17・第15図1～5は突帯文土器である。第14図9～17は突帯に刻み目をもつもので、11～13・16は口縁端部にも刻み目が入る。第15図1～4は突帯に刻み目を有しないもので、3・4は口縁端部に接するように突帯がつく。5は壺形状の土器の胴部とみられ、頸部との境に無文の突帯がつく。6～8は詳細な帰属時期の不明な深鉢である。6・7は条痕地の粗製土器で、6は口縁をつまみ出すように外反させている。いずれも晩期に属するものとみられる。8は口縁端部に明瞭な面をもつ。また7は、内面にイネ糊とみられる圧痕がある。



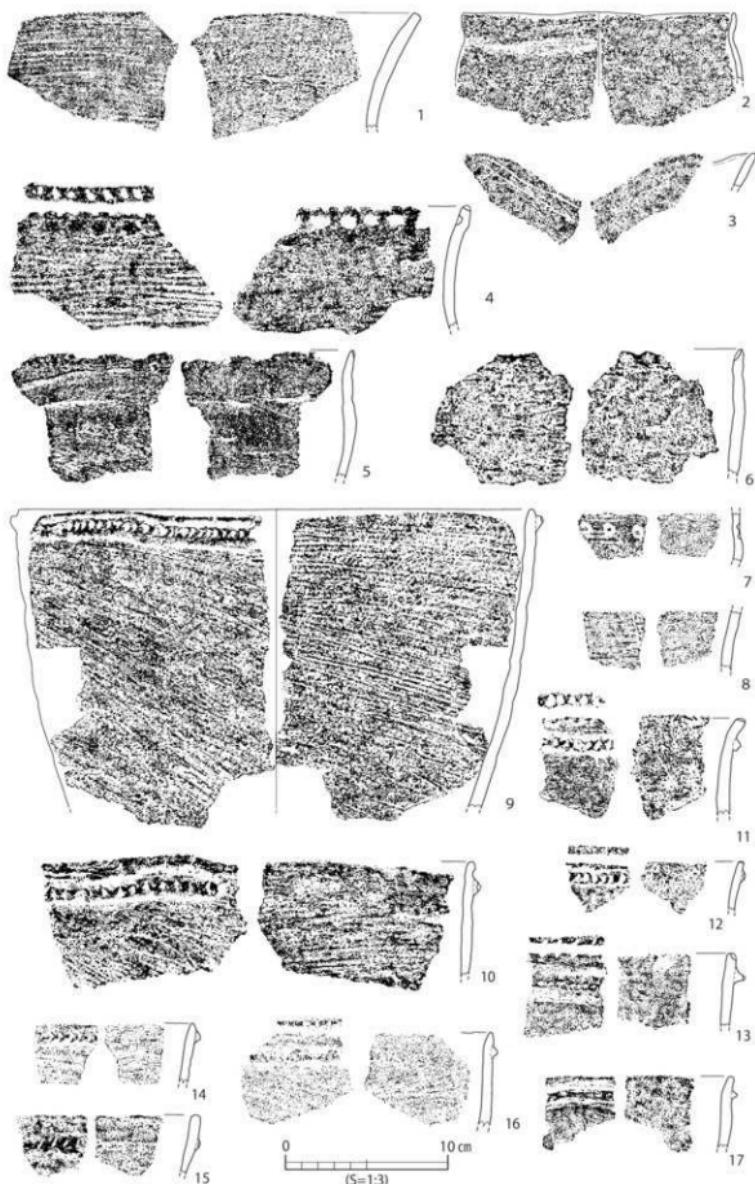
第12図 昭和55・56年度調査出土縄文土器(1)



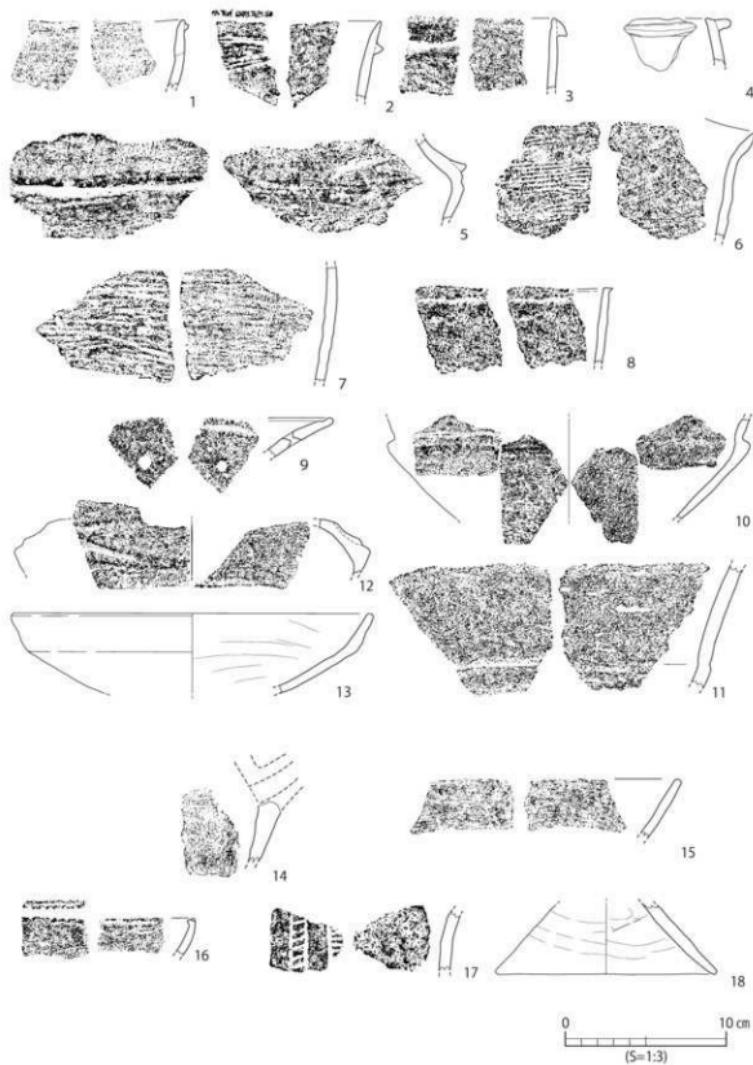
第13図 昭和55・56年度調査出土縄文土器(2)

第15図9～13は晩期の浅鉢である。9・10は無文の精製浅鉢とみられ、9は口縁内面に沈線が施され頸部に穿孔がある。11は胴部に段があり、12は胴部が「く」の字に屈曲する。13は口縁が短く外反し立ち上がる。9～12が晩期前半、13は晩期後半に相当するとみられる。14は注口土器で、沈線間に刻み目が施される。後期末～晩期初頭とみられる。15は晩期の鉢形土器である。16～18は小片のため詳細時期や器種が不明なものである。16は口縁端部に刻み目が施され、17は沈線間に刻み目をもつ。18は脚部として復元したが定かでない。

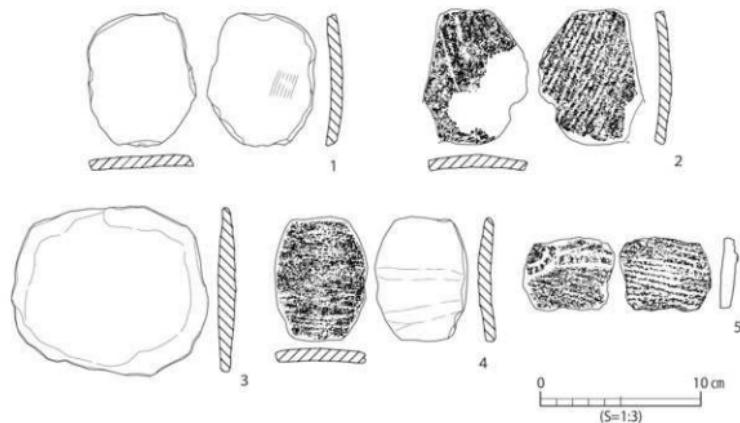
第16図は土製品である。いずれも土器を再利用した土製円盤で、1・2・4は側面を部分的に抉るような打ち欠き痕が認められる。5は表面に刻み目をもつ隆帯が貼り付けられており、前期の土器片を再利用したものと考えられる。



第14図 昭和55・56年度調査出土縄文土器(3)



第15図 昭和55・56年度調査出土縄文土器(4)

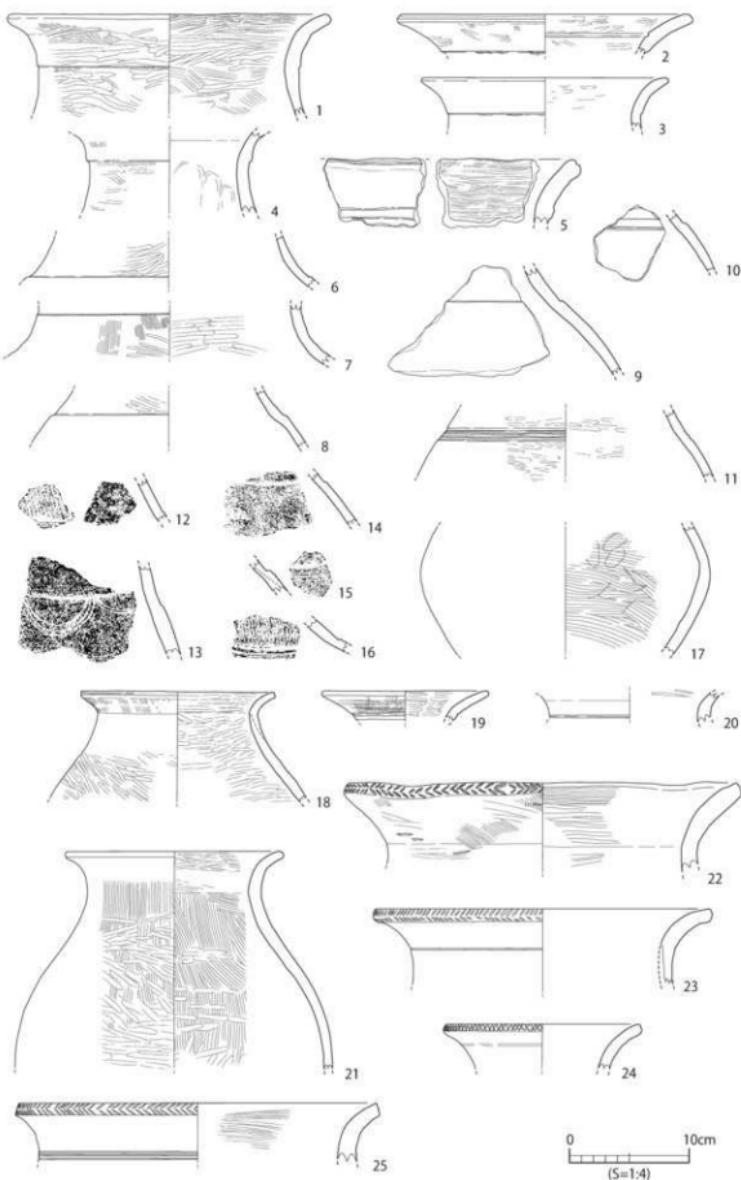


第16図 昭和55・56年度調査出土縄文土器(5)

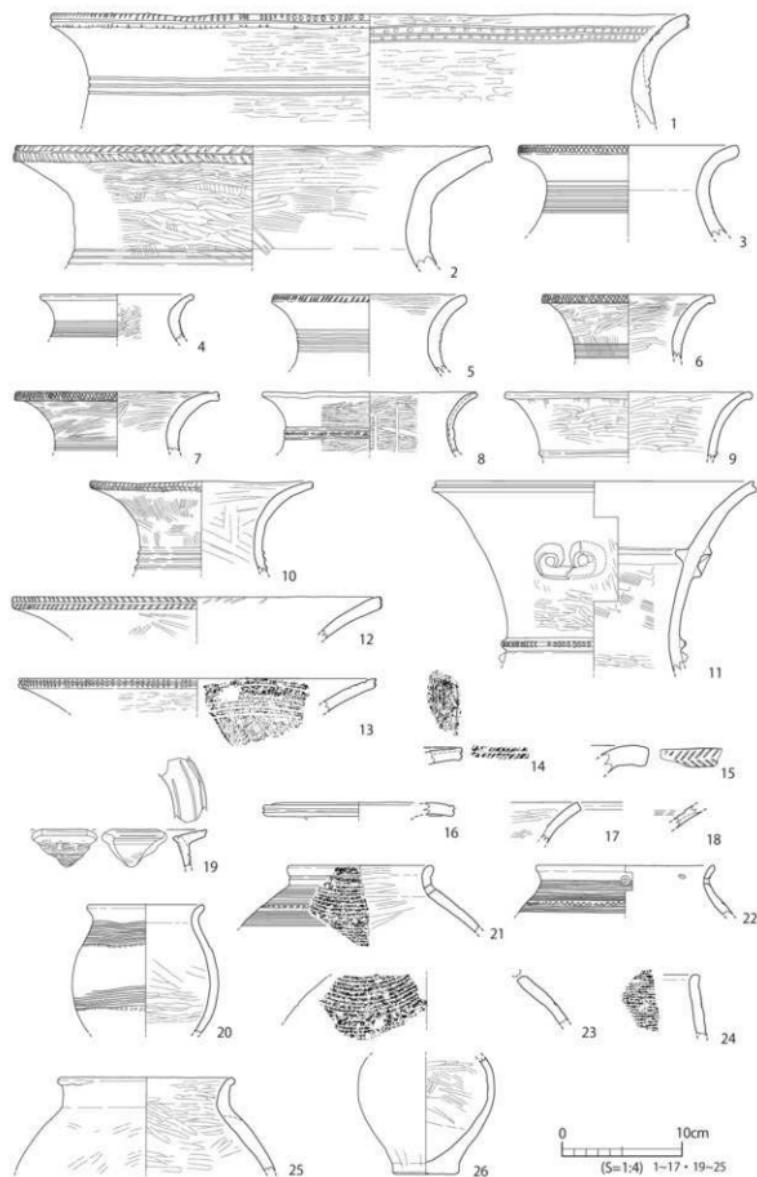
## (2) 弥生土器

第17図～第37図は弥生土器である。第17図1～17は前期前半(I-1・2様式)の壺で、口頸部界や頸胴部界に段があるものである。5は口頸部界に削り出しによる突帯を有し、11は段の直下に3条の沈線が施される。13は頸部下にヘラ描き重弧文、14は沈線文が施される。

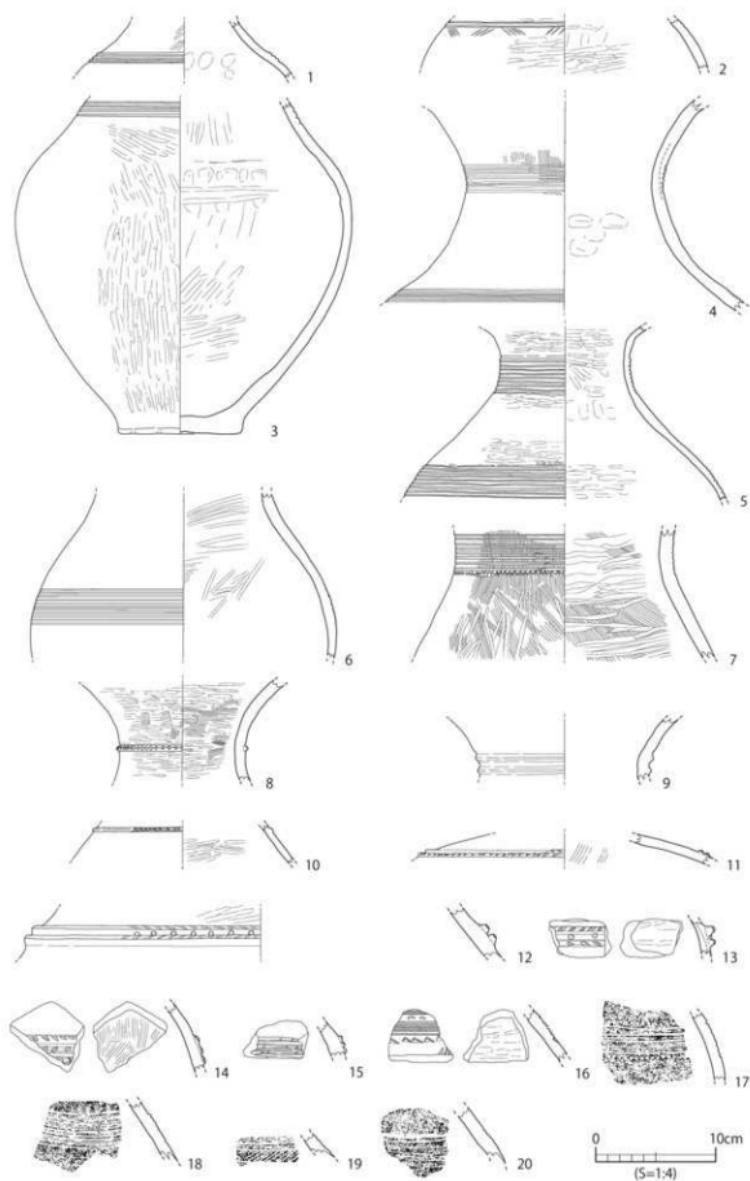
第17図18～25、第18図、第19図、第20図1～7は前期後半(I-3・4様式)の壺である。第17図18～25、第18図1～19は広口壺の口縁で様々なバリエーションがあるが、無文のものや(第17図21)、口頸部界に1条～多条のヘラ描き沈線を廻らすもの(第17図19・20・23・25、第18図1～7)、沈線間に連続刺突文を施すもの(第18図8)、断面三角形の貼付突帯を廻らすもの(第18図9～11)がある。また口唇部を肥厚させ、沈線を施すもの(第18図11・16)、有軸・無軸の羽状文状の刻み目を施すもの(第17図22・25、第18図1・2・10・12～15)、斜行する刻み目を施すもの(第18図5)、格子状の刻み目を施すもの(第17図24、第18図3・6・7)がある。また第18図11は口縁外面に蕨手状の浮文が貼り付き、内面には貼付突帯が廻るなど、西部瀬戸内の影響を受けたものとみられる。第18図19は逆L字状に大きく拡張した口縁で、上面に3条の沈線文が施される(「タテチョウ遺跡Ⅲ」(島根県1990)のY134と同一個体と思われる)。第18図20～25は短頸・無頸壺である。20・22・24は多条のヘラ描き沈線文と三角形の刺突文が施され、21・23は貝殻施文による多条沈線が施される。また22は、内面にイネ糲とみられる圧痕が残る。第18図26は口縁～頸部を欠く小型品、第19図1～12は頸部から底部にかけての資料である。第19図1～7は頸部～頸胴部界～胴部に多条のヘラ描き沈線文が施され、8～12は1～2条の貼付突帯が廻る。第19図13～20、第20図1～7は小片である。第19図13～15は2～3条の刻み目をもつ貼付突帯がつき、17～20、第20図2は多条のヘラ描き沈線文で、その他、第19図20は貝殻腹縁による直線文、19は貝殻腹縁による連続刺突文が施される。第20図1は流水文、3は木葉状の沈線文が施される。4は高さの低い突帯が貼り付けられ、5～7は2～4条の貼付突帯を有し、5・6は突帯に綾杉状の刻み目が施



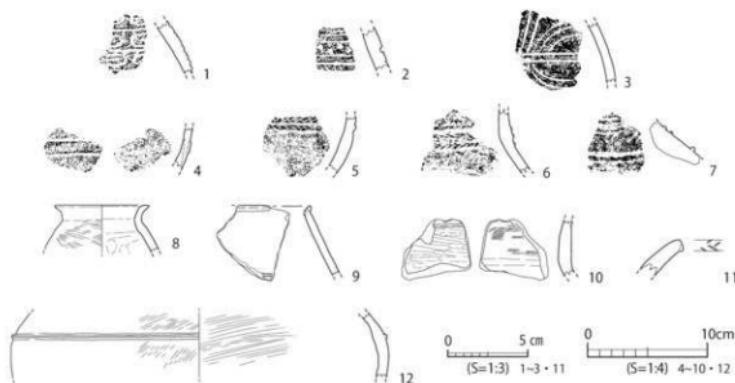
第17図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(1)



第18図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(2)



第19図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(3)



第20図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(4)

される。また7は、外面にブドウ属の種子とみられる圧痕が残る。

第20図8～12は、詳細時期は不明だが前期に相当するとみられる壺である。8は小型の短頸壺で、9は無頸壺、10・11は広口壺の口縁である。12は胴部に断面三角形の貼付突帯が廻る。

第21・22図は胴部上半に直線文と羽状文を組み合わせた文様が施された壺であり、一定程度出土していることから、綾羅木系土器として一括した。第21図1～16・18は前期前半(1・1・2様式)のものである。いずれも頸胴部界から胴部中位にかけての破片で、貝殻腹縁等による直線文や羽状文が施されているのが特徴である。1・13・15・16は頸胴部界直下にタマキガイ科の貝殻腹縁による鋸歯状圧痕が明瞭な直線文や無軸羽状文が施される。2～6・8～12は内腹縁に刻みの無い、非鋸歯状圧痕の貝殻腹縁による(もしくはヘラによる)直線文や無軸羽状文が施される。7は貝殻腹縁の刻みが明瞭でない二枚貝による、浅く押圧された羽状文が特徴的である。14は2条の突帯の下に鋸歯状圧痕の明瞭な無軸羽状文が胴部下方に向かって施文される。18は非鋸歯状圧痕の羽状文の下に3条の重弧文が施文される。

第21図17・19～33、第22図1～18は前期後半(1・3・4様式)とした資料である。第21図17はヘラ描き沈線を軸とした、鋸歯状圧痕の明瞭な有軸羽状文が施される。19は無頸壺で、胴部のヘラ描き沈線の下に非鋸歯状圧痕の無軸羽状文が施される。20・21・23・25・27は頸胴部界～胴部中位に鋸歯状圧痕の直線文や無軸羽状文が施されている。22はヘラ描き沈線の下に、鋸歯状圧痕の羽状文、直線文、鋸歯文、直線文が確認できる。24は頸胴部界直下にヘラ描き沈線を施し、沈線間に鋸歯状圧痕の綾杉文、沈線の下に鋸歯状圧痕の羽状文が施文される。26は頸胴部界直下にM字状の貼付突帯をもち、突帯に鋸歯状圧痕の刻み目、突帯の下に無軸羽状文が施される。28はヘラ描き沈線の下に、5条を単位とした垂下する鋸歯状圧痕の直線文と羽状文が確認できる。29は3条の無軸羽状文が施され、31は直線文の下に中心軸をもつ鋸歯文が施文される。33はヘラ描き沈線の下に、ヘラ描きとみられる不揃いな無軸羽状文が施される。第22図1は鋸歯状圧痕、3・5・11は非鋸歯状圧痕の直線文や無軸羽状文が施され、2は口頸部界の沈線の下

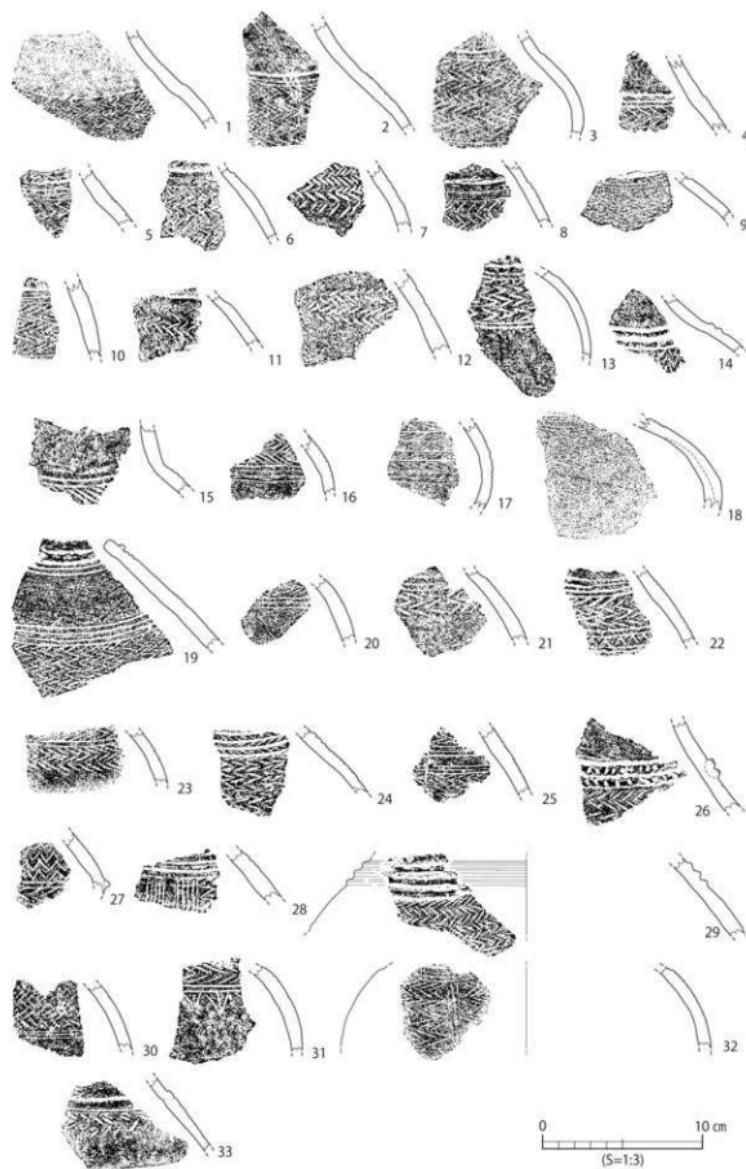
に鋸歯状圧痕の直線文や無軸羽状文が施文される。4は貝殻腹縁による施文だが、下向きの鋸歯状圧痕が明瞭である。6～10・12～18は貝殻腹縁による施文で、6は胴部中位に刻み目をもつM字状の貼付突帯がつき、7・8は頸胴部界下に断面三角形状の貼付突帯がつく。9は施文部の下に乳頭状の突起がつき、10は羽状文の間に木葉文が確認できる。14は帶状に突出させた段に4条の直線文が施される。16・17は直線文による区画に斜格子文や有軸の羽状文が施文される。18は鋸歯文が施されている。

第22図19～22は、詳細時期は不明だが前期に属するとみられる資料である。19・20・22は貝殻腹縁による施文で、19はやや粗い羽状文、20は有軸の羽状文が確認できる。21は非鋸歯状圧痕の羽状文と直線文が施される。22は摩滅が著しいが、木葉文が確認できる。

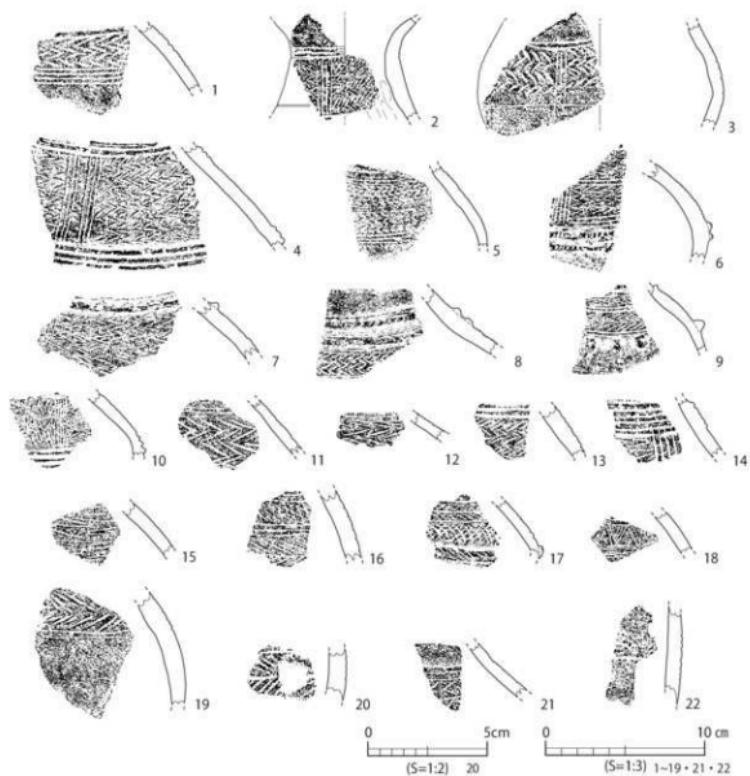
第23図と第24図1～7は前期前半（I・1・2様式）の甕である。第23図1～6は頸部に明瞭な段を有するもので、1～3は短いが強く外反する口縁端部に刻み目が施される。7～18は頸部に1条の沈線が施されるものである。7・8は口唇部に刻み目が施され、9・10・18は口唇部を沈線状に凹ませているが、9・10は部分的にナデ消している。17は沈線を閉じずに8cmほど併行させている。第23図19、第24図1～4は頸部に2条の沈線を施すものである。第24図3は薄手のもので、口縁が逆L字状に強く屈曲する。また沈線は途切れているが、半裁竹管のような工具で施文したように見受けられる。5～7は頸部が無文のものである。7は口径・高さとも14cmを測る小型の甕で、「西川津II」で写真のみ掲載されていた資料（PL.10）である。

第24図8～21、第25・26図は前期後半（I・3・4様式）の甕である。第24図8～13は頸部が無文のもので、8～10は口唇部に刻み目が施される。13は粘土帯を貼付けて口縁を肥厚させている。14～16は頸部に2条の沈線を施すものである。14は沈線間に豆粒状の連続刺突文が施される。第24図17～21、第25図1～4は頸部に3条の沈線を施すものであり、17は沈線間に豆粒状の連続刺突文が施される。20は粘土帯を貼付けて逆L字状の口縁とし、上面が面取りされる。第25図5～9は頸部に4条の沈線を施すものであり、いずれも口唇部に刻み目が施される。5は沈線間に豆粒状の連続刺突文が施され、6は沈線下に鋸歯状の連続刺突文が施される。また内面にはイネ柄の圧痕がある。9は口縁端部に粘土帯を貼付けて逆L字状に肥厚させたもので、上面が面取りされる。10～14は頸部に5条の沈線が確認できるものである。11は短く緩やかに外反する口縁端部に無軸の羽状文が施される。15～19は頸部に6条の沈線が施されるものである。18は沈線下に鋸歯状の連続刺突文が施される。また17は内面にイネ柄の圧痕がある。第26図1～12は頸部に7～10条の沈線が施されるものであり、1は沈線下に竹管文、2・11は豆粒状の列点文、3～5は鋸歯状の連続刺突文が施文される。また、5は口縁に粘土帯を貼付けて逆L字状に肥厚させ、面取りされた上面に鋸歯状の連続刺突文が2列に配している。12は頸部に径8mmの穿孔がある。13～28は破片資料である。13は口縁に無文の粘土帯を貼付け、逆L字状に肥厚させる瀬戸内系の土器と思われる。14～27は頸部に多条の沈線を施すものである。沈線に竹管等による連続刺突文を組み合わせる例が多い。15は口縁端部を逆L字状に肥厚させ、幅広の口唇部に沈線と刻み目が2段に施される。24は2～3条の沈線間に菱形状の斜行線を配している。28は天地が不明瞭だが、細かな豆粒状の列点文が数条の沈線状に施文されている。

第27図は、詳細時期は不明だが前期に属するとみられる甕類である。1～9は口唇部に刻み目をもつもので、1～7は頸部が無文、8・9は沈線が1条施される。7は口縁外面に粘土帯を貼



第21図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(5)



第22図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(6)

付け逆L字状に肥厚させ、上面に面をもつ。10～23は口唇部に刻み目をもたないもので、10～18は無文である。口縁端部に様々な形態があり、10～13は口縁直下で折り曲げて短く外反させ、14は玉縁状に肥厚し上面に面をもつ。15～18は口縁端部外面に粘土帯を貼付け玉縁状の口縁を呈するものである。17・18は逆L字状に肥厚させ、上面に面をもつ。19～22は頸部に2条の沈線を施すものであり、19は沈線間に豆粒状の列点文が、20は竹管文が2列に配される。22は口縁を逆L字状に屈曲させ上面に面をもち、沈線下に豆粒状の列点文が施される。23は復元口径11cmの小型の甌で、口縁がくの字状に屈曲する。24は平底の底部である。外面は指頭圧痕が顕著で、内面には煤が付着する。

第28図1～5は前期の甌蓋である。全形がわかるものはないが、1・3は天井が平坦で、4は天井の中央部が丸く窪み、5は深く窪む。1・3が矢野遺跡の甌蓋C類、4がB類、5がA類に相当するとみられる（出雲市2010）。第28図6～12は前期の鉢で、うち6～8は前期後半（1・3・4様式）に属するとみられる。6は口縁が緩やかに外反し、胸部が張り出す。頸部にヘラ描き

沈線文が1条施される。7・8は胴部に貼付けの突起がつく。9・12は胴部が内湾気味に立ち上がり、12は口縁が直立する。11は口縁がくの字に屈曲し、胴部に2条のヘラ描き沈線文が施される。

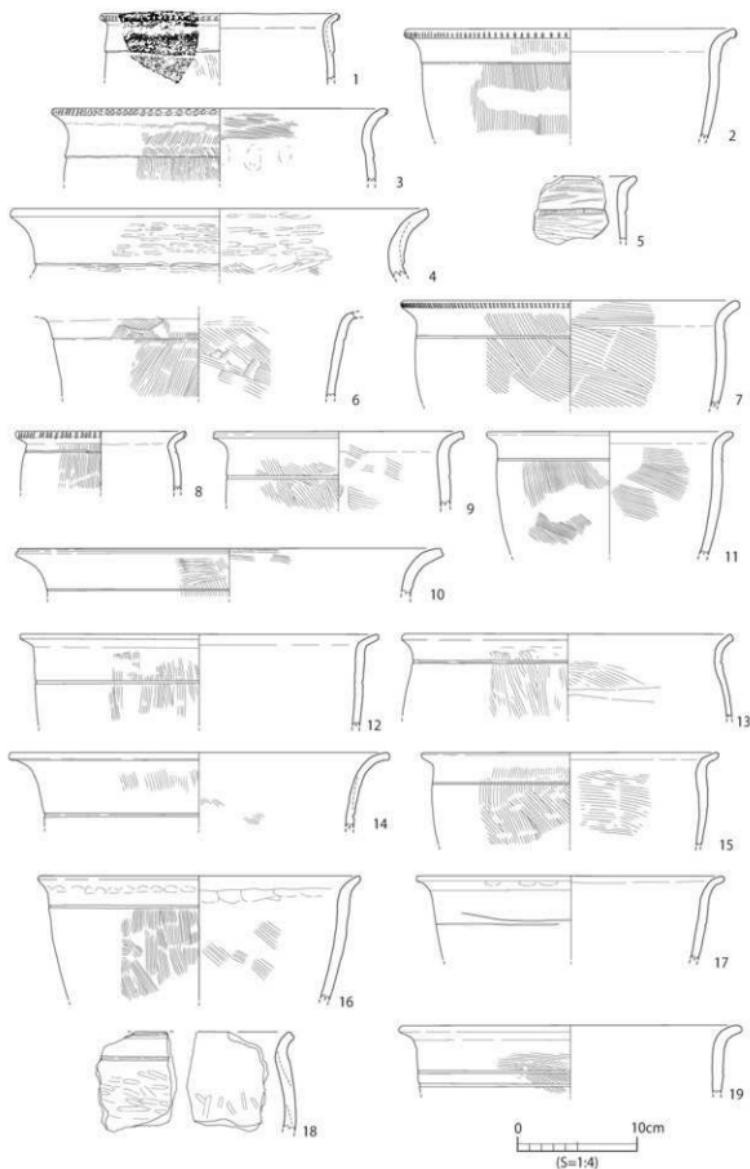
第28図13～22は特殊品及び器種不明品として分類したものである。13～20はいわゆるミニチュア土器である。13は無頸壺、14は壺を忠実に模したものであり、13は蓋を固定するための孔、14は沈線や刺突文が表現されている。15～19は甕か鉢、20は蓋を小型仮器化したものと考えられる。21・22は器種不明品で、21は平滑な器壁に乳頭状の突起がつく。22は器壁が厚く、ヘラ描き沈線文と鋸歯状刺突文が施される。これらは前期後半に属するとみられる。23・24は甕を模した小型仮器とみられ、前期に属すると考えられる。

第29図1～13は中期前葉(Ⅱ様式)に属するとみられる壺である。1～6は広口壺である。いずれも口縁が短く外反し、頸部に幅広く櫛描き直線文が施される。1は口縁端部に刻み目、2・3は羽状文、4は斜格子文が施文され、4は頸部の直線文の間に鋸歯状の沈線文がみられる。7は口縁外面に粘土帯を貼付け肥厚させ、上面が面取りされる。8・9は頸部～胴部の破片資料で、櫛描き直線文の下に鋸歯状刺突文や乳頭状の浮文が貼り付けられ、同一個体である可能性もある。10・11は無頸壺で、10は口縁が直立気味に立ち上がり、口縁外面に櫛描きの波状文が施される。11は口縁が内傾しており、外面が櫛描き直線文や連続刺突文、竹管文によって幅広く施文される。12は小型の壺で、口縁をぐくぐ高台状の底部がつき、外面にヘラ状工具による直線文や連続した列点文による装飾が施される。13は胴部の小片だが、器壁は平滑に仕上げられ、刺突文の他に木葉文のような細い曲線文が確認できる。

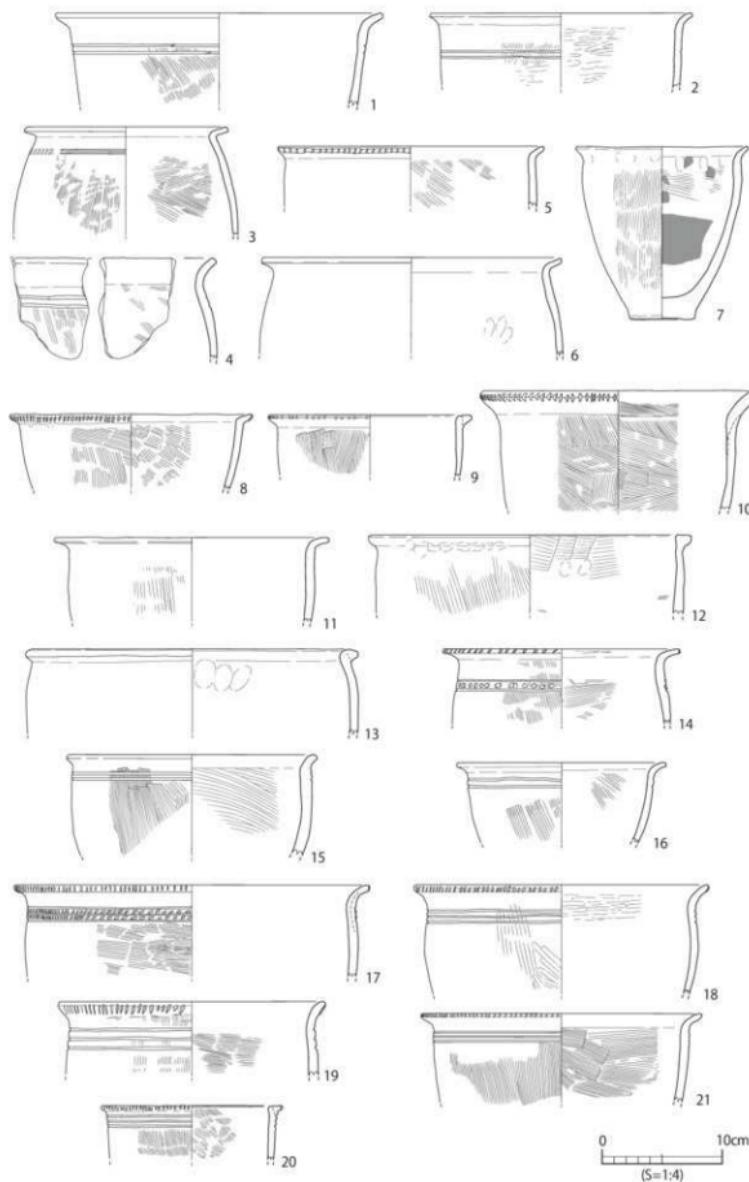
第29図14～21、第30図は中期中葉(Ⅲ-1・2様式)に属するとみられる壺である。第29図14～21、第30図1～11は広口壺で、口縁が朝顔状に大きく開き、端部は上下に拡張する。第29図17～20、第30図1・2は口縁拡張部の外面にヘラや櫛状工具による斜格子文や山形文、列点文や連続した穿孔、円形浮文が施される。第29図21は口縁内面に刻み目をもつ突帯が廻り、第30図3は口縁端部外面に3条の凹線の後、刻み目が施され、口縁下方に断面三角形の粘土帯が廻る。また頸部には指頭圧痕文帯(第29図14～16、第30図5・6)や断面三角形の粘土帯(第30図4・7)を廻らせるものがある。第30図8～11は頸部が短いもので、口縁が短く外反し、端部を拡張して面をもつがいすれも無文である。12・13は短頸壺で、12は口縁内面に明瞭な面をもつ。いずれも頸部下に焼成前の穿孔が2箇所で認められる。14・15は長頸壺で、14は逆八字状に開く口縁端部の下端に刻み目が施され、15は口唇部の下端部と頸部に張り付けられた3条の粘土帯に刻み目が施される。16・17は無頸壺で、16は口縁端部外面に粘土帯を貼付けて、17は端部を両側に肥厚させて面取りしている。18～20は頸部～胴部片で、18は胴部中位に櫛状工具による連続刺突文が施され、19は櫛描き直線文と連続刺突文、20は豆粒状の列点文が確認できる。21は底部で、内外面ともヘラミガキ調整でわずかに上げ底である。

第31図1・2は中期後葉(Ⅳ様式)の壺形土器である。前段階(中期前葉・中葉)のものと比較して、図化の対象となったものはわずか2点であり、当該地区における出土遺物量の時期的な傾向がうかがえる。1は長頸壺で、口縁端部が上下に拡張し、3条の凹線文が施される。2は広口壺とみられる口縁の小片で、上下に拡張した口縁端部に凹線文が施される。

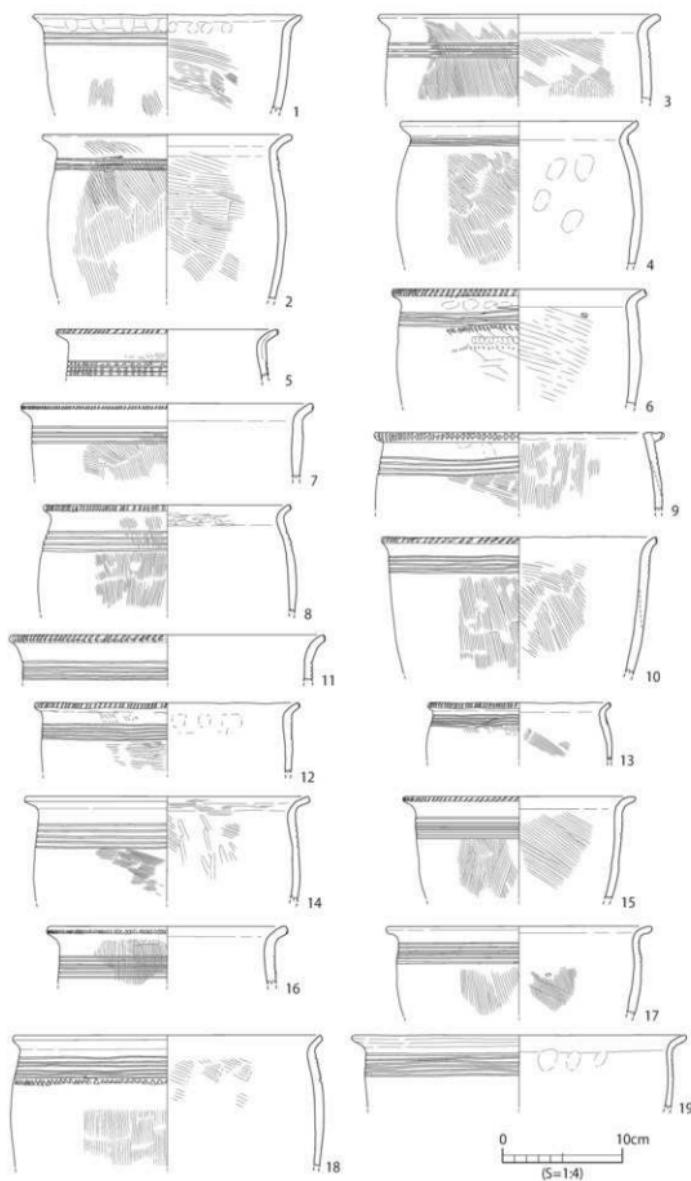
第31図3～11は、詳細時期は不明だが中期に属するとみられるものである。3は短頸壺で、口縁が大きく屈曲し内面に幅広の面をもつ。頸部に焼成前の穿孔が2箇所ある。4は広口壺で、口



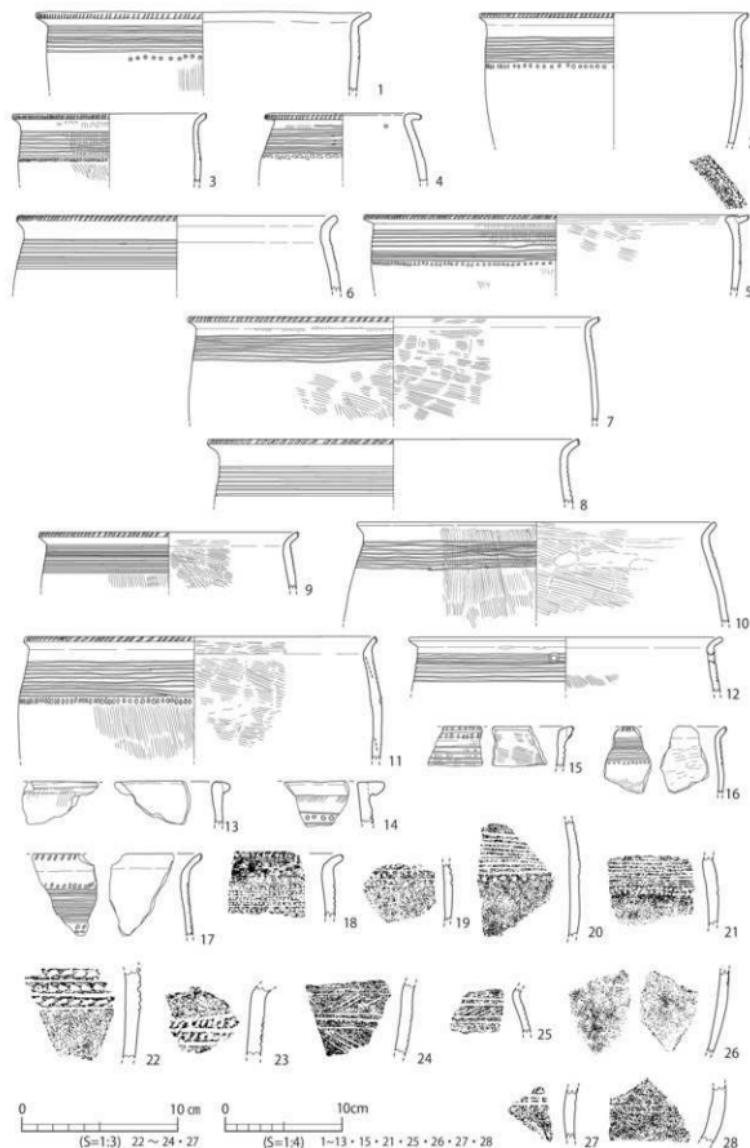
第23図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(7)



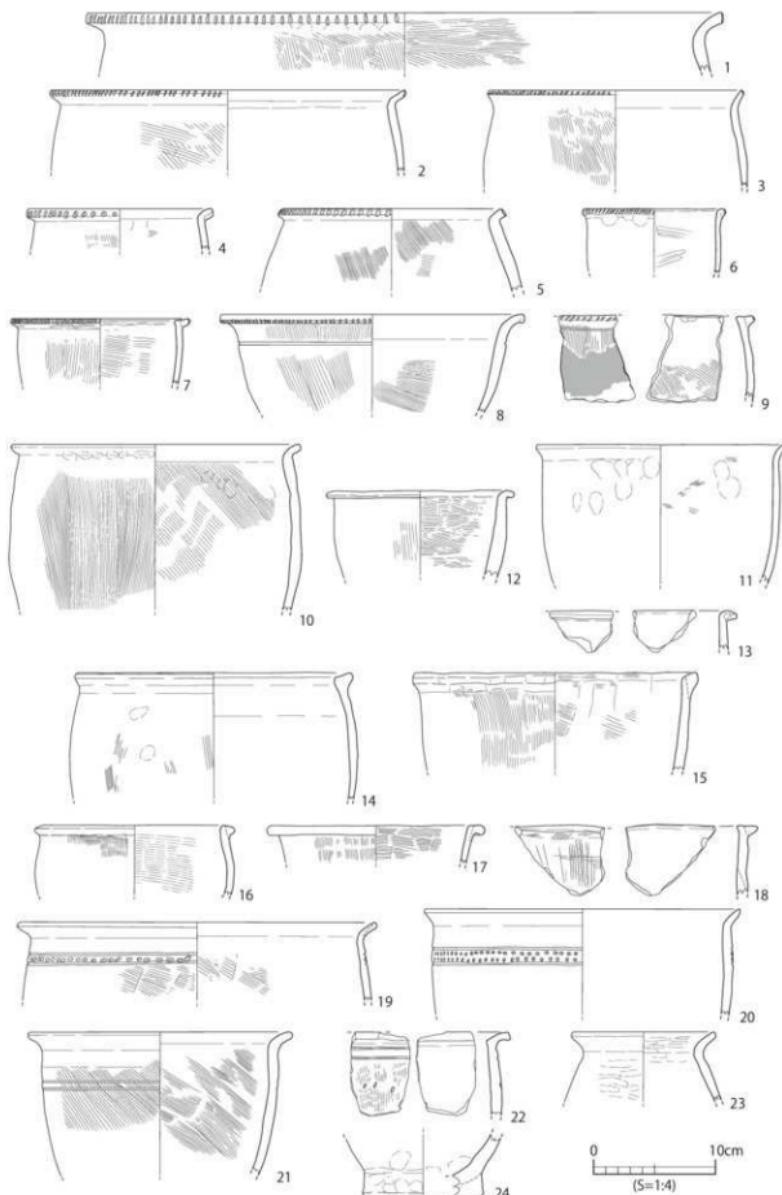
第24図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(8)



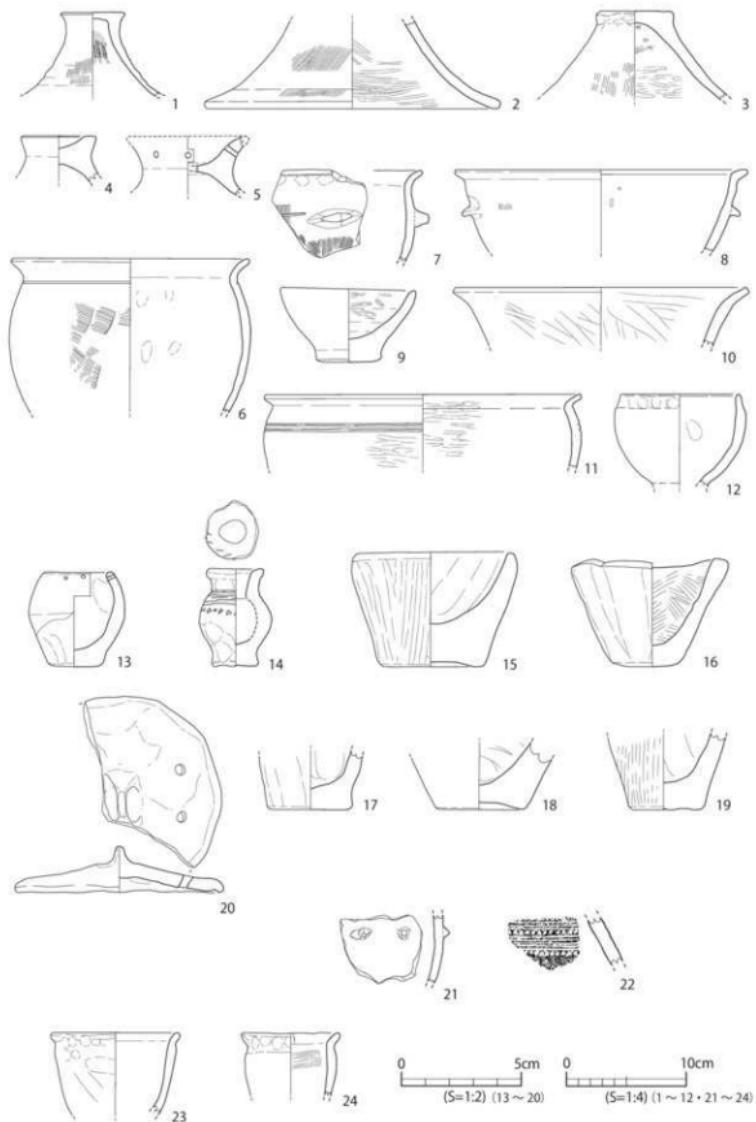
第25図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(9)



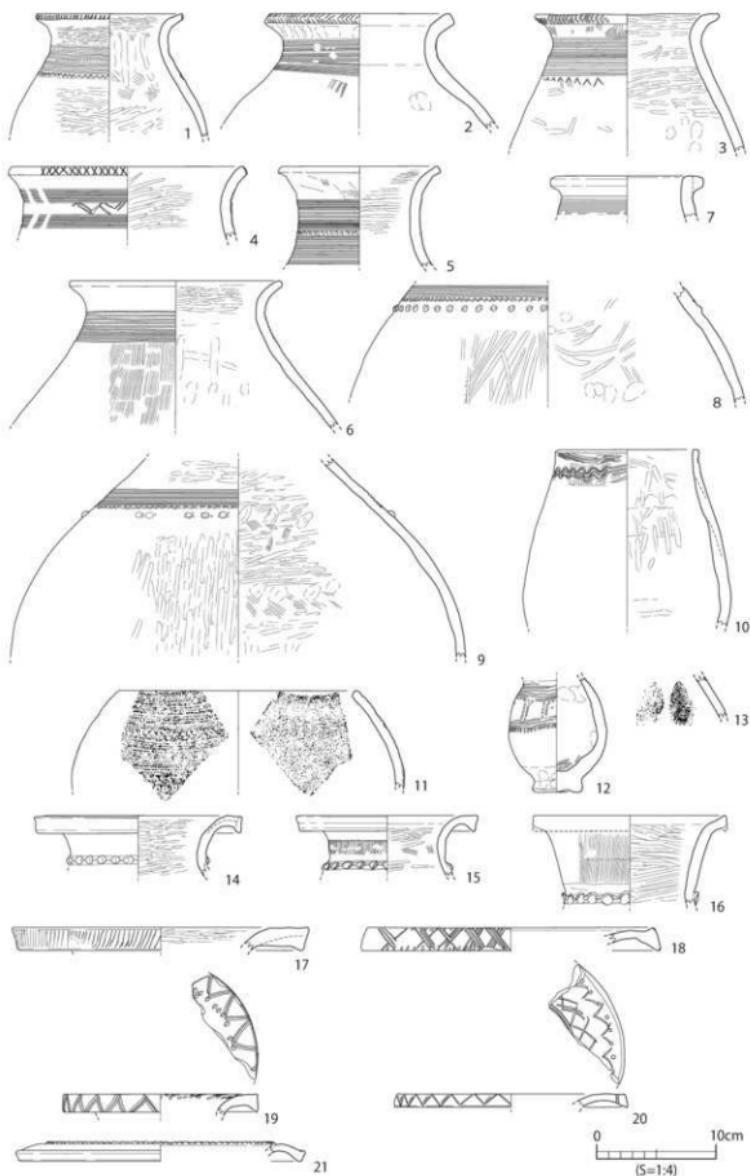
第26図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(10)



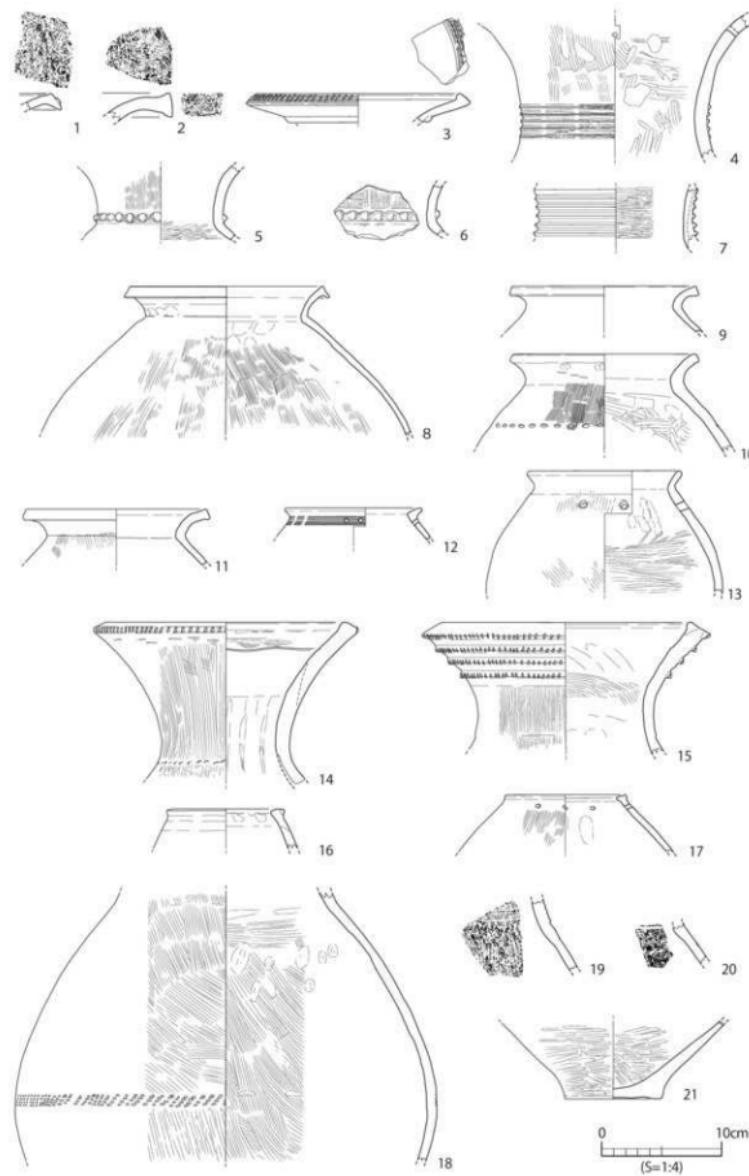
第27図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(11)



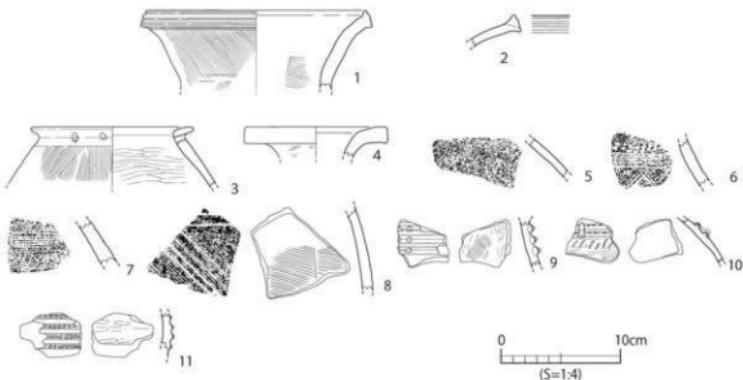
第28図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(12)



第29図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(13)



第30図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(14)



第31図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(15)

縁端部がコの字状に肥厚する。5～11は頸部～胴部の破片である。5は平滑な器壁外面に櫛描き直線文と1条の波状文が施され、6・7は櫛描き直線文と櫛状工具による刺突文や山形文が施される。8はヘラ状工具によるとみられる太目の沈線がヨコ方向やナナメ方向に確認できる。9～11は断面三角形で刻み目をもつ貼付突帯が2～4条確認できる。9は頸部片とみられ、縱方向に刻み目が揃う。10は突帯の上に帶状の浮文がつき、その下に櫛状工具による連続刺突文が施される。

第32図、第33図1～11は中期前葉(Ⅱ様式)の甕である。第32図1～4は頸部～胴部が無文のもので、1は口唇部に刻み目が施される。3・4は口縁端部外面に粘土帯を貼付け、逆L字状の口縁を呈する瀬戸内系のものである。第32図5～19、第33図1～6は数回にわたって幅広く櫛描き直線文や波状文、連続刺突文を廻らせるものである。第32図8～10・15～18、第33図2～5は口唇部に刻み目や斜格子文が施される。第32図6・7・16、・第33図2・4・5は逆L字状の口縁で、第32図19は口縁が短く屈曲し、胴部が球形を呈するものである。20は口縁が水平気味に外反する。第33図8～11は口縁部の小片で、10は口縁が逆L字状を呈する。11は口唇部に竹管文がつく。

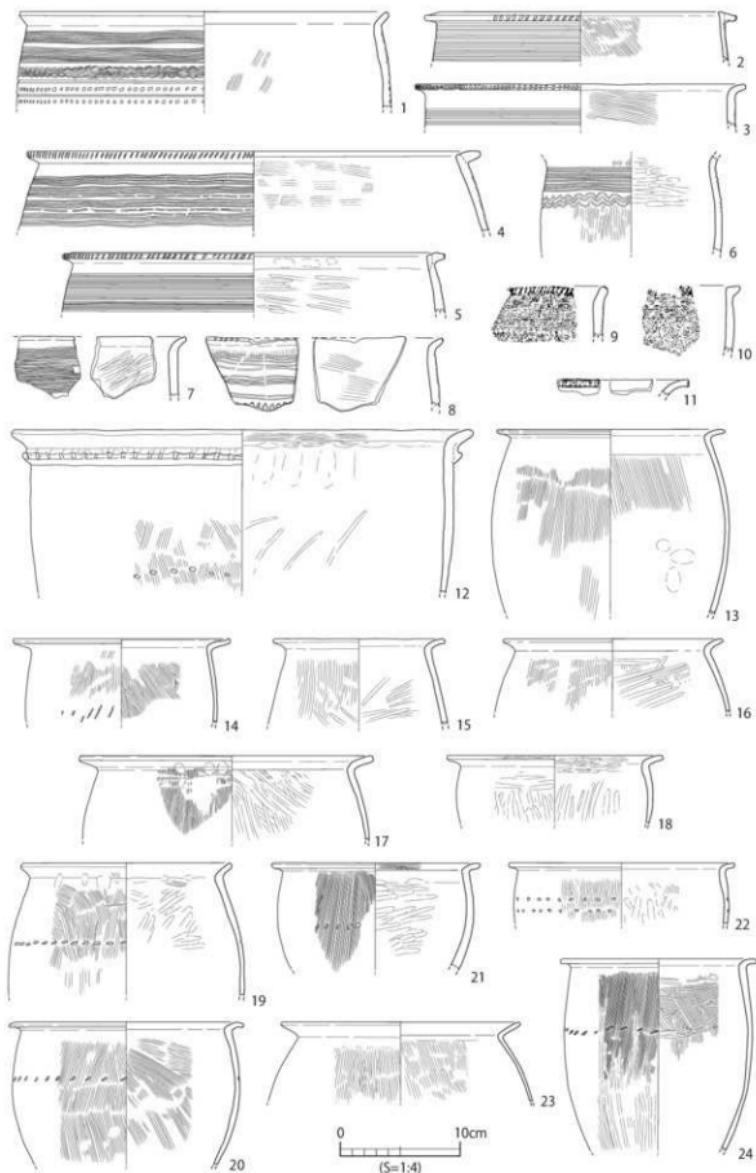
第33図12～24、第34図、第35図1～10は中期中葉(Ⅲ-1・2様式)の甕である。全体的に器壁は薄手で、胴部が口径より張り出すものも多い。口縁は様々な形態があり、強く外反し長く拡張するものが目立つが、端部を肥厚させて面をもち、中央が凹むもの(第35図4)や刻み目を入れるもの(同5・7)、沈線を入れるもの(同6・8・9)がある。また前段階にみられた頸部の櫛描き直線文はほとんど認められなくなり、文様は第33図14・19～22・24、第34図4・8～10・23、第35図10のように、胴部中位に列点状の刺突文を廻らすものがほとんどといえる。第35図9は頸部に指頭圧痕文帯がめぐる。第33図12は頸部に刻み目をもつ貼付け突帯をめぐらす、極めて特徴的なものである。

第35図11～18は中期後葉(Ⅳ様式)の甕である。全体がわかる資料に乏しいが、口縁はいずれも強く屈曲し、端部を斜めに拡張させ四線文を施している。11・14・15は口縁に刻み目が施され、頸部に指頭圧痕文帯がめぐる。18は口縁端部が上下に拡張する。

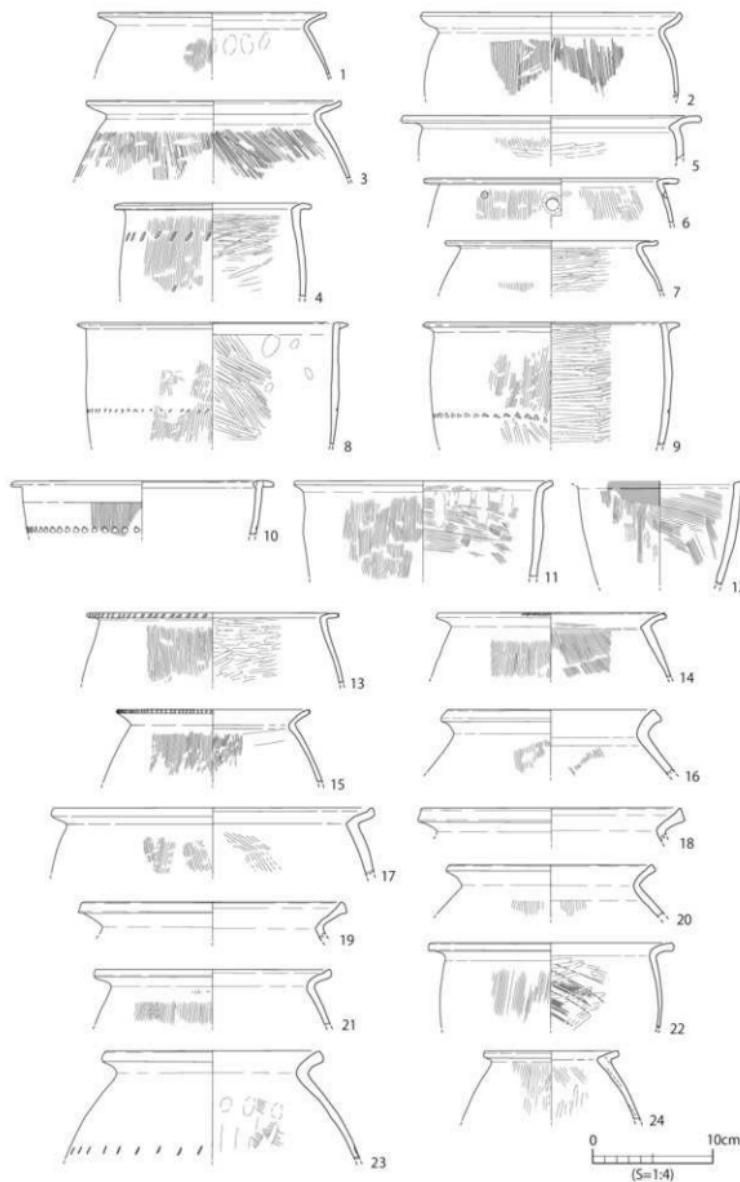
第35図19～22は中期に属するとみられる斐形土器である。19・20は口縁が逆L字状を呈し、



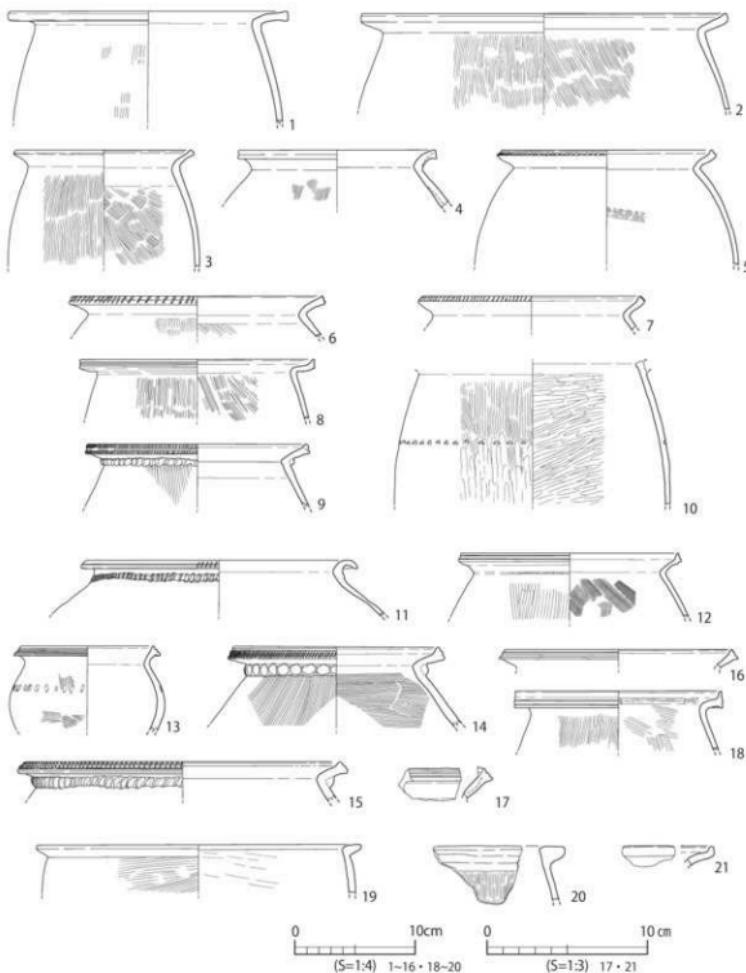
第32図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(16)



第33図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(17)



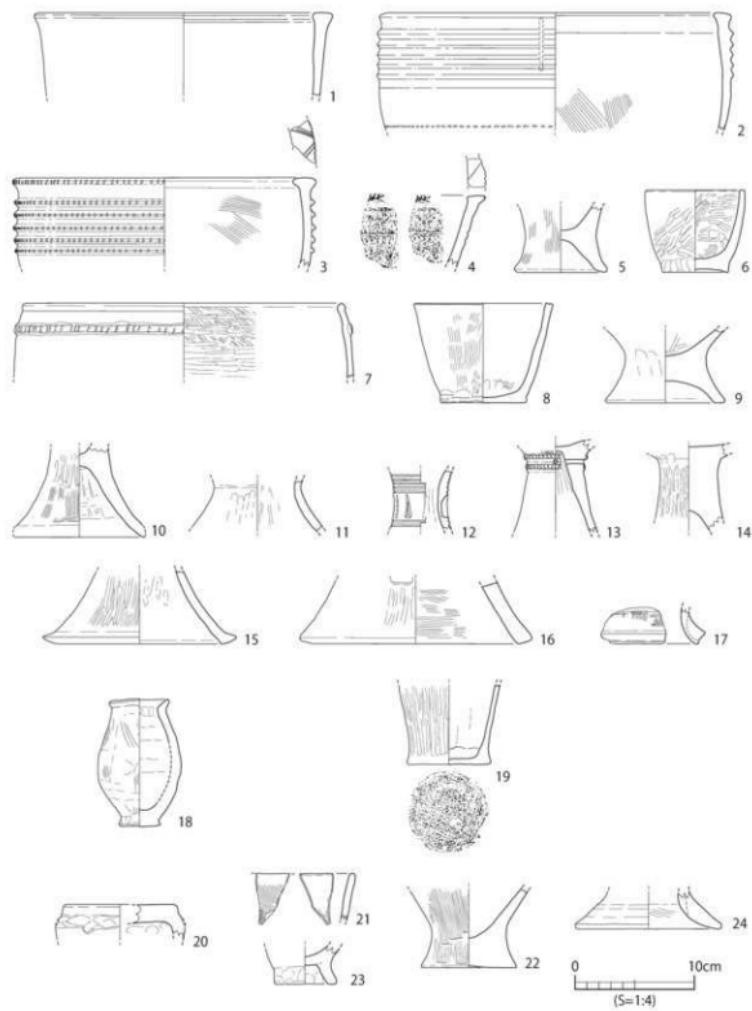
第34図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(18)



第35図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(19)

21は口縁外面に断面三角形状で幅広の貼付突帯がつく。22は口縁端部が直立気味に短くはね上がる。

第36図1～9は中期の鉢で、うち1～6は中期中葉(Ⅲ様式)に属するものである。1～4は口縁が直立及び逆ハ字状に立ち上がり、端部が拡張し面をもつ。1は無文だが、2は5条の断面三角形の貼付突帯がつき、棒状の浮文がつく。3は貼付突帯と口縁外端部に刻み目がつき、口縁平坦面に鋸歯状の斜行線が施される。4は外面に浅い沈線や波状文、刺突文が施される。5は台付鉢の



第36図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(20)

脚部で、内面に煤が付着する。7は薄手の器壁で、口縁端部が丸く肥厚し、連続刺突文をもつ貼付突帯がつく。6・8はコップ状の小型品で、6は内外面ともヘラミガキで丁寧に仕上げられている。9は台付鉢の脚台である。

第36図10～17は中期の高坏である。10・11は中期中葉(Ⅲ様式)に属するとみられる脚部で、10は接合部の中央が丸く窪んでいる。12は脚の筒部で、数条の凹線や貫通しない三角透かしが施される。中期後葉(Ⅳ様式)とみられる。13～17は詳細な帰属時期は不明なものである。13は脚の筒部で、上部に2条の刻み目をもつ貼付け突帯や焼成前の穿孔がある。14は無文だがヘラミガキで丁寧に仕上げられている。15は端部が肥厚し面をもち、16は方形か三角形の透かしが確認できる。

第36図18～24は特殊品(18)、もしくは器種不明品(19～24)と分類したものである。

18は中期前葉(Ⅱ様式)、19は中期中葉(Ⅲ様式)とみられ、18は壺を模したミニチュア土器、19はヘラミガキ調整で器壁が薄いが底面が平滑に仕上げられており、蓋の可能性もある。20～24は、詳細時期は不明だが中期に属するとみられるもので、20は器形が台形を呈し、上面がヘラミガキやナデで極めて平滑に仕上げられている。21は口縁部の小片である。22は底部で、内部に煤や炭化物が付着する。23・24は脚台として復元したものである。

第37図1～22は、詳細時期は不明だが、前期または中期に含まれるとみられる土器である。1は壺で、口縁が逆L字状に開き、内外面ともヘラミガキ調整で仕上げられている。2～8は甕である。2・5～8は逆L字状の口縁を呈する瀬戸内系の甕で、3・4は無文土器系土器である。9は小型の鉢で、内外面ともヘラミガキ調整で丁寧に仕上げられている。10～17は特殊品に分類したもので、10～15は甕か鉢、16・17は蓋を小型仮器化したものと思われる。18～22は器種不明品である。18～21は底部資料で、18・19は壺か甕の底部とみられ、19は底面に焼成後の穿孔が認められる。22は小片だが、列点文や非鋸歯状の羽状文が施されている。

第37図23～26は後期の土器である。図化の対象となったものはわずか4点であり、前期・中期と比較して非常に少ない。23～25は後期前葉(V-1様式)のもので、23は長頸壺の口縁端部が斜めに拡張し、3条の凹線文が施される。24は甕で、内傾する口縁に3条の凹線文、肩部にハケ状工具による刺突文が施される。25は小型の甕で、肥厚した口縁端部が直立気味に拡張される。26は詳細時期が不明な破片であるが、外面に大ぶりな連続刺突文が施され、内面はヘラケズリ調整である。

第38図1・2は弥生時代に属するとみられるが、詳細時期や器種が不明なものである。1・2とも蓋形として復元しているが、1は天井部が平坦で、斜め方向の穿孔が2箇所で確認できる。内外面ともヘラミガキで丁寧に仕上げられる。2は天井部に高台状の輪がつき、1と同様に対になる位置に斜め方向の穿孔がある。

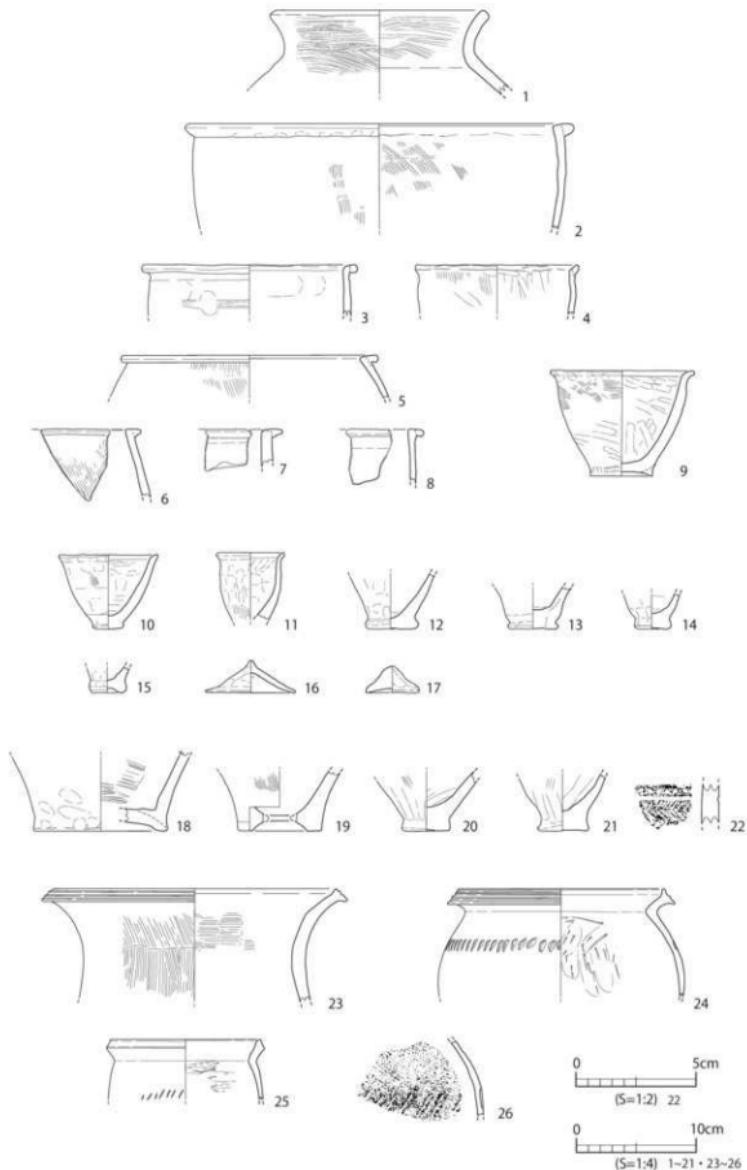
第38図3～7は弥生土器片を転用した土製円盤である。5～7は中心に穿孔があるが、5・6は非貫通である。

### (3) その他

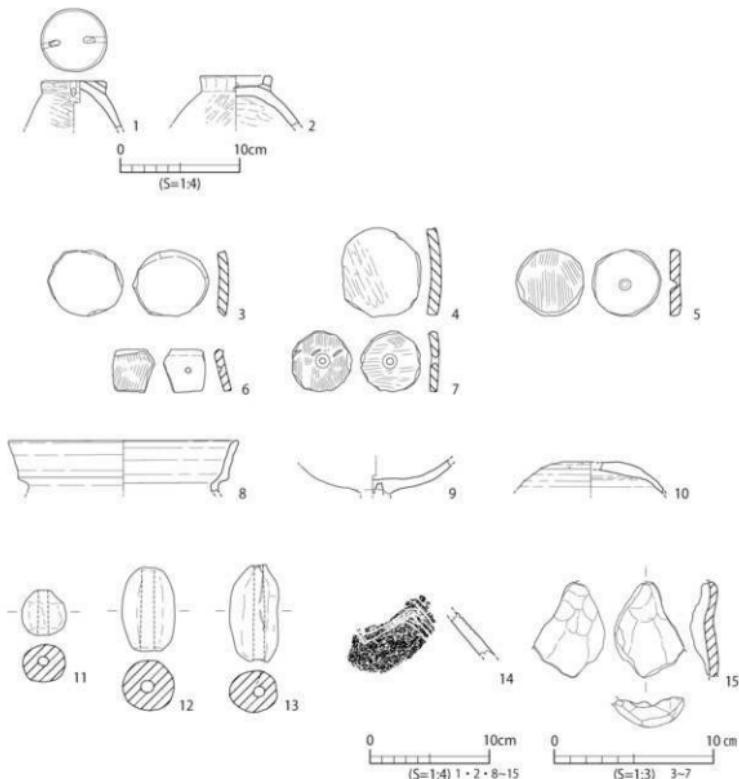
第38図8・9は土師器で、8は弥生時代終末期～古墳時代初頭の甕である。9は古墳時代前期～中期とみられる高坏の椀部である。10は須恵器の坏蓋である。天井部に回転ヘラケズリ痕が残る。

第38図11～13は土鍤である。11は球形、12・13は紡錘形である。

第39図14・15は所属時期や器種も不明とした資料である。14はヘラ状工具による文様が波状文にも見受けられ、そうであるなら弥生時代前期の壺形土器の肩部片の可能性もある。15は舟底状に湾曲する板状破片である。何らかの土製品であろうか。



第37図 昭和55・56年度調査出土弥生土器(21)



第38図 昭和55・56年度調査出土遺物

## 3. 石器の統計分析

西川津遺跡の昭和55・56年度調査出土品については、前述したように掲載・非掲載を問わず総べての遺物を分類・計量した。このうち、石器の器種別重量をまとめたのが第39図である。今回の整理作業の結果、総数757点（西川津I：454点・西川津II：303点）、総重量30,906.14 g（西川津I：20,163.8 g・西川津II：10,742.34 g）の資料を抽出することができた。

個別に傾向をみると、一見してわかるとおり、敲石・磨石類（3,315.1 g）や砥石（4,442.01 g）、及び石器素材品が突出しているのがうかがえる。また、大型の礫石器類であるこれらを除けば、黒曜石に代表されるRF・UF類の他、大型・小型粗製剥片刀器、不定形刃器、石庖丁様石器とした板状素材の縁辺に刃部が形成された加工工具・収穫具の出土量が目立つといえる。

これらは西川津遺跡出土石器の特徴を構造的に理解するため、今回新たに設定した器種である。これらの石器群の主な属性は以下のとおりである<sup>(1)</sup>。

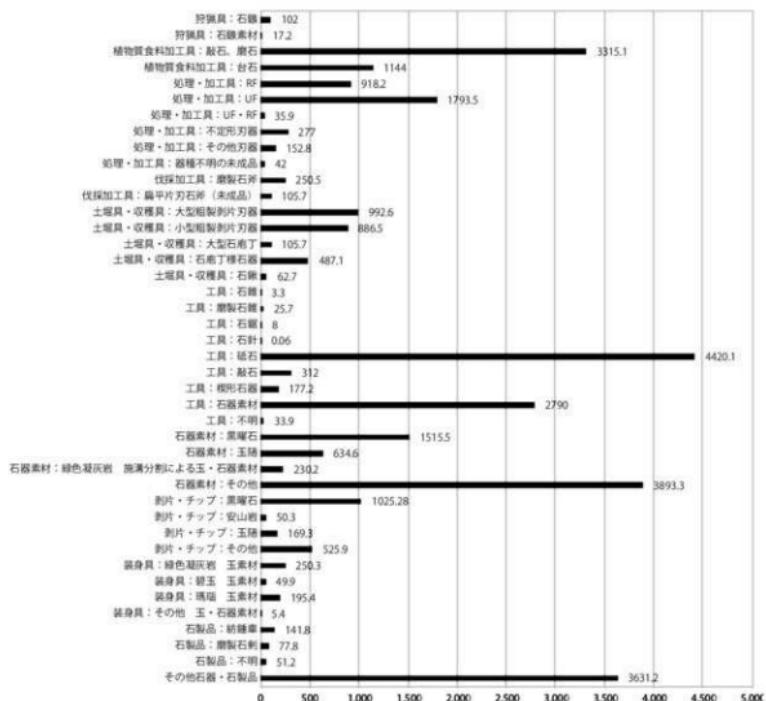
**大型粗製剝片刃器** 刃部は基本的に直刃で、全長15cm以上の大型品。粗い石質の岩石を素材とし、根刈り具・除草具としての機能が想定される。

**小型粗製剝片刃器** 直刃や曲刃、尖刃があり、規格は横幅15cm未満。粗く軟質な石材を素材とし、収穫具や調理・工作具としての機能が想定される。

**不定形刃器** 直刃や曲刃、尖刃があり、規格は横幅15cm未満。粗い石質の岩石の他、精緻・緻密な石質の岩石も使用される。収穫具や調理・工作具としての機能が想定される。

**石庵丁様石器** 直刃や曲刃があり、通常の磨製石斧より小型。黒色頁岩や粘板岩系の軟質な石材が使用され、研磨により刃部を形成する。刃部の形状から石庵丁と同等の機能が想定される。

一方で、海崎地区の調査（西川津Ⅲ～V）で膨大に出土した磨製石斧未成品や、菅玉未成品類（施溝分離痕のある板状素材品含む）の出土量は突出せず、從来の西川津遺跡を特徴づける大規模な“石器工房”としての資料は少數に留まる傾向にあることが判明した。この他、これまでの調査で未確認と思われる緑色凝灰岩製の管玉製作工具である結晶片岩製の石鋸や、水晶製の石針とみられる資料も今回明らかにすることことができた。



第39図 昭和55・56年度調査の石器出土量(単位:g)

#### 4. 石器（非掲載）の図化

第40図は石核類である。1～3は黒曜石で、1は立方体状を呈する大型品である。自然面の残る長辺の両小口側からの打削により素材片が作出される。2は角柱状を呈する小型品、3は片面に自然面を残す分割器である。4は玉髓製の楔状石核で、上下の小口面や側面に細かな打削痕が残る。

第41図は大型粗製剥片刃器である。いずれも板状の剥片を素材とした幅11～20cm、厚さ0.7～1cmの大型品であり、長辺に大ぶりな剝離による直線状の刃部がつく。1は長辺の研磨後に剝離加工による鋸歯状の刃部が作出される。石材は1が流紋岩、2・3が砂岩、4が頁岩である<sup>(2)</sup>。

第42図、第43図1は小型粗製剥片刃器である。いずれも長さ10cm前後の小型品で、板状剥片を素材とし、長辺に粗い刃部が作出される。第42図1～2は剝離調整により縁辺部を整えており、1は長辺に鋸歯状の刃部が作出され、2は長辺に大ぶりな刃部がつく。3は両短辺の小口面が研磨等により平滑に仕上げられている。石材は1・2が安山岩、3が頁岩である。4～6は緑色凝灰岩製で、いずれも施溝分離により作出された剥片素材とみられる。4は厚さ1.2cmの肉厚なもので、表裏面と長辺の小口面に研磨痕が顕著に認められる。また、表面に1箇所浅い穿孔痕が残る。5・6は長辺の小口面を研磨により平滑に整えた後、施溝分離が行われている。いずれも管玉製作用の板状素材を作出する技法と共に通るものといえる。

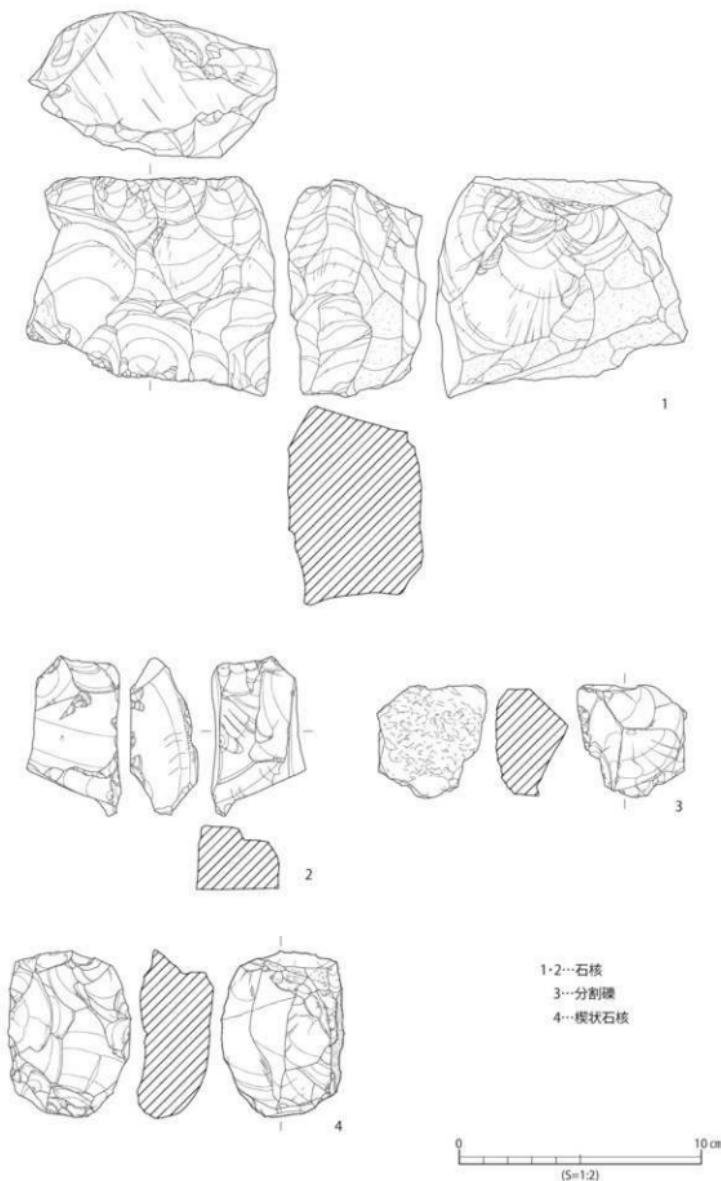
第43図2～7は不定形刃器である。いずれも長さ5～7cmの小型品で、素材の形状に応じた様々な形態があり、細かな剝離加工による刃部が作出される。2・4・7は黒曜石製、3・6は玉髓製で、縁辺に円弧状の刃部がつく。5は安山岩製とみられ、長辺に大ぶりな刃部がつく。

第43図8は石斧転用の刃器である。磨製石斧の刃部が欠損した後、破面の端部を刃器として加工し再利用されたとみられる。石材は安山岩である。

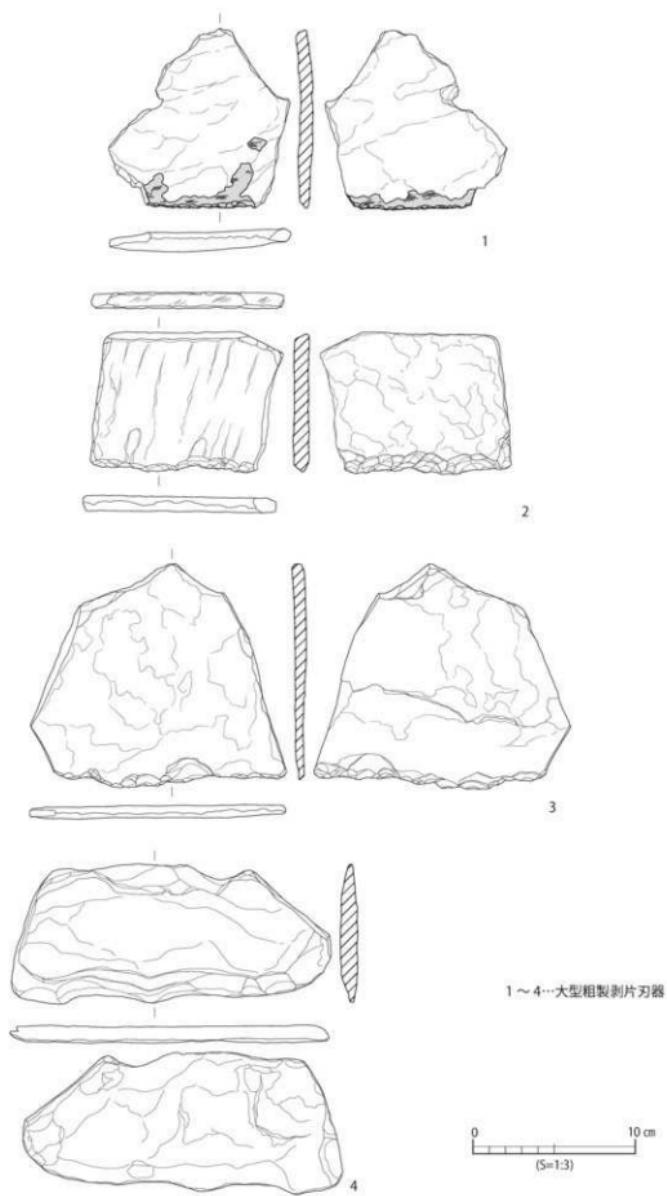
第44図1～6は石庖丁もしくは石庖丁様石器である。1は風化が著しく顕著な刃部が認められないが、梢円形で石庖丁様の板状品である。石材は流紋岩質凝灰岩である。2～6は頁岩製で、破片資料が多いが、全体の形状がわかる4・5から大きさは10cm程度とみられる。長辺や縁辺に研磨による曲刃状の刃部がつく。6は径5mmの穿孔痕が認められる。

第44図7・8は扁平片刃石斧未成品の可能性のある板状素材である。いずれも緑色凝灰岩製で管玉素材片のような板状品だが、肉厚で短冊状を呈する。7は小口側の表裏に施溝分離痕が認められるが、裏面のものは石核から板状素材片を作出した際の小口面からの施溝であるのに対し、表面のものは縁辺部を平滑に切り離した際の施溝とみられる。8は長辺側の小口面が研磨により平滑に仕上げられ、短辺側の小口面は剝離調整が認められる。また表面には1箇所で小さく浅い穿孔痕が残る。

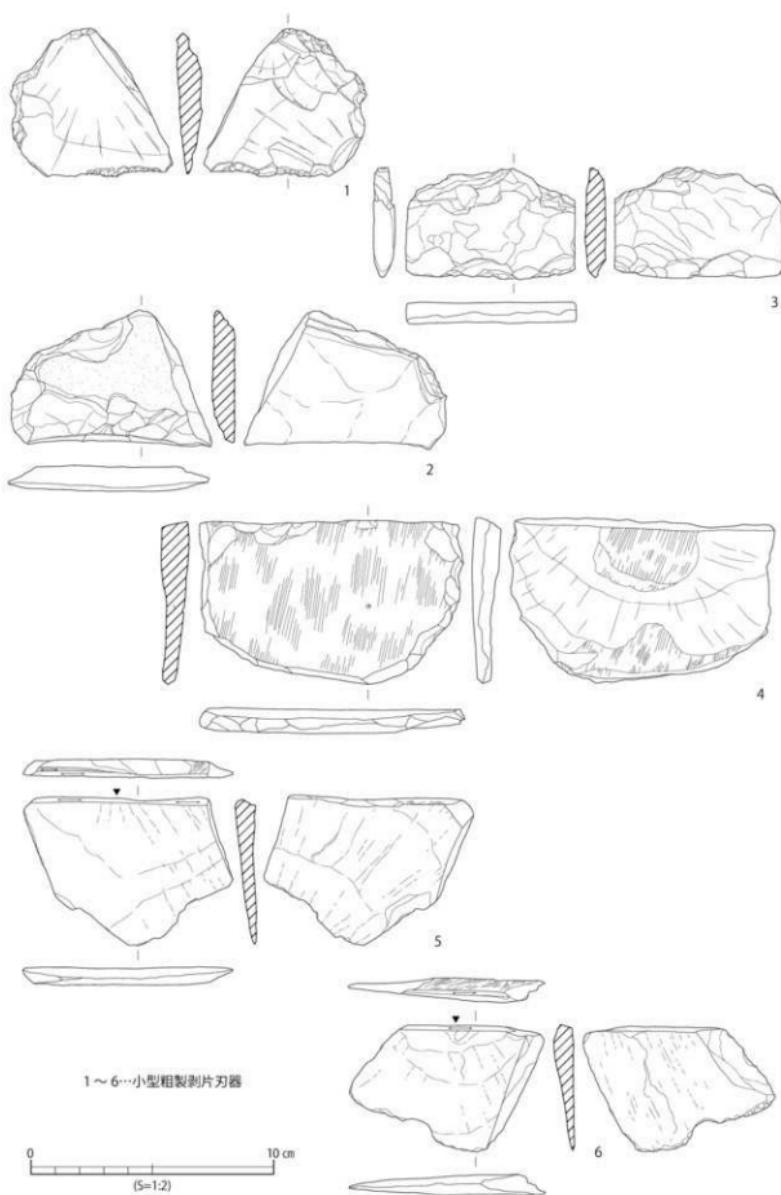
第45図1・2は磨製石劍とみられる石器である。いずれも頁岩製で、薄く剥落した破片資料であり全体の形状は不明だが、両刃に顕著な研磨加工が認められ、側面に明瞭な面を持たせている。3は石鍬である。剥片素材を加工した小型の完形品で、剝離調整により刃部と側面を整えている。石材は安山岩とみられる。4・5は石鍬である。4は厚さ0.2mmの刃部の小破片で、刃部は細かな剥落が顕著で鋸歯状を呈している。石材は安山岩である。5は結晶片岩製の板状品であるが、縁辺に刃部は認められないで、基部、もしくは素材片の可能性もある。6・7は磨製石錐とみられる棒状品である。いずれも安山岩製とみられ、尖り気味の先端部は丸く摩滅している。8は水晶製で、長さ1.6cm・径0.1mを測る極細品である。四角柱状に面取りされ、先端に向かって細く整形



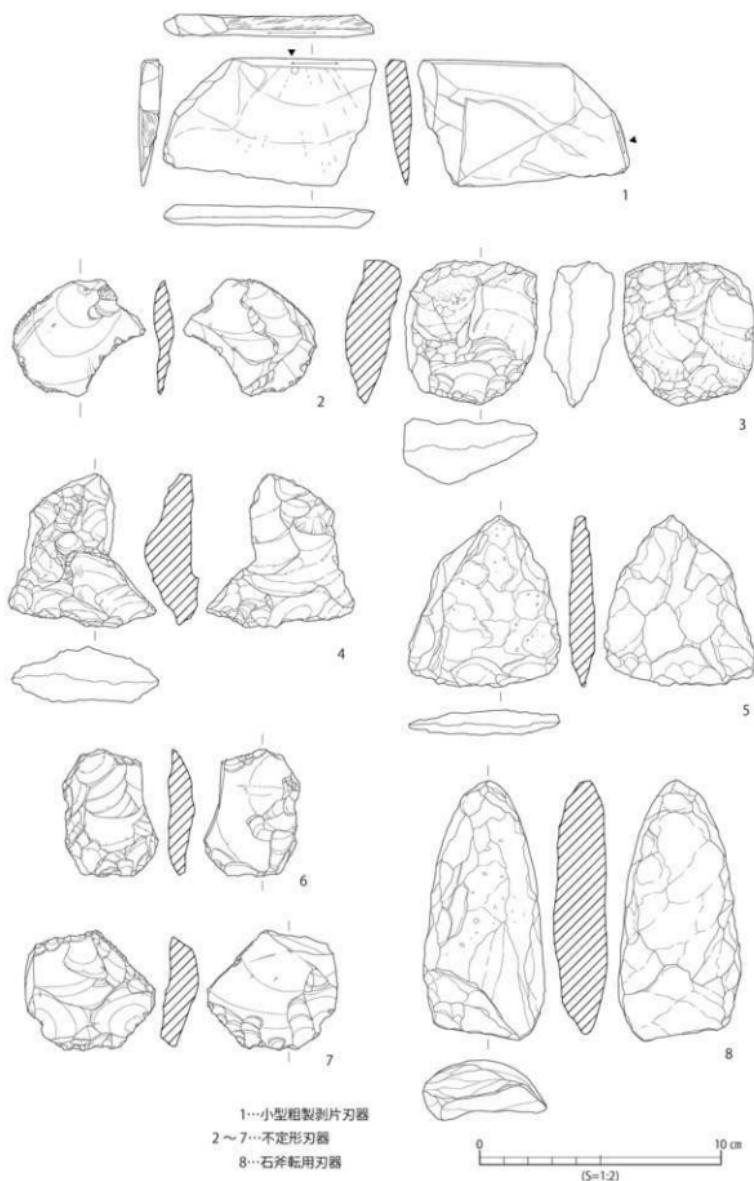
第40図 昭和55・56年度調査出土石器(1)



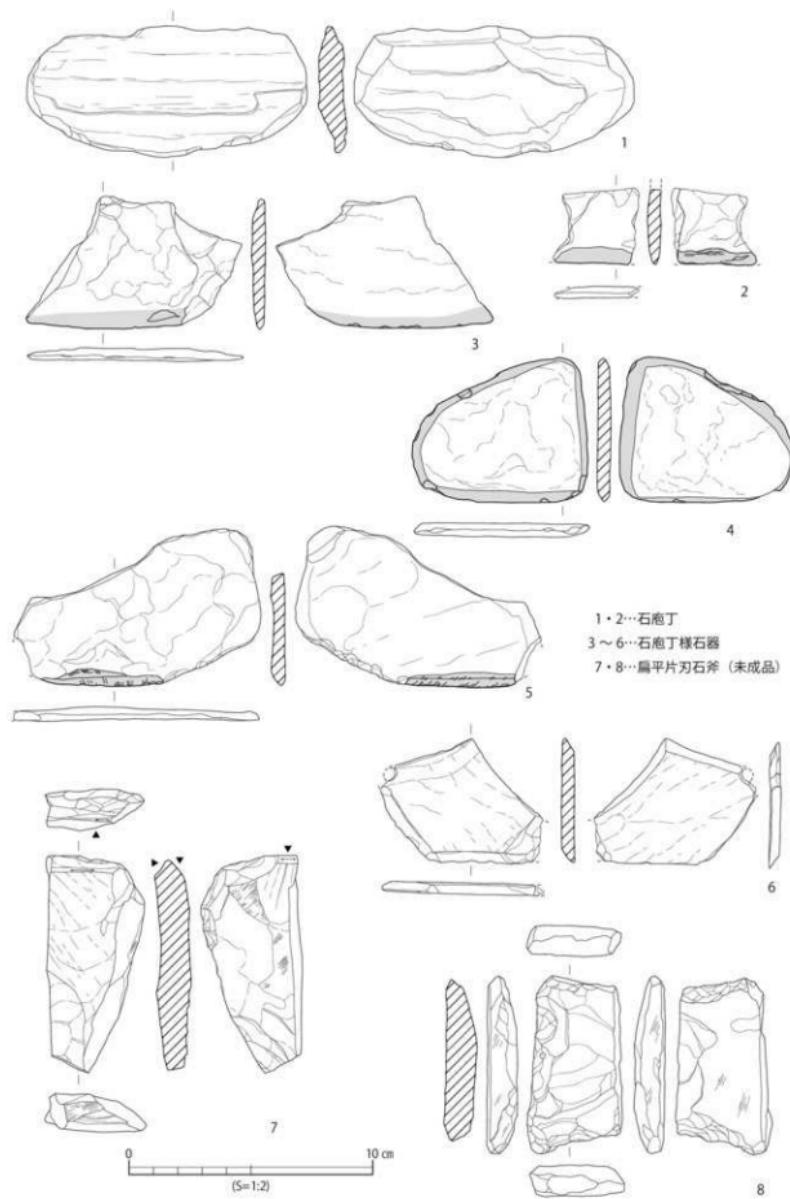
第41図 昭和55・56年度調査出土石器(2)



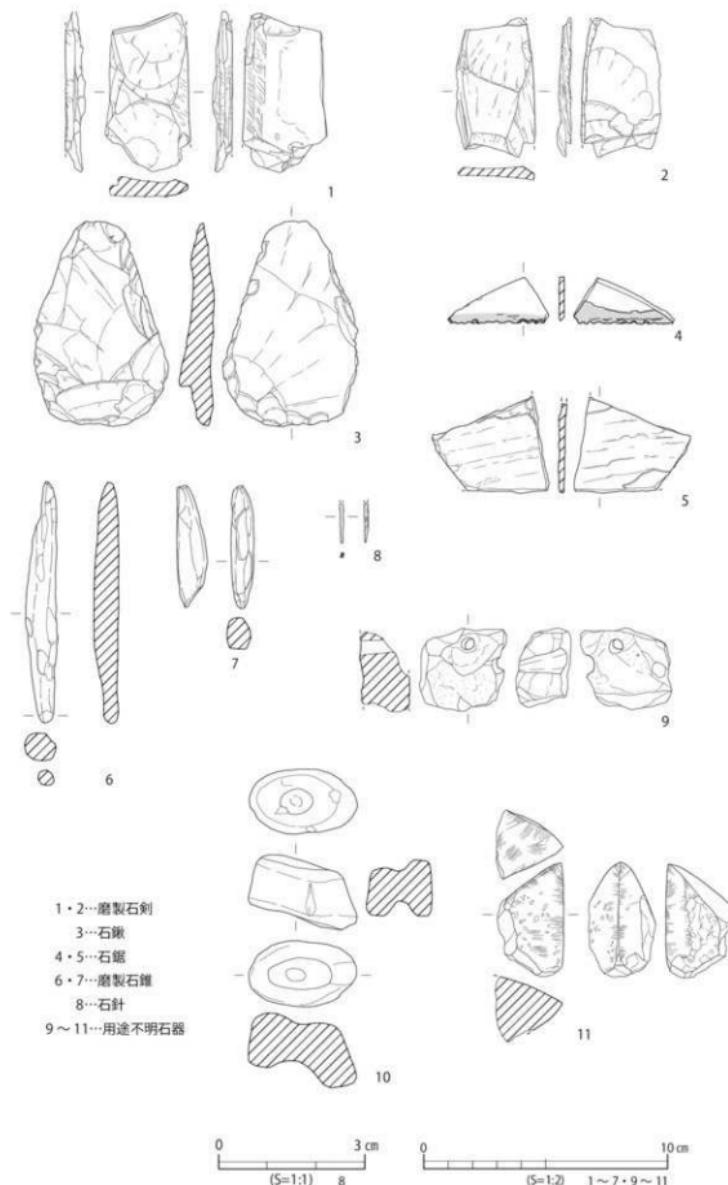
第42図 昭和55・56年度調査出土石器(3)



第43図 昭和55・56年度調査出土石器(4)



第44図 昭和55・56年度調査出土石器(5)



第45図 昭和55・56年度調査出土石器(6)



第46図 昭和55・56年度調査出土石器(7)

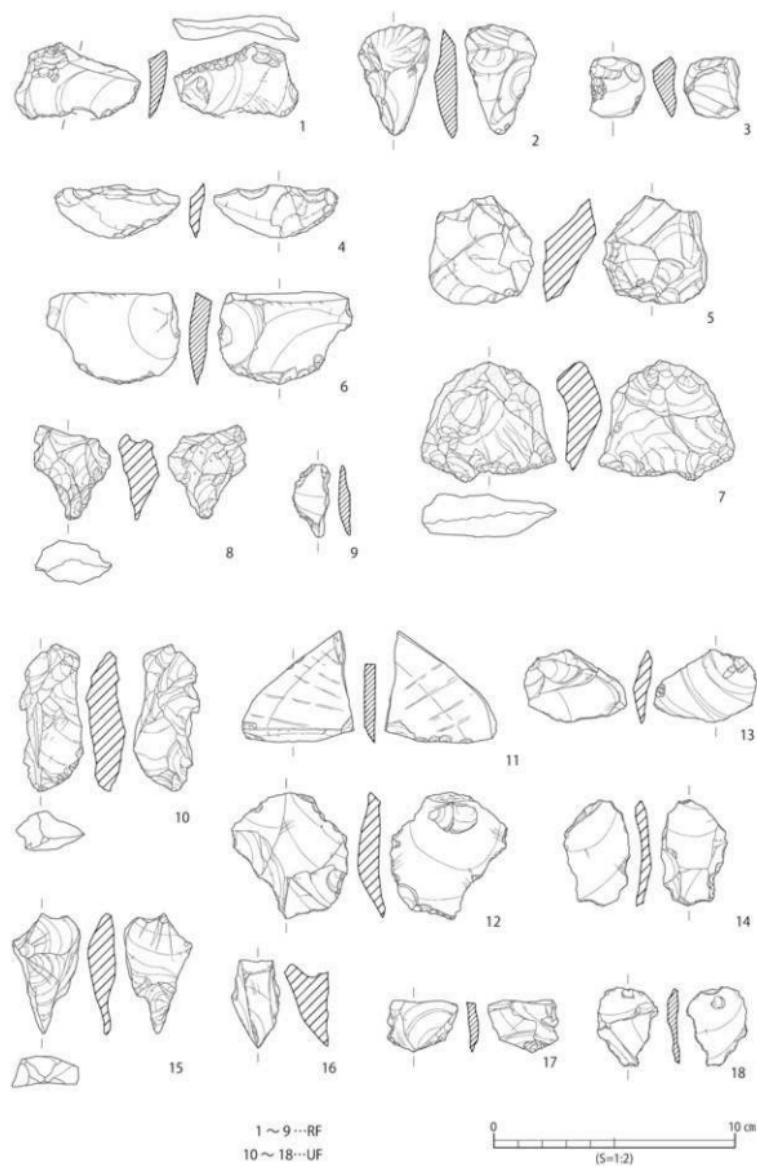
される。形状から管玉穿孔用の石針が想定されるが、回転による摩耗痕が認められず未成品または未使用品の可能性もある。9～11は用途不明品である。9は凝灰岩製の板状片で、表裏面からの径5mmの穿孔が2箇所で確認できる。10は台形状の上下面に円形の窪みが認められる。軸受けのような機能が想定されるが定かでない。石材は安山岩である。11は三角錐状の石器で、破損部を除く全面が顕著な研磨により平滑に仕上げられ、稜線が鋭く際立つ。

第46図は楔形石器である。上下面に両極打撃による剝離痕やつぶれが認められる。石材は5(玉髓製)を除きいずれも黒曜石製で、10は石鉋の再利用品とみられる。

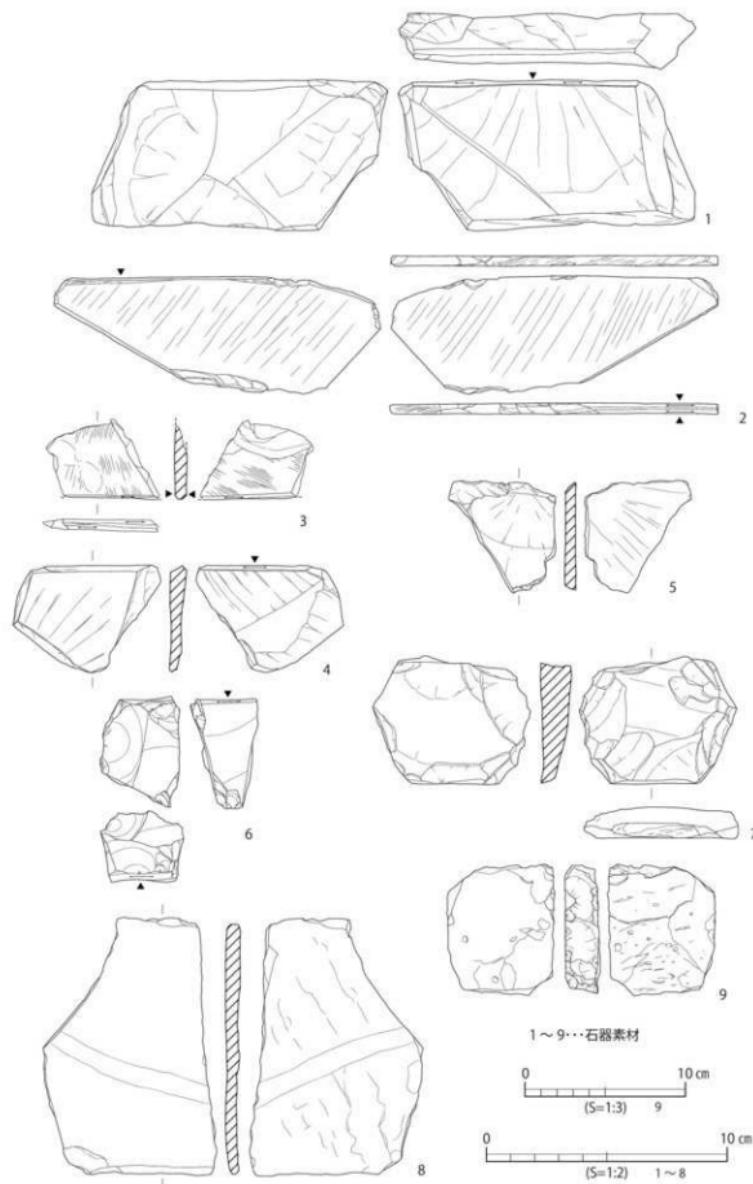
第47図は剥片石器類で、1～9は2次加工痕のある剥片(RF)として分類したもので、石材は1～3・8・9が黒曜石で、4が安山岩、5～7が玉髓である。1はスクレイパーで、横長剥片の長辺に刃部がつく。5～7も削器とみられ、縁辺に刃部が整形される。8・9は錐で、側面から細かな調整剝離により先端を尖らせている。10～18は使用痕のある剥片(UF)として分類したもので、いずれも顕著ではないが刃部や摩滅などの使用痕が認められる。石材は11(頁岩)を除き黒曜石である。

第48図は石器素材とした資料である。1～4は緑色凝灰岩製の板状素材で、小口面に施溝分離痕が認められる。特に2・3は板状素材の表裏面を顕著な研磨で平滑に仕上げており、表裏面からの施溝分離により縁辺部が折断されている。5は頁岩製の板状素材である。6は碧玉製の角柱状素材の2辺に施溝による分割痕が認められることから、西川津遺跡では希少な「B技法」(大賀2001)による管玉素材品と考えられる資料である。7は凝灰岩製の板状素材で、縁辺が剝離調整により円形に整形され、表面に研磨痕が認められる。紡錘車の未成品である可能性がある。8は流紋岩製の素材片である。厚さ0.6mmの板状品だが、研磨や調整剝離等の加工痕は認められず、何を意図したものは不明である。9は長さ8.2cm・厚さ2.2cmを測る瑪瑙製の板状素材である。帰属時期が不明なため断定はできないが、ここでは暫定的に勾玉等の素材品としておきたい。

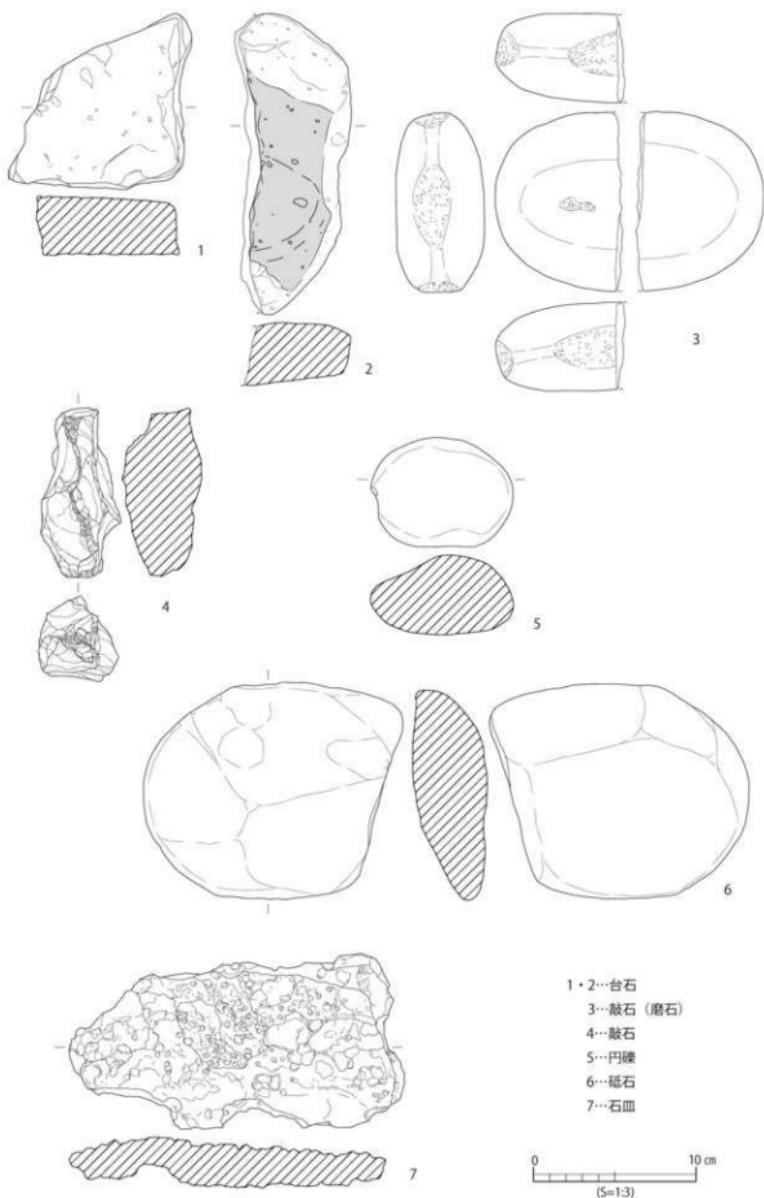
第49図1～6は礫石器類である。1・2は台石である。いずれも表面が摩耗しており使用痕と



第47図 昭和55・56年度調査出土石器(8)



第48図 昭和55・56年度調査出土石器(9)



第49図 昭和55・56年度調査出土石器(10)

みられる。3は磨石・敲石で、側面に敲打痕が認められる。4は玉髓製の柱状品で、小口面と長辺の縁辺部に敲打痕が残る。5は凝灰岩製の円盤、6は凝灰岩製の砥石とみられる。7は玄武岩製の板状素材品で、表面が凹状に湾曲することから石皿として使用された可能性もある。

## 5. 木製品の統計分析

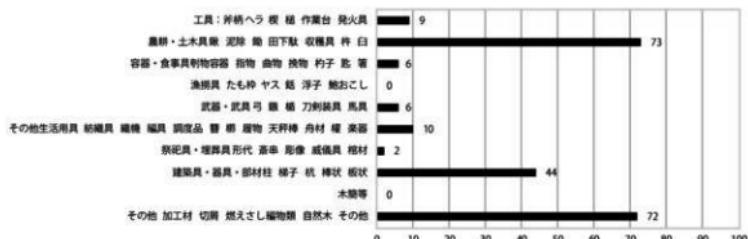
昭和55・56年度調査では、未成品を含む出土木製品のうち98点（西川津遺跡I：35点、西川津遺跡II：63点）が既に掲載されているが、今回の再整理作業で非掲載品を134点確認した（西川津遺跡I：52点、西川津遺跡II：82点）。従って当該年度の調査で出土した未成品を含む木製品の総数は232点となる。

このうち、木製品の器種別個数をまとめたのが第50図である。その他資料（72点）を除けば、最も多くの出土例があったのが農耕具類である（73点）。特に鍊や泥除の出土例が目立つが、製品以外にも連続製作の未成品も数例出土しており（「西川津II」第20図）、付近の集落で農耕具を製作していた可能性が高い。これに次ぐのが建築部材（45点）で、これら以外は出土数が10点以下であるが、工具類（9点）や容器類（6点）の他、生活具関連（10点）が認められる。一方で武器類（6点）や祭祀具（2点）は低調で、漁撈具に至っては明らかな出土品は確認できなかった。これらの木製品が全て弥生時代に属するかは注意が必要であるが、これらの傾向を多量の木製品が出土している海崎地区の状況と比較・検討することで、当該区域における集落の様相を推測することができると思われる。

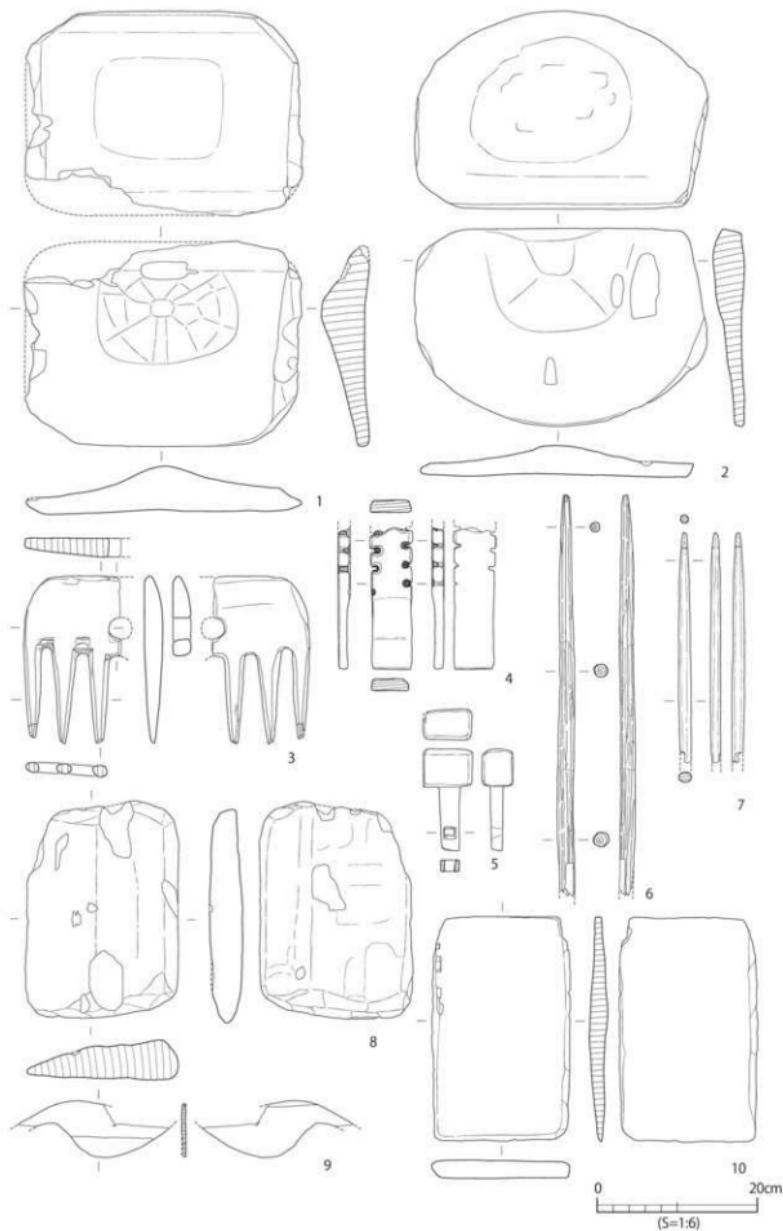
## 6. 木製品（非掲載）の図化

非掲載品のうち、今回10点を図化することができた。

第51図1・2は泥除未成品である。いずれも幅35cm前後の成形段階のもので、2は成形が進み、刃部が丸みを帯びている。3は直柄又鍊で、半分欠損しているが柄孔は円形で、刃部は6本歯と想定される（「西川津II」のPL6に出土状況のみ掲載）。4は火鑽臼である。板状材の長辺に沿って8箇所の火鑽孔が確認できる。5は建築部材の栓である。長さ約13cmの棒状の身部に方形の頭部がつく。身部には方形のほぞ穴が開けられている。6・7は棒状品で、6は長さ50cmを測り断面は円形で、先端を細く尖らせている。7は断面横円形で、細く加工される先端部に線を巻いたような痕跡が認められることから、弓の可能性がある。8は原材からミカン割りで切り離された板材で、



第50図 昭和55・56年度調査出土木製品の出土量（単位：個数）



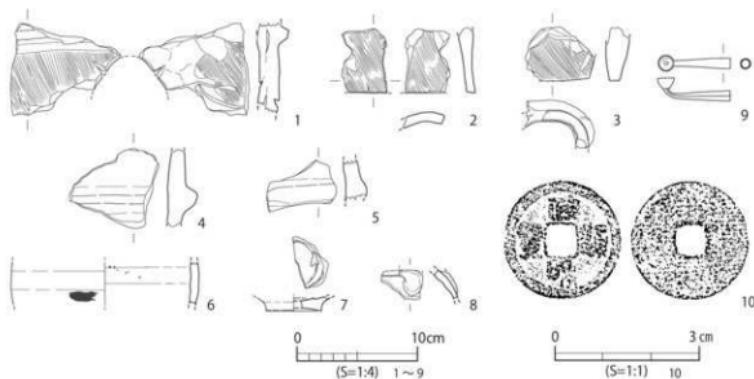
第51図 昭和55・56年度調査出土木製品

泥除など農耕具類の粗成形段階ものとみられる。9は厚さ0.5mmの板材品で、先端部は細く湾曲し、反対側はS字状にはね上がるようにな成形されるが、上方部が欠損しており全体の形状は定かでない。形態から鳥形木製品の可能性があることを考慮し、ここでは祭祀具として分類した。10は長さ28cm、幅17cmを測る方形の板状品である。中央部が厚く、両短辺に向かって薄くなるように成形されている。

## 7. 試掘調査（昭和54年度）出土遺物の図化

昭和55・56年度の調査にあたっては、前年の昭和54年度に1次調査として4つのグリッドを設定し試掘調査が実施されている（第7図）。今回の再整理作業では56点の出土遺物を確認し、このうち10点について図化を行った。

第52図1～5は円筒埴輪片である。1～3は硬質のもので、1は円形透かしが認められ、2・3は底部調整が行われている。いずれも第4グリッド出土品である。6は第1グリッド出土の須恵器壺の胸部片である。7は第3グリッドで出土した朝鮮陶磁灰青沙器皿の底部である。15世紀後半～16世紀前半とみられる。8は12世紀代の広東系の白磁四耳壺である。9はキセルの雁首、10は青灰色粘土層から出土した北宋の政和通寶（折二銭）である。



第52図 昭和54年度試掘調査出土遺物

### 【註】

- (1) 石器の分類にあたっては、村田裕一氏の指導を得た（詳細は第4章第4節を参照）。
- (2) 石材は中村唯史氏の鑑定による。

### 【参考文献】

- 出雲市教育委員会 2010『矢野遺跡』
- 大賀克彦 2001「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』第86巻第4号
- 田畠直彦 2003『山陰地方における縄繩木系土器の展開』『山口大学考古学論集 近藤喬一先生退官記念論文集』
- 島根県埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター 2003『弥生時代の磨製石器』島根県古代文化センター調査研究報告書13
- 島根県埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター 2006『島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成』島根県古代文化センター調査研究報告書33

## 第4章 総括

## 第1節 西川津遺跡の縄文土器

## 1. 縄文土器出土量からみた西川津遺跡の動態

昭和55・56年度調査の出土遺物については、今回の再整理作業により全容を把握することができた。西川津遺跡は、これまで縄文時代早期から弥生時代に至る質・量とも豊富な遺物が出土した遺跡とイメージされてきたように思われるが、縄文土器の出土量の推移や時期別の傾向を改めて検証することが可能となったといえる。全体的な傾向は第3章第3節で触れたが、西川津遺跡では上流部の鶴場地区の調査（鳥根県2013）において各時期における縄文土器の出土量が示されている。これを基に両地区における縄文土器の変遷や傾向を比較することで、西川津遺跡の特徴を浮かび上がりさせてみたい。

表6 昭和55・56年度出土調査及び鶴場地区縄文土器総括表

時期	型式	鶴場地区		昭和55・56年度調査	
		破片数	重量(g)	破片数	重量(g)
晩期後葉	(突滑文)	21	869		2,533
晩期中葉	谷尻	2	56		
晩期中葉	(縄原～谷尻)	1	10		
晩期中葉	縄原	3	57		1,799
晩期前葉	滋賀里畠a	1	38		
晩期前葉	岩田IV	2	32		
晩期	不明	8	458		1,068
晩期	計	38	1,520		5,400
後・晩期	不明	280	6,121		23,269
後期後葉	元住吉山II～宮滝	1	16		208
後期中葉	椎現山(新)	1	42		
後期中葉	椎現山(古)	1	44		
後期中葉	(沖丈～椎現山)	1	18		361
後期中葉	沖丈	1	15		
後期前葉～中葉	(崎ヶ鼻II～沖丈)	1	11		
後期前葉	崎ヶ鼻II	1	10		4
後期前葉	(崎ヶ鼻II)	1	10		
後期初頭	五明田	3	228		
後期初頭	(中津～五明田)	2	39		37
後期初頭	中津	6	165		
後期	不明	4	143		
後期	計	23	741		610
中期末	北白川C				65
中期後葉	里木II	1	20		233
中期前葉～中葉	(船元)	1	20		
中期	計	2	40		298
前期末					19
前期中葉～後葉	北白川下層				26
前期前葉	羽島下層II	2	54		
前期前葉	西川津(轟B)	41	1,675		3,682
前期前葉	長山	1	14		
前期	不明	22	593		1,945
前期	計	66	2,336		5,672
早期後葉	福呂	1	76		
早期後葉	菱根	2	86		996
早期中葉	黄鳥				43
早期	不明				272
早期	計	3	162		1,311
師属時期不明		8	206		5,094
	合計	420	11,126		41,654

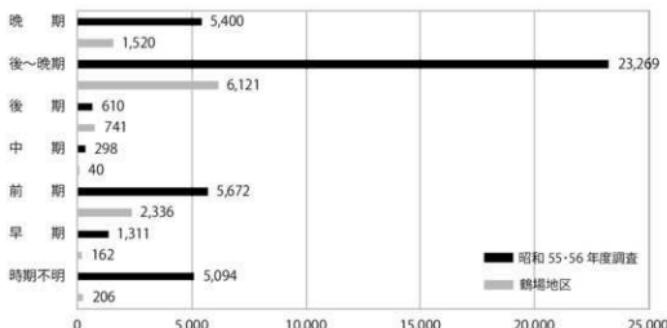
表6は両遺跡の出土量を時期別に分類したものである。鶴場地区ではより詳細な土器型式ごとに分類されているが、本報告における分類と時期区分ごとに対応させることは可能である。なお、総量は昭和55・56年度調査が41.6kg、鶴場地区が11.1kgであり、出土量は昭和55・56年度調査分の方が4倍近く多い。これを基に、時期別に出土量をグラフ化したのが第53図である。昭和55・56年度調査では、時期の判別できる最も古いものとして早期の土器が確認でき（1.3kg）、前期に出土量が急増（5.6kg）するが中期には著しく減少（約0.3kg）する。後期は中期と比較して出土量は若干増加するが（0.6kg）、晩期に至り再びピーク（5.4kg）を迎えることが判明した。なお、時期の特定が難しい後・晩期の粗製土器の出土量が圧倒的（23.2kg）なので注意を要するが、時期の判別できる土器の比較でも晩期は後期に対し約9倍の差があるので、相対的には中・後期の出土量は低調とみてよいだろう。

また、土器型式別に出土量の推移をグラフ化したのが第54図である。これによれば、前期にピークがあるのは、前期前葉すなわち西川津式の出土量が多いため（3.6kg）で、急減するのは前期中葉以降であることが明らかである。その後は小規模な増減で推移し、後期前葉に最も少量となるが、後期中葉から晩期にかけて増加傾向になり、晩期後葉に再び出土量が突出する（2.5kg）ことがうかがえる。

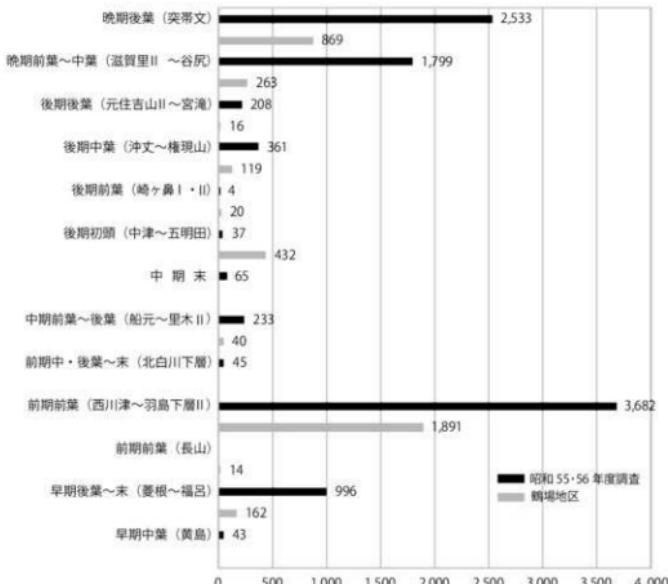
この傾向は鶴場地区の調査でも同様で、前期前葉と晩期後葉に出土量が増加する一方で、中・後期は相対的に低調であり、特に中期は著しく減少することが明らかである。従って、両地区的土器出土量の推移はほぼ同様といえ、前期と晩期の2つの時期に増加のピークがあるのが、土器出土量の推移から浮かび上がる、いわば縄文時代における西川津遺跡の特徴と指摘できるのではないだろうか。

## 2. 周辺地域における縄文時代遺跡の動態

山陰地方の縄文時代遺跡の実態については、平成22～25年度に実施された島根県古代文化センターのテーマ研究『縄文時代における山陰地域社会の展開』で総合的な調査研究が行われている。その中で幡中光輔は、山陰地方における縄文時代の集団領域を遺跡の動態から検討することを試み



第53図 昭和55・56年度調査及び鶴場地区における縄文土器の時期別出土量（単位：g）

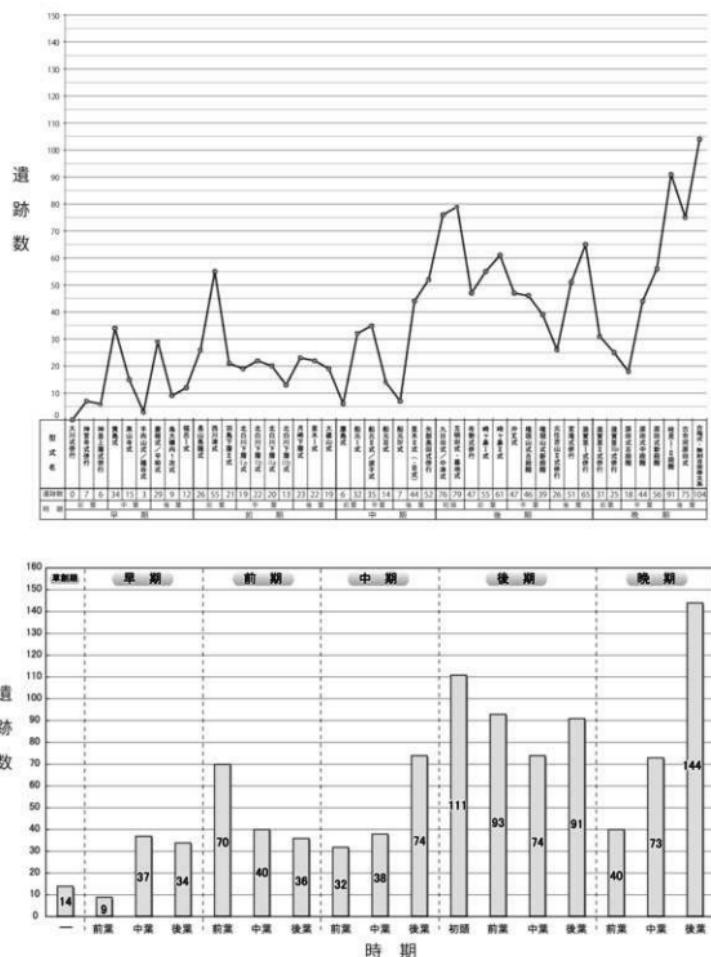


第54図 昭和55・56年度調査及び鶴場地区における縄文土器の土器型式別出土量（単位：g）

ており（幡中2014）、その基礎データとして鳥取・島根県の遺跡を集成し、検出遺跡数の推移を示している（第55図）。これによれば、両県とも同様の推移傾向が認められ、山陰地方全体で見ると、早期中葉（黄島式段階）、前期前葉（西川津式段階）、後期初頭（中津～福田K II式併行期）、晩期後葉（突帯文土器期）の4つの時期に遺跡数の増加のピークがあることを明らかにした。この傾向を西川津遺跡の動態と比較した場合、後期初頭を除いて、概ね西川津遺跡の土器出土量の増加時期と一致しているといえる。従って、西川津遺跡において中期末～後期前葉に出土量が減少するのは、山陰地方全体の縄文遺跡の動態とは異なる傾向を示すといえよう。

では、周辺遺跡の動態はどのようなものであろうか。これについて、同様に出土土器の総量を集計し分析が行われた遺跡からみてみたい。まず山間部では、縄文時代後期前葉の大規模な土器溜りや竪穴建物が検出された奥出雲町・林原遺跡の調査報告（島根県2007）において、出土縄文土器の集計が行われ、時期別の出土点数が示されている。これによれば、遺跡は早期から晩期にかけて土器が出土しているが、その総出土数（約5万3千点）に対して実に9割以上で後期初頭～前葉の土器が占める状況が認められる<sup>(1)</sup>。このデータは遺跡の性格にも関わる極端な事例かもしれないが、山間部の尾原地区や志津見地区においては縄文時代後期初頭～前葉の土器が多数出土する大規模な遺跡が複数知られており、山間部における当該期の盛行状況の一端を反映している可能性がある<sup>(2)</sup>。

一方、平野部の出雲市・京田遺跡4区の調査（出雲市2019）では、後期中葉を中心とした土器が総数20,365点（150.762kg）出土している。詳細時期の判別できる土器のうち、前期・中期の出土数は共に1点のみの出土で、後期初頭に至っても4点と散見される程度であるが、後期前葉では26点と若干増え、後期中葉で688点（約10kg）と急激に増加する。出雲平野の縄文遺跡は後・晩期に遺跡数が増加するとされており、この動態には後期前葉の三瓶山噴火に伴う洪水で発生した、大量の土砂による平野の地形発達や、噴火に起因する何らかの社会的要因が影響を及ぼしたと考えられている。



第55図 島根県の縄文時代遺跡数の推移(幡中2014)

この他に、近年調査された松江市朝酌町のシコノ谷遺跡（島根県 2021）が注目される。遺跡は大橋川北岸に立地し、西川津遺跡とは朝酌川～大橋川を辿って往来が容易な位置にある。この遺跡では縄文時代早期中葉から晩期までの遺物が出土しているが、出土量の最大ピークは早期後葉にある（なお前期前葉の西川津式は確認されていない）。また前期後葉から後期に至るまで土器の出土量が低調になり、晩期後葉に再びピークを迎える状況は西川津遺跡と同様といえる。

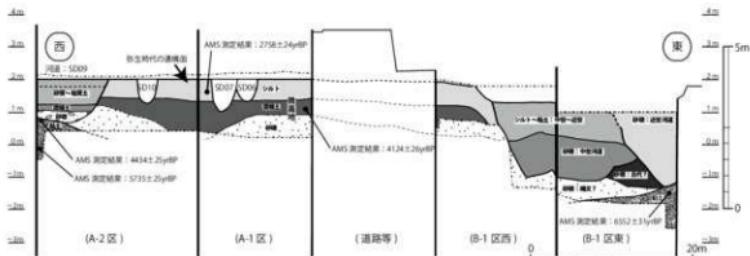
以上のように、大規模な集落遺跡では一見、遺跡が長期間にわたり安定的に継続するように見受けられる。しかしながら、土器の総量から時期別の推移を復元すると、山間部では中期末～後期初頭から晩期にかけて遺跡が盛行する一方、宍道湖東岸の平野部では早期後葉～前期前葉にピークがあり、前期後葉～中期～後期前葉は低調で、後期中葉から晩期にかけて出土量が増加する傾向がうかがえるといえる<sup>(3)</sup>。

### 3. 西川津遺跡の動態における自然環境の影響

最後に、このような動態を引き起こす要因について改めて考えてみたい。西川津遺跡は宍道湖東岸に広がる、朝酌川の河川堆積で形成された三角州平野に位置する。温暖化等の自然環境の変化による影響を受けやすい立地にあることがうかがえ、注目されるのは前述した鶴場地区の調査である。鶴場地区では、初めて朝酌川を横断する形で調査が行われ、弥生時代前期の微高地から環濠の可能性もある大溝が検出されるなど、過年度の調査では得られなかった当該期の遺構や生活面が明らかとなっている（第56図）。

この生活面を形成する土層の最下層で、いわゆる縄文海進時の海面上昇により堆積した内湾成泥層（粘土層）が検出されており、<sup>14</sup>C年代測定の結果、およそ縄文時代前期～中期の年代が示されている。この粘土層の上層には、順に砂礫層、腐植土層、シルト層が堆積し、シルト層の上面が弥生時代前期以降の生活面となる。また砂礫層は湖水面の低下に伴う河口の前進が活発な段階、腐植土層は河川堆積が停滞し湿地化した段階、シルト層は再度湖水面が上昇した段階と解釈でき、湖水面の変動に伴う沖積地の拡大過程を顕著に現していると考えられよう<sup>(4)</sup>。これらの上層の年代は、概ね腐植土層が中期末頃、シルト層が晩期後葉の測定値を示しており<sup>(5)</sup>、長期間に渡り不安定な堆積環境が続いていることが想定される。この状況は出土土器からも矛盾しておらず、当該地が最終的に陸地化し微高地になった時期は晩期前半以降と想定される。

この上層から読み取れる自然環境の変化を積極的に考慮すれば、前期前葉（西川津式）には遺跡



第56図 鶴場地区土層断面模式図（島根県 2013）

周辺は古穴道湖の内湾奥部にあたり、温暖化による安定的な環境で内湾周辺域での生産活動が活発化した様子がうかがえる。その後は気候の冷涼化に伴う環境の変動が激しくなり、時期的に土器の出土量が低調となる前期中葉以降とほぼ重なるといえる。そして晚期後葉に至り、最終的に陸地化した微高地で再び生産活動が活性化し、いわば弥生時代へと橋渡しされる環境が整ったものと推測される。

以上のように、縄文土器の出土量の推移は、西川津遺跡における縄文時代の動態を如実に反映していると考えられ、全体的にいえば、遺跡の消長は自然環境の変化による影響を極めて受けやすいことを示していると思われる。このことをさらに検証するためには、西川津遺跡の海崎地区をはじめとする他地区における出土遺物の総量分析が不可欠といえよう。

(深田 浩)

#### 【註】

- (1) 下記の本報告に掲載された一覧表を集計すると、総出土点数は 52,407 点となり、時期別にみると早期 1 点、前期 48 点、中期 448 点、後期 51,834 点、晚期 81 点となる。後期の中でも後期初頭～前葉段階で 51,815 点、中葉～後葉段階で 19 点であり、圧倒的に後期初頭～前葉段階の土器が集中して出土している。
- (2) 屋間部の代表的な遺跡としては、志津見地区では五明田遺跡、神原 II・III 遺跡、板屋 III 遺跡、貝谷遺跡、下山遺跡、尾原地区では幕地遺跡、寺宇根遺跡、原田遺跡、北原本郷遺跡、家の後 II 遺跡、平田遺跡などがある。これらの遺跡は単に当該期の遺物が出土するだけでなく、竪穴建物や土器添り、炉跡や土坑墓、配石墓、土器埋設遺構など、居住や祭祀関連構なども備えており、強い定着性がうかがえる。
- (3) あくまで西川津遺跡とシコノ谷遺跡での総量分類の成果を示したものであり想定の域を出ない。穴道湖東岸や中海沿岸部ではサルガ洞窟遺跡など前期～中期で土器型式が連続する遺跡が認められるので、今後、出土土器の統計データのサンプルが増加すれば、当該地域の地域性がみえてくると思われる。
- (4) 土層の堆積過程や環境変化の解釈は、文化財調査コンサルタント（株）・渡邊正巳氏の御教示による。
- (5) 各土層の AMS 年代測定値は、曆年較正用年代で内湾成泥層（粘土層）が  $6648 \pm 31$ yrBP・ $5735 \pm 26$ yrBP・ $4521 \pm 25$ yrBP、腐植土層が  $4060 \pm 26$ yrBP、シルト層が  $2730 \pm 23$ yrBP を示している。

#### 【参考文献】

- 出雲市教育委員会 2019 『京田遺跡 4 区』一般国道 9 号（出雲瀬戸道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書  
 島根県教育委員会 2007 『林原遺跡』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 11  
 島根県教育委員会 2013 『西川津遺跡・古屋敷 II 遺跡』  
 島根県教育委員会 2021 『若宮谷遺跡・シコノ谷遺跡』斐伊川水系大橋川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2  
 稲中光輔 2014 「縄文時代の集団領域と地域社会の輪郭－山陰地方の遺跡動態から集団領域を読み解く－」『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集 第 13 集

## 第2節 西川津遺跡の弥生土器

### 1. 弥生土器出土量からみた西川津遺跡の動態

昭和55・56年度調査で出土した全時代を通じた土器類（土製品含む）の総量は、約845kgである（第11図参照）。そのうち帰属時期が判別できる資料の、実に約94%にあたる約796kgが弥生土器であり、次いで縄文土器が多い（約42kg）。ここでは、西川津遺跡における人々の活動時期のほとんどを占めるとてもよい弥生時代の動態について、土器出土量の変遷からその特徴を検討してみたい。また、比較資料として、前回の再整理事業で全容が明らかになった、西川津遺跡とほぼ同時期の大規模な拠点集落である布田遺跡のデータを用いることとする（島根県2017）。両遺跡の数値を表7にまとめ、グラフ化したものが第57図である。

まず、昭和55・56年度調査における西川津遺跡の弥生時代前期前半（I-1・2様式）の土器出土量は18.3kgである。これ以前の縄文時代晩期全体の土器量は5.4kgだが、帰属時期不詳で後期～晩期とした土器群約23kgの大半が晩期と仮定すれば、縄文晩期の土器量とは相対的に同程度といえる。続く前期後半（I-3・4様式）では67.4kgの出土量があり、前期の時期不詳資料（229.9kg）も含めた場合、飛躍的に生産活動が盛んになったことがうかがえる。中期前葉（II様式）になると、26.3kgで前期後半と比較して量的に約4割減少するが、これは各様式の年代幅の差を反映している可能性があり注意が必要であろう<sup>(1)</sup>。続く中期中葉（III-1・2様式）には46.5kgと増加しており、前期から中期中葉にかけて、出土量が増減を繰り返しつつも継続的な集落經營が行われたと考えられる。しかしながら、続く中期後葉では出土量が3kgと急減し、いわば生産活動が中期中葉と比

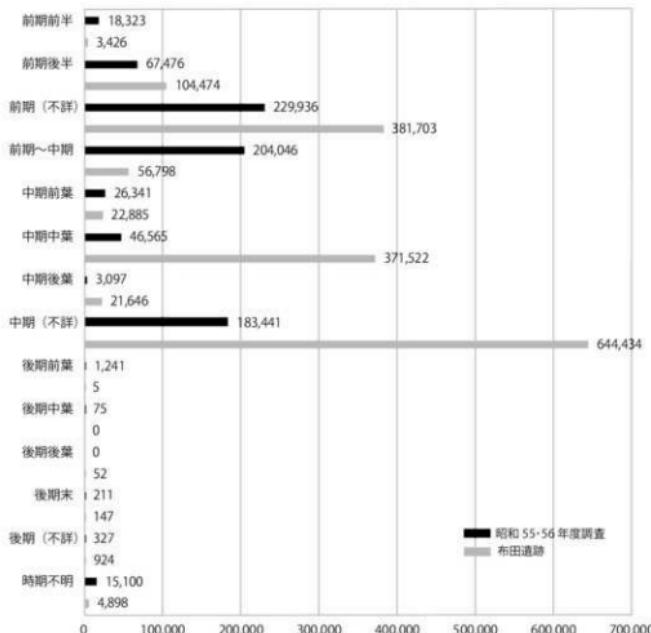
表7 昭和55・56年度調査出土弥生土器総括表

時期	様式	布田遺跡	昭和55・56年度調査	鶴場地区 重量(g)
		重量(g)	重量(g)	
前期	前半（I-1・2様式）	3,426	18,323	
前期	後半（I-3・4様式）	104,474	67,476	1,340,032
前期	不詳	381,703	229,936	
前期	計	489,603	315,735	1,340,032
前期～中期		56,798	204,046	43
中期	前葉（II様式）	22,885	26,341	1,756
中期	中葉（III-1・2様式）	371,522	46,565	28,032
中期	中葉（III～IV様式）			133,152
中期	後葉（IV様式）	21,646	3,097	13,367
中期	不詳	644,434	183,441	
中期	計	1,060,486	259,444	176,307
中期～後期				162,595
後期	前葉（V-1様式）	5	1,241	
後期	中葉（V-2様式）	0	75	
後期	後葉（V-3様式）	52	0	148,525
後期	末葉（V-4様式）	147	211	
後期	不詳	924	327	
後期	計	1,128	1,854	148,525
帰属時期不明		4,898	15,100	
	合計	1,612,913	796,179	1,827,502
	調査面積	17,832m <sup>2</sup>	1,100m <sup>2</sup>	1,080m <sup>2</sup>
	1m <sup>2</sup> あたりの重量	90.4g/m <sup>2</sup>	723.3g/m <sup>2</sup>	1,692.1g/m <sup>2</sup>

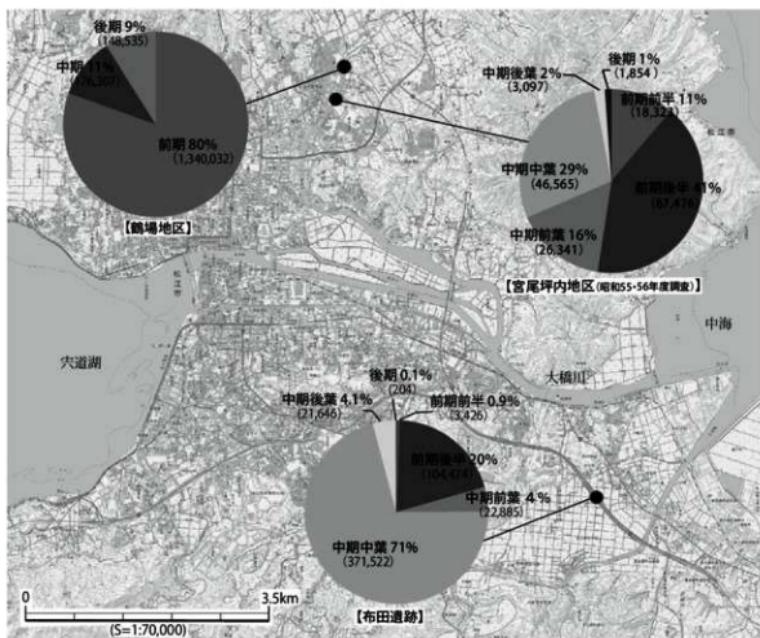
較して10%以下と著しく低調となる状況がうかがえる。その後、後期前葉では出土量がさらに1.2kgまで減少し、後期後葉に至っては確実にこの時期に比定できる資料が確認できない状況となる。従って、土器出土量から西川津遺跡宮尾坪内地区の動態をみた場合、縄文晩期から継続する生産活動のピークは前期後半にあり、その後中期中葉まで集落としての規模を維持するが、中期後葉以降は著しく縮小していく様子が認められるといえる<sup>(2)</sup>。

一方、布田遺跡における弥生土器の総出土量は約1,613kgであり、西川津遺跡の出土量の約2倍である。単純に帰属時期の明らかな土器の推移からみると、前期前半はわずかといえるが、前期後半にかけて急激に出土量が増加する(3.4kg→104.4kg)。中期前葉には一時的に減少するが(22.8kg)、中期中葉には飛躍的に増加する(約371.5kg)。しかし、中期後葉には著しく低調となり(21.6kg)、後期にはさらに激減する(1.1kg)という変遷を辿る。

以上のように、両遺跡における土器出土量の推移は極めて類似しているといえよう。両遺跡は大橋川を挟んで直線距離で7.5kmの距離にあり、朝釣川→大橋川を通じた水上交通により往来が容易な位置関係にある(第58図)。穴道湖東岸を代表する2つの拠点集落は規模が中期末に縮小・衰退化することは、前回の再整理報告書(鳥根県2017)でも言及されていたことではあるが、今回の集計作業により改めて裏付けることができた。また、拠点集落としての成立は西川津遺跡が先行し、それぞれの生産活動のピークは西川津遺跡が前期後半、布田遺跡が中期中葉にあることも注



第57図 昭和55・56年度調査及び布田遺跡における弥生土器の時期別出土量(単位:g)



第58図 西川津遺跡・布田遺跡の弥生土器時期別出土量（単位：g）

目される。このことは特に鶴場地区的調査において顕著で、出土量の80%が前期の土器で占められることからもうかがえよう（第58図）。

## 2. 特徴的な出土遺物

今回の再整理事業の目的の一つに、非掲載資料中から報告書作成時に洩れていた重要遺物の確認を行うことがあげられる。ここでは、今回の作業により改めて把握することができた資料をいくつか取り上げたい。

### 綾羅木系土器

從来から山陰地方の弥生時代前期には、綾羅木系土器と称される山口県西部を中心とした瀬戸内海沿岸地域の影響を受けた壺形土器が展開することが指摘されている（田畠2003）。綾羅木系土器の搬入品や忠実な模倣品は少ないが、胴部形態と文様を模倣する中で、特に貝殻施文による無軸羽状文を多様な部位に用いる特徴が認められる。このような貝殻施文が施された資料は報告書の中でも数点掲載されているが、今回の再整理において、改めて時期を大別することが可能な55点ほどを抽出・図化した（第21・22図）。

今回、抽出した土器はいずれも前期の壺の破片資料であるが、頸胴部界から胴部中位に貝殻腹縁等による直線文や有軸・無軸羽状文が施される。これらの文様は、使用される原体によって、①タ

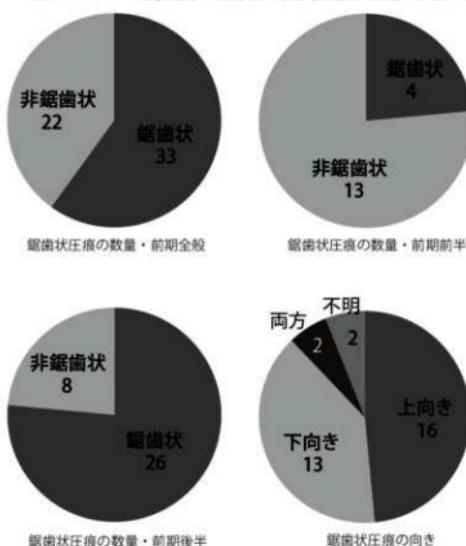
マキガイ科の貝殻腹縁による鋸歯状圧痕が明瞭なものと、②内腹縁に刻みの無い貝殻腹縁（もしくはヘラ状工具）による非鋸歯状圧痕のものに区別できる。これを数量で示したのが第59図である。まず前期を通じて55点（前半17点・後半34点・不詳4点）のうち鋸歯状のものが33点、非鋸歯状のものが22点であり、鋸歯状のものが多い。時期別でみた場合、前期前半17点のうち、前者が4点、後者が13点と約80%が非鋸歯状のもので占められている。一方、前期後半34点のうち、前者が26点、後者が8点と、約80%が鋸歯状のもので占められることとなり、前期前半と後半では比率が逆転していることが判明した（第59図）。

また、綾羅木系土器の貝殻施文は、鋸歯状圧痕が上向き（殻表面が下向きで施文）のが主体であるが、山陰地方では圧痕が下向き（殻表面を上向きで施文）なものが目立つ傾向にあることも指摘されている（田畠2003）。今回の資料を観察した結果、鋸歯状圧痕施文33点のうち、上向きが16点で、下向きが13点、両方が認められるもの2点、不明2点となった。従って下向きのものが全体の約40%を占めることとなり、従来の指摘のように、かなりの割合で下向きの圧痕による施文資料が存在することが明らかとなった（第59図）<sup>(3)</sup>。

以上のように、今回は綾羅木系土器のうち、貝殻施文による羽状文が施された資料をピックアップしたが、他にも第17図2のような口縁部内面の沈線など、各部位を装飾した土器が一定程度認められる。今後は、総体的な文様構成から、西川津遺跡における綾羅木系土器の属性や地域性を検証する必要があるだろう。

#### 無文土器系土器

昭和55・56年度調査の報告書は無文土器系土器の具体的な研究が端緒についたばかりの頃に刊



第59図 貝殻施文における鋸歯状圧痕の数量と向き  
(単位:点)

行されたが、今回の再整理の結果、朝鮮半島系土器に関する新資料として円形粘土帶土器段階の無文土器系土器を2点確認することができた（第37図4・5）<sup>(4)</sup>。

朝酌川遺跡群では、西川津遺跡やタテチヨウ遺跡で円形粘土帶土器段階の無文土器系土器の出土が既に複数点報告されている（池淵2010）。また出雲地域東部では他に松江市南部の布田遺跡での出土があり、出雲地域西部では原山遺跡、矢野遺跡、築山遺跡、山持遺跡、里方本郷遺跡でも出土している（池淵2010、山崎ほか2021）。一方で三角形粘土帶土器段階の無文土器系土器は、山持遺跡と布田遺跡で出土するのみである（山崎ほか2021）。出雲地域では時期の明確な

無文土器系土器はほとんどないが、円形粘土帶土器段階の資料は矢野遺跡の自然河道V層出土資料によりI-2様式段階までは遡り、また可能性のある資料を含めると田和山遺跡I-a環濠出土資料によりI-4～II-1様式段階までが存続時期幅と想定される。一方、三角形粘土帶土器段階の無文土器系土器は山持遺跡Ⅲ区の弥生時代後期中葉～後葉を主要な時期とする自然河道から出土しており、最下層の出土であることから後期中葉より古く位置づけられる可能性が指摘されている（池淵2010）。

西川津遺跡で出土する無文土器系土器に円形粘土帶土器段階の資料が複数ある一方で、三角形粘土帶土器段階の資料に欠ける状況は、前項で分析した弥生時代中期後葉には土器量が急減する様相と矛盾しない。円形粘土帶土器段階の無文土器系土器は、拠点的な集落ではないと考えられる里方本郷遺跡でも出土していることから出土遺跡の交易的様相は低く（池淵2021）、地域の開発拠点としての性格が考慮されている（山崎2021）。詳細な時期をふまえた検討が困難な現状では背景を明確にし難いが、朝釣川遺跡群では矢野遺跡と並び少なくない点数の円形粘土帶土器段階の無文土器系土器が出土していることから（山崎ほか2021）、出雲地域東部における拠点的な集落としての西川津遺跡の消長を反映しているものと考えたい。

### 3. 小結

西川津遺跡は、古宍道湖湾に面する三角州状の微高地に形成された、弥生時代の拠点集落遺跡であることは周知のとおりであるが、朝釣川の河川改修による河川の氾濫原を中心とした発掘調査であったため、集落の実態については不明な点が多く残されている。

そうした状況の中、今回の集計作業によって、弥生土器出土量の推移から西川津遺跡の動態を検証することが可能となった。即ち、宮尾坪内地区の弥生集落は弥生時代前期前半に成立し、集落の盛行は前期後半に認められ、中期中葉にかけて活発な生産活動が継続するが、中期後葉には集落規模が著しく縮小し、後期にかけて衰退していくという変遷を読み解くことができたといえよう<sup>(5)</sup>。

また出土遺物には、主に前期の貝殻施文による無軸羽状文が施された資料群や、朝鮮半島系の土器が含まれていることも改めて明らかとなり、今後他地域との交流による影響や地域性を検討する上で貴重な資料を追加できたと思われる。一方で、弥生時代前期を特徴付け、西部日本海沿岸に分布の中核があり、朝釣川遺跡群全体で50個以上出土している「土笛」や、中期の祭祀遺物を代表する分銅形土製品は、今回確認することができなかった<sup>(6)</sup>。このことは、上流の海崎地区や鶴場地区との関連を含め、西川津遺跡における拠点集落としての集落構造の実態を反映していることが示唆されるのではないだろうか。

以上のように、弥生時代における西川津遺跡の動態の一端を明らかにすることは大きな成果といえるが、布田遺跡の動態と比較することで、新たな研究の視野が見えてきたといえる。つまり、両遺跡の拠点集落としての成立や盛行に明確な時期差が認められることは、大橋川を挟んだ中心域の移動が想定され、特に両遺跡にみられる中期後葉の衰退現象は弥生時代中期における大きな画期として特筆される<sup>(7)</sup>。このことは、今後山陰地域における弥生時代前～中期の動態を解明していく上で、別途検討すべき課題といえよう。

（深田 浩）

## 【註】

- (1) なお、前期～中期（204.046g）とした資料は、大多数がI様式とII様式の区別ができなかったものである。前期全般（315 kg）と中期前葉（26kg）の比率はおよそ9：1なので、前期～中期分のうち約20kgは中期前葉と仮定した場合、中期前葉は約46kgとなり、中期中葉とほぼ同程度になる。また、これにより前期の盛行ぶりがより強調されるといえる。
- (2) 西川津遺跡の他地区における出土土器の推移については、西川津遺跡V区の調査報告書（島根県2001）で出土土器の総数を対称とした統計データが示されている。これによれば、弥生時代前期の土器出土数は4,325点、中期は1,502点、後期は509点であり、前期から時代が下がるにつれて大幅な減少傾向にあるのがうかがえる。また、昭和55・56年度調査と異なり、後期に至っても一定程度の出土数が認められるが、これは鶴場地区でも同様であり、朝酌川上流部の中核的集落としての傾向といえるかもしれない。
- (3) あくまで担当者による主観であり、施具の同定も含め、今後詳細な再検証が必要である。なお押図との対応は、鋸きのものが第21図1・20・25・28・29、第22図1・4・7～9・13・17・20、両方の向きが混在するものが第21図24、第22図2、判別不明なものが第21図27、第22図22である。このうち判別不明な第21図27は、タマキガイ科ではない貝殻を用いた施具とみられる資料である。
- (4) 無文土器系土器の様相については、岩本真実氏の御教示による。
- (5) なお、前期に関していえば、確かに最古段階（I～I様式）に該当する資料は現状で確認できていない。岩本真実によれば、出雲地域において最古の遠賀川式土器が出土するのは西部の出雲市原山遺跡で、他にも出雲平野の遺跡（矢野遺跡、三田谷1遺跡）で確認できるが出土量は少ない。東部においては、現状で朝酌川遺跡群のタテチョウ遺跡でわずかに確認できる程度である（岩本2021）。
- (6) ただし、1994・1995年に実施された当該調査区の隣接地の調査（III区）やII区の調査では、土笛が計4点出土したことが報告されており（島根県2000）、注意が必要である。
- (7) この中期後葉における穴道湖東岸域の拠点集落の縮小化を引き起す要因は明らかでない。近年、注目される酸素位体比年輪年代法による「氣候復元」によれば、紀元前1世紀には比較的安定していた酸素同位体比が、紀元1世紀になると数年周期で大きく変動し始め、紀元2世紀には數十年周期で変動を繰り返すことが指摘されている（中塚2012・2015）。この変動と当該域における拠点集落の衰退には時期差があるが、環境の変化が遺跡の消長に与える影響は今後も注視していく必要があろう。

## 【参考文献】

- 池澤俊一 2010 「山陰における朝鮮半島系土器の様相～弥生時代後期を中心に～」『日本出土の朝鮮半島系土器の再検討～弥生時代を中心に～』第59回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 岩本真実 2021 「出雲地域平野部における弥生時代前半期の土器様相」「山陰弥生文化の形成過程」島根県古代文化センター研究論集 第25集
- 島根県教育委員会 2000 『西川津遺跡Ⅶ』
- 島根県教育委員会 2001 『西川津遺跡Ⅷ』
- 島根県教育委員会 2013 『西川津遺跡・古屋敷Ⅱ遺跡』
- 島根県教育委員会 2017 『意宇平野の集落遺跡』島根県教育厅埋蔵文化財センター所蔵資料再整理事業報告書1』島根県古代文化センター調査研究報告書 53
- 田畠直彦 2003 「山陰地方における綾羅木系土器の展開」『山口大学考古学論集 近藤喬一先生退官記念論集』
- 中塚 武 2012 「I 気候変動と歴史学」「環境の日本史 I 日本史と環境－人と自然－」平山南編 吉川弘文館
- 中塚 武 2015 「酸素同位体比年輪年代法がもたらす新しい考古学研究の可能性」『考古学研究』第62巻2号
- 山崎頼人・原田敏照・岩本真実 2021 「山陰における無文土器系土器－出雲地域を中心として－」『山陰弥生文化の形成過程』島根県古代文化センター研究論集第25集 島根県古代文化センター
- 山崎頼人 2021 「九州から山陰における日韓交流モデルの構築」『山陰弥生文化の形成過程』島根県古代文化センター研究論集第25集 島根県古代文化センター

## 第3節 西川津遺跡出土土器の圧痕レプリカ法調査の結果

### はじめに

西川津遺跡の再整理事業の実施中に、土器の器面に種実による圧痕がいくつか認められた。そこで、レプリカ法により圧痕の原体を複製し、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡（Scanning Electron Microscope：以下、SEM）による観察を行った。

レプリカ法とは、圧痕内に印象剤（シリコン樹脂）を充填し、レプリカを作成し、その観察を通じて、原体の同定などを行う調査、分析法である（丑野・田川 1991）。

ここでは、西川津遺跡出土土器におけるレプリカ法調査の成果を報告する。

### 1. 調査の方法

対象とした資料は西川津遺跡の再整理事業の出土土器である。調査は、複数回にわたり実施し、都合4回にわたる<sup>(1)</sup>。

レプリカの作成方法は基本的に（丑野・田川 1991）による。作業の手順を次に概略する。

- ① 整理作業の際に、圧痕が確認された土器を観察し、圧痕を特定する。
- ② アセトンに浸した小筆やエアスプレーを用いて圧痕内の汚れ・土砂などを除去する。
- ③ 圧痕を実体顕微鏡で観察し、植物種実・昆虫・貝などの可能性がある圧痕であれば、土器全体及び圧痕部の写真撮影を実施し記録する。
- ④ 印象剤として使用するシリコン樹脂の油分が土器の器面に含浸するのを防ぐために、土器片をしっかりと水に浸す。ただし、土器片が脆弱な場合は、圧痕周辺にスポット等で水を含浸させたり、離型剤（パラロイド B-72 5% アセトン溶液）を圧痕部に塗布する。
- ⑤ 圧痕にシリコン樹脂を充填し、空気を抜き圧痕内部の奥にまで行きわたらせるために、竹串等で軽く突く。印象剤として使用したのは、株式会社ニッシン製JMシリコン（インジェクションタイプ又はレギュラータイプ）である。
- ⑥ 土器の器面にシリコン樹脂の油分が含浸するのを防ぐため、シリコン樹脂に熱湯をかけ、シリコン樹脂の硬化時間を短縮する。
- ⑦ 硬化したシリコン樹脂を抜き取り、レプリカを実体顕微鏡で観察し、作成状態を確認する。
- ⑧ シリコン樹脂に気泡などが取り込まれ、原体の形状や特徴が正確に復元できていない場合には、再度②～⑦の作業を繰り返す。
- ⑨ 実体顕微鏡による一次同定を行い、種実等の可能性があるものを絞り込み、SEM撮影観察用として選択する。
- ⑩ SEMを用いて、レプリカの観察と写真撮影を行う。観察、撮影には、島根県産業技術センター（本所）が所有する3次元計測走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製JSM-IT100LA）を使用した。また、観察撮影前にイオンスパッタ（日立ハイテクノロジーズ製E-1010）を用いてレプリカに金属蒸着を行った。

### 2. 調査対象と観察結果

調査対象としたのは、西川津遺跡の再整理事業における土器の分類作業中に圧痕が確認された縄

文時代～弥生時代にかけての土器であり、既に抽出された土器15点である。これらは、再整理事業の対象となった土器片全点についてレプリカ法を主目的として悉皆的に調査を実施し、抽出されたものではないことをお断りしておく。

レプリカ作成時には、作業用の仮番号として土器の分類番号をレプリカの資料番号とし、同一個体中に複数の圧痕がある場合には、資料番号の後ろに○数字を付した。

以下、レプリカを作成し、実体顕微鏡による一次同定の後、SEMによる観察、撮影を行った15点について記述する<sup>(2)</sup>。

**資料1** 縄文土器の口縁端部片である。縄文時代前期の西川津式の鉢と考えられる。内面に2箇所認められた圧痕それぞれのレプリカを作成し、その内、内面端部付近に認められた圧痕についてSEMで観察撮影を行った。レプリカは、長さ5.72mm、幅4.856mmの大型の球形を呈し、一端に盤状の基部が見られ果実の種子と思われるが、表面の構造が不明である。

**資料2** 縄文土器の胴部片である。詳細は不明であるが、晩期の鉢と推測される。内面に認められた圧痕からレプリカを作成しSEMで観察撮影を行った。レプリカは、長さ6.701mm、幅3.475mmの楕円体であり、表面の状況は不明瞭であるが、長軸方向に隆起部が見られ、形状、サイズからイネ科と考えられる。

**資料3** 弥生土器の壺口縁部の破片である。頸部外面には7条のヘラ描き沈線が認められ前期のI-4様式に位置付けられる<sup>(3)</sup>。頸部外面に認められた圧痕からレプリカを作成しSEMで観察撮影を行った。レプリカは、長さ2.504mm、幅2.089mmの一端がやや尖り気味の不正円形を呈する。表面からは具体的な構造が確認されず、種実等の圧痕では無いと判断される。

**資料4** 弥生土器の壺頸部の破片である。外面には3条の刻み目をもつ突帯が付され前期のI-3～-4様式に位置付けられる。外面に認められた圧痕からレプリカを作成しSEMで観察撮影を行った。レプリカは、長さ4.67mm、幅3.148mmの水滴状を呈し、腹面には楕円の凹みが2列確認され、ブドウ属の種子と考えられ、横方向に歪みサイズがやや大きいことからヤマブドウの可能性がある。

**資料5** 弥生土器の壺口縁部の破片である。頸部には円孔がみられ8条の沈線文の下に三角形の刺突文、3条以上の平行沈線文が施され、前期のI-4様式に位置付けられる。内面の円孔付近に認められた圧痕からレプリカを作成しSEMで観察撮影を行った。レプリカは、長さ5.896mm、幅3.541mmの楕円体であり、表面には長軸方向に隆起部と顆粒状突起が確認されることからイネ科と考えられる。

**資料6** 弥生土器の壺口縁部の破片である。外面頸部に2条のヘラ描き沈線文が施され、前期のI-2～-3様式に位置付けられる。外面に認められた圧痕からレプリカを作成しSEMで観察撮影を行った。レプリカは、長さ7.496mm、幅2.173mmと細長く、面をもっている形状である。表面からは具体的な構造は確認されず、種実等の圧痕では無いと判断される。

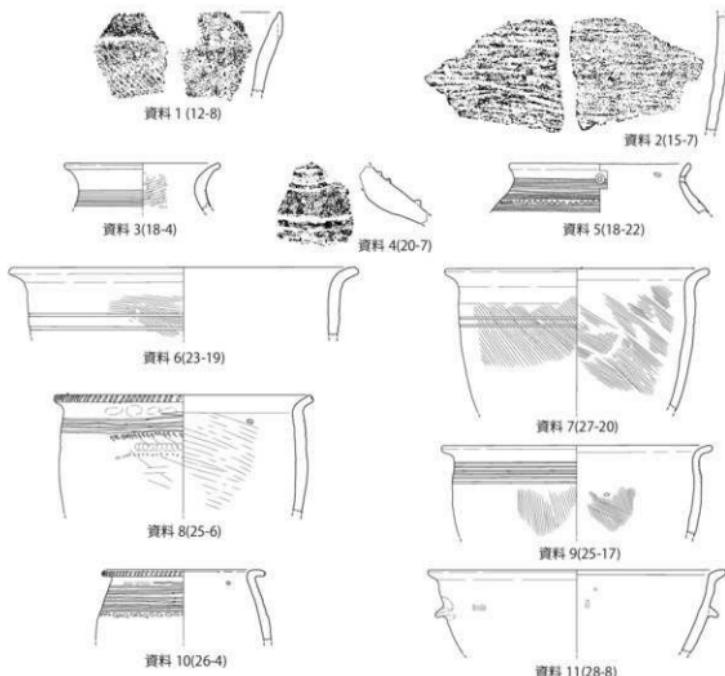
**資料7** 弥生土器の壺口縁部の破片である。外面頸部に2条のヘラ描き沈線文が施され、前期のI-2～-3様式に位置付けられる。胴部外面と口縁端部内面の2箇所に認められた圧痕からレプリカを作成し、そのうち胴部外面のレプリカについてSEM撮影観察を行った。レプリカは、長さ4.407mm、幅2.517mmの楕円形で、表面には長軸方向に緩い稜と浅い溝が見られる。イネ近似種・胚乳としておく。

**資料8** 弥生土器の甕口縁部の破片である。口縁端部には刻み目があり、頸部外面には4条の平行沈線文とその下に刺突文が施される。前期のI-3～-4様式に位置付けられる。口縁端部内面に認められた圧痕からレプリカを作成しSEMで観察撮影を行った。レプリカは、長さ5.569mm、幅3.571mmの楕円体であり、表面には長軸方向に隆起部と顆粒状突起が確認されることからイネ穂と考えられる。

**資料9** 弥生土器の甕口縁部の破片である。頸部外面には6条のヘラ描き沈線文が施され、前期のI-4様式に位置付けられる。胴部内面に認められた圧痕からレプリカを作成しSEMで観察撮影を行った。レプリカは、長さ4.939mm、幅3.167mmの楕円体であり、表面には長軸方向に隆起部が認められる。表面の顆粒状突起は見られないが、形状、隆起部及びサイズからイネ穂と考える。

**資料10** 弥生土器の甕口縁部の破片である。口縁端部には刻み目があり、頸部外面には8条の平行沈線文とその下に刺突文が施される。前期のI-4様式に位置付けられる。口縁端部内面に認められた圧痕からレプリカを作成しSEMで観察撮影を行った。レプリカは、形状から二枚貝と考えられる。長さ2.776mm、幅2.325mmであり、表面には成長肋が5条程度認められる。

**資料11** 弥生土器の鉢口縁部の破片である。胴部には、把手が付されており前期のI-3～-4様



第60図 西川津遺跡出土土器実圧痕等土器実測図

式に位置付けられると思われる。内面上部に認められた二つの圧痕からレプリカを作成し、そのうち一つをSEMで観察撮影を行った。レプリカは、長さ3.480mm、幅3.328mmの不整な円形を呈し、側面に面をもつ。表面には特に特徴は見られず、種実等の圧痕では無いと考える。

**資料12** 弥生土器壺の口縁部の破片である。口縁端部には刻み目が入り、頸部外面には上から刺突文、7条程度の浅い櫛描きの直線文、二段の櫛描きの刺突文が施され、中期のII-1様式に位置付けられる。口縁端部内面と頸部内面の二つの圧痕からレプリカを作成し、そのうち頸部内面のものをSEMで観察撮影を行った。レプリカは、長さ6.317mm、幅3.63mmの楕円体を呈し、長軸方向に浅い溝や稜が見られ、顆粒状突起も確認される。形状は歪なものであるが、イネ柄と考えられる。

**資料13** 弥生土器壺の頸部付近の破片である。頸部外面には10条以上の櫛描きの直線文とその下に刺突文が施され、中期のII-1様式に位置付けられると思われる。外面刺突文の下に確認された圧痕からレプリカを作成しSEMで観察撮影を行った。レプリカは、長さ4.890mm、幅3.614mmの不整形な形状であり表面に特に特徴は見られず、種実等の圧痕では無いと考える。

**資料14** 弥生土器壺の口縁部である。頸部外面には、上から8条程度単位の櫛描き直線文が3段、波状文が1段、直線文が1段と確認され、中期のII-1様式に位置付けられる。頸部内面の二つの圧痕からレプリカを作成したが、種実等の圧痕ではなかった。

**資料15** 弥生土器の破片である。外面には11条の平行沈線文が施される。時期は不明である。内面に認められた圧痕からレプリカを作成したが、種実等の圧痕ではなかった。

表8 西川津遺跡出土種実圧痕等一覧

資料No.	挿図	土器	器種	圧痕位置	種実等	時期等	報告書
1-① 1-②	12-8	縄文土器	鉢	内面 内面	- 果実の種子か?	前期 西川津式	西川津_2
2	15-7	縄文土器	鉢	内面	イネ	晩期	西川津_2
3	18-4	弥生土器	壺	外面	不明、非植物か?	前期 I -4	西川津_1
4	20-7	弥生土器	壺	外側	ブドウ属(ヤマドウカ)	前期 I -3 ~ -4	西川津_1
5	18-22	弥生土器	壺	内面	イネ	前期 I -4	西川津_1
6	23-19	弥生土器	壺	外側	不明、非植物か?	前期 I -2 ~ -3	西川津_1
7-① 7-②	27-20	弥生土器	壺	外側 内面	竹近似種	前期 I -2 ~ -3	西川津_1
8	25-6	弥生土器	壺	内面	イネ	前期 I -3 ~ -4	西川津_2
9	25-17	弥生土器	壺	内面	イネ	前期 I -4	西川津_1
10	26-4	弥生土器	壺	内面	二枚貝	前期 I -4	西川津_2
11-① 11-②	28-8	弥生土器	鉢	内面 内面	不明、非植物か?	前期 I -3 ~ -4	西川津_1 西川津_1
12-①	未図化	弥生土器	壺	内面	-	中期 II -1	西川津_2
12-②				内面	イネ		
13	未図化	弥生土器	壺	外側	非植物か?	中期 II -1	西川津_2
14-① 14-②	33-10	弥生土器	壺	内面 内面	-	中期 II -1	西川津_1
15	未図化	弥生土器	壺?	内面	-	時期不明	西川津_2

\*種実等の「-」は、レプリカ作成は実施。ただし、レプリカ作成後、種実等とは異なると判断(SEM撮影は行う必要なしと判断)している。

\*報告書\_1は、島根県教育委員会1980、報告書\_2は、島根県教育委員会1982

\*種実同定は、島根県古代文化センターの事業として文化財調査コンサルタント株式会社が委託により実施した。

## おわりに

西川津遺跡出土土器のレプリカ法による調査は、既に鶴場地区出土の縄文土器について濱田竜彦によって実施された成果がある（濱田 2013、2019）。これによると桂見Ⅱ式<sup>(4)</sup>の深鉢で認められた複数の圧痕からアワ穎果2点とキビ穎果？1点が確認されている。さらにイキスタイルの深鉢からはアワ穎果の圧痕が確認されている。このように西川津遺跡の縄文時代晚期後葉以降の突帯文土器には確實にアワの存在が認められ、キビの存在の可能性も考えられる。

今回の成果では、資料2の晚期と考えられる土器片からイネ穎が確認されたことから本遺跡の突帯土器の段階には、イネの存在も確実となった。また、資料2のイネ穎は現段階では西川津遺跡で確認される最古のイネ資料として評価することも可能である。

また、弥生時代前期から中期前葉の遠賀川式土器については、イネ穎圧痕を中心に今回の調査で確認している。イネはI-3様式～II-1様式にわたってみられ、連続してイネが存在していたことをうかがうことが可能である。特にII-1様式のイネ圧痕の事例は、これまで県内では確認されていないことから、確実に存在した証拠として貴重な事例といえよう。

しかしながら、縄文時代晚期の突帯文土器の段階以降にイネとともにアワ、キビも半島からセットで流入したと想定されている中で（中沢 2017）、アワ・キビの存在が今回の調査では確認できていない。おそらく、目立ちやすい大型のイネ圧痕のみが抽出されたことに起因するであろう。本遺跡でのイネ、アワ、キビといった大陸系穀物の時期ごとの様相の把握については、今後の課題としたい。

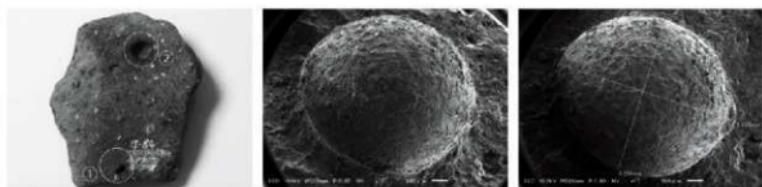
（原田敏照）

## 【註】

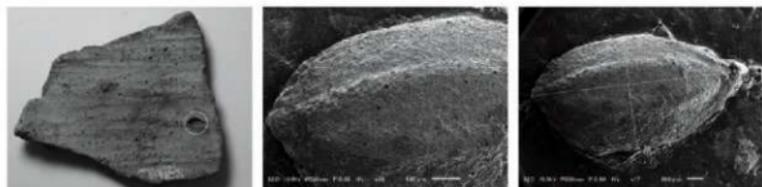
- (1) レプリカの作成等の作業は、2018年9月19日、2019年8月5日、10月9日、11月11日に原田敏照、岩本真実、小豆沢美貴の3名が実施し、SEMでの観察撮影は、2019年12月4日に原田、岩本が行った。
- (2) 種実等の同定については、島根県古代文化センターが実施した種実同定業務委託（実施：文化財調査コンサルタント株式会社）の成果を踏まえて、中山誠二 2010 を参考にしながら記述した。
- (3) 本編での弥生土器の編年については、松本 1992 による。
- (4) 縄文時代晚期の土器編年（型式）については、濱田 2008・2014 による。

## 【参考文献】

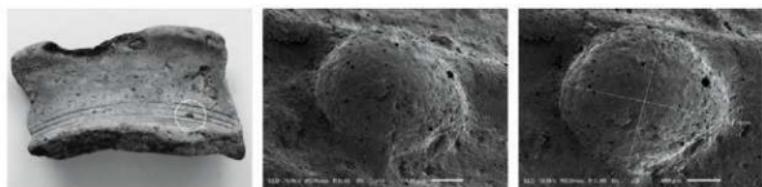
- 丘野毅・田川裕美 1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24、日本文化創学会  
設楽博己・守屋亮・佐々木山香・百原新・那須浩郎「日本列島における穀物栽培の起源を求めて」『農耕文化複合形成の考古学』上、設楽博己編、雄山閣  
島根県教育委員会 1980『朝御川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書 I』  
島根県教育委員会 1982『朝御川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書 II』  
中沢道彦 2017「日本列島における農耕の伝播と定着」『季刊考古学』138、雄山閣  
中山誠二 2010『植物考古学と日本の農耕の起源』同成社  
濱田竜彦 2008「中国地方東部の凸帯文土器と地域性」『古代文化』60-3、(財)古代学協会  
濱田竜彦 2013「西川津遺跡鶴場地区出土土器における種実圧痕のレプリカ法調査概要」『西川津遺跡・古屋敷II遺跡』島根県教育委員会  
濱田竜彦 2014「山陰地方の凸帯文土器と縄文時代終末期の様相」『中四国地域における縄文時代晚期後葉の歴史像』第25回中四国縄文研究会徳島大会  
濱田竜彦 2019「中国地方におけるイネ科穀物栽培の受容・試行・定着」『農耕文化複合形成の考古学』上、設楽博己編、雄山閣  
松本岩雄 1992「出雲・隱岐地方」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社



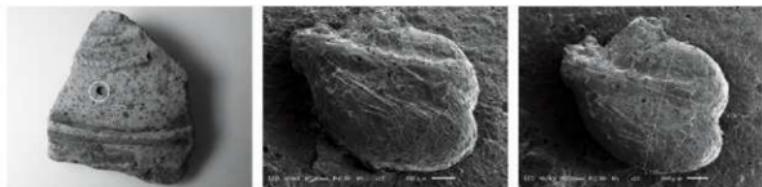
資料1 (12-8) レプリカは①



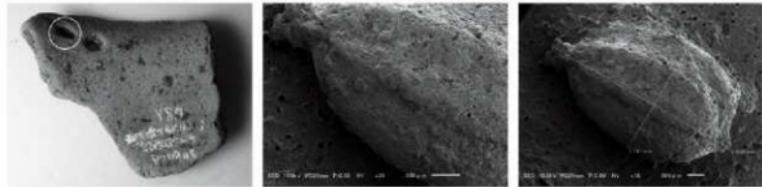
資料2 (15-7)



資料3 (18-4)



資料4 (20-7)



資料5 (18-22)

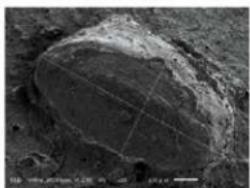
第61図 西川津遺跡出土土器の圧痕レプリカ法調査資料1



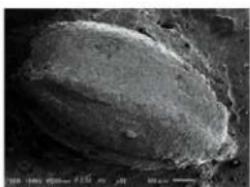
資料6 (23-19)



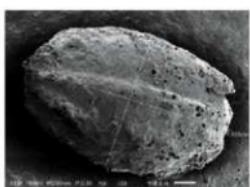
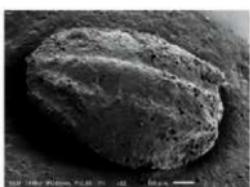
資料7 (27-20)



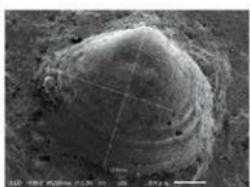
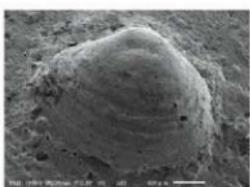
資料8 (25-6)



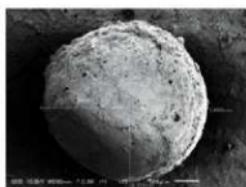
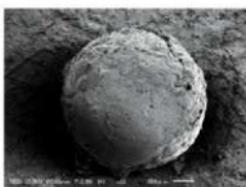
資料9 (25-17)



資料10 (26-4)



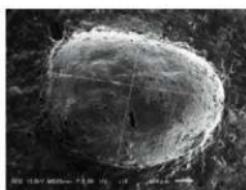
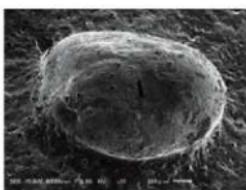
第62図 西川津遺跡出土土器の圧痕レプリカ法調査資料2



資料 11 (28-8) レプリカは①



資料 12 レプリカは②



資料 13



資料 14 (33-10)



資料 15

第63図 西川津遺跡出土土器の圧痕レプリカ法調査資料 3

## 第4節 西川津遺跡の弥生石器

### はじめに

西川津遺跡の弥生石器は、かねてより島根県および山陰地域を代表する弥生時代の石器として知られていた。特に大陸系磨製石器については、主要な器種のほとんどが出土していることに加えて、製作途中の石器（石器未成品）も出土し、質・量ともに充実していることから、地域の様相のみならず、北部九州地域中核部や近接する関門地域および山陽地域との関係を理解する上で、非常に重要な資料と認識されてきた（下條 1989）。ただひとつ、少しばかり奇異に思われていたのは、それだけ充実した大陸系磨製石器を出土しながら、典型的な石庵丁がほぼ皆無であることであった。

また西川津遺跡では、玉作り関連の資料の出土も充実しており、擦切溝を利用して「施溝分割」をおこなう「西川津技法」による菅玉製作の工程が復元されている（寺村 1990）。

一方、今回、再整理事業の1回目として報告される地区の石器であるが、典型的な大陸系磨製石器の出土は極めて少ない。大陸系というには貧弱な両刃石斧と石剣が僅かに出土しているのみである。また、従来、玉作りに関連すると考えられていた石器も出土しているが量は多くはない。今回報告分の地区は、出土の総量もそれほど多くはないものではあるが、上記のように、従来の西川津遺跡出土石器のイメージからすると、質的にもやや貧弱といわざるを得ない。ところがその反面、整理作業が進むにつれて、これらの石器が、意宇平野の弥生時代の石器文化を、端的に示す可能性のある石器として捉えることができる可能性が明らかになってきた。そこではじめに、これらの石器についての特徴を、大きく三つ指摘する。

一つは、定型的な石器以外の石器、とりわけ非定型的な剥片石器類が豊富にみられること。

二つ目は、従来、玉作り関連の技術として位置付けられていた「施溝分割」の技術が、石器製作においても、安定的に用いられていること。

そして最後は、調整剥離痕のある剥片（RF）・使用痕のある剥片（UF）が大量に出土していることである。

一つ目と二つ目からは、特定の剥片石器における石器製作技術体系を構造的に理解する端緒を開くことができた。また、三つ目からは、主に黒曜石製剥片の製作と使用的形態に関しての推論が可能になった。それでは、この3項目について、順に述べることとする。

### 1. 非定型的な剥片石器類

ここで解説する石器は、大型粗製剥片刃器・小型粗製剥片刃器・不定形刃器・石庵丁様石器の4器種である。大型粗製剥片刃器および小型粗製剥片刃器は、今回の報告に際し、島根県の石器に対して新たに設定する器種である<sup>(1)</sup>。また不定形刃器、石庵丁様石器は、島根県下において従来、設定されている器種であるが、今回、再定義する。それぞれの石器の器種認定基準と特徴は別図（第64図）にまとめる。本文では、基本的な部分について述べる。

はじめに別図の設計について解説する。

大きさは石器器種認定基準と石器器種の特徴からまとめている。石器器種認定基準は、石器形態と石器製作技術の二つの観点から設定した。石器の器種に求められる役割（機能や用途）を実現するために形態が決定され、その形態の形成を可能にするのが製作技術であるという考え方を根拠と

		大型粗製剥片刃器	小型粗製剥片刃器	不定形刃器	石庵丁様石器
石器器種認定基準	形状上の観点	刃部平面形態 直刃・曲刃	直刃・曲刃・尖刃（三角形）	直刃・曲刃・尖刃（三角形）	直刃・曲刃
		平面形態 不定形	不定形	不定形・不整な長方形・三角形・台形や楕円形などの不整な幾何形	不定形・不整な長方形・三角形・台形や楕円形などの不整な幾何形
		大きさ 刃部長 15cm 以上	刃部長 15cm 未満（主に 12cm 以下）	刃部長 15cm 未満（主に 10cm 以下が主）	刃部長 15cm 未満（主に 10cm 未満）
		厚さ 薄い	薄い	厚い	薄い
	製作技術上の観点	製法 石器素材 加工	基本的に打製、部分磨製や刃部磨製もある 大型の板状剝片 素材の周縁域に止まる、軽微な整形加工がおこなわれている。集積度は低い。無加工に近いものもある。	基本的に打製、部分磨製や刃部磨製もある 板状剝片 素材の周縁域に止まる、軽微な整形加工がおこなわれている。集積度は低い。無加工に近いものもある。	基本的に打製、部分磨製・刃部磨製 厚みのある剝片 素材の中心域に達する ような大きな削離調整と、素材の周縁域に止まる小さな削離調整の両方を用いて、整形加工と整厚加工がおこなわれている。集積度の高い人念な加工である。
		石材の特徴 石材石質	多様。しかし緻密な石質の石材（黒曜石、水晶、玉髓など二酸化ケイ素を主成分とする岩石や鉱物）は使用されない。	多様。しかし緻密な石質の石材（黒曜石、水晶、玉髓など二酸化ケイ素を主成分とする岩石や鉱物）は使用されない。	粗い石質の石材と、緻密な石質の石材（黒曜石、水晶、玉髓など二酸化ケイ素を主成分とする岩石や鉱物）の両方が使用される。
		石材性質 物理的性質 (硬度)	粗い 硬質～軟質（硬質なものが多い）	粗い 硬質～軟質	粗い 軟質（硬質なものもある）
		物理的性質 (耐性)	高い～低い（高いものが多い）	高い～低い	高い（高いものもある）
石器器種の特徴	推定される機能や用途と（使用場面）	根切り（農作業） 草刈り（農作業・一般作業） 切り分け（調理・狩猟・漁労）	穂刈り（農作業） 造形（工作） 切断（調理・狩猟・漁労）	造形（工作） 切断（調理・狩猟・漁労）	穂摘み（農作業） 搔き取り（草刈し）
	相当する從来器種	大型直縁刃石器の一部・横刃形石器の一部・RF や UF の一部	スクレイバーの一部・横刃形石器の一部・打製石庵丁様石器の一部・RF や UF の一部	スクレイバーの一部・打製石庵丁様石器の一部	磨製石庵丁様石器

第64図 西川津遺跡出土の非定型的な剥片刃器類における器種認定基準と特徴

する。石器器種の特徴は、器種認定の結果から得られる参照項目をまとめたものである。

石材については、石器の機能・用途、そして製作技術と本来、密接な関連性があるが、西川津遺跡出土石器のみならず、他地域・他遺跡から出土する資料も含めて器種全般を通観すると、地域の石材環境などにより極めて多様な石材石質の選択がおこなわれるのが実態である。このため、石材は器種認定基準からは一旦除外し、石器器種の特徴としてここに提示した。なお、本稿では、石材の用語は「石材=岩石名」の意味では使用せず、「石材=石器・石製品の用材あるいは材料の略語」として使用する。さらに、石材について、その特性を以下のように整理する。

#### <石材の特性>

1. 石材石質：岩石や鉱物の名前。表現としては、黒曜石・安山岩・水晶など。
2. 石材形態：石材の平面的あるいは立体的な形、外型。表現としては、三角形・長方形・幾何形・円盤状・長方体状・角錐状・円柱状・球状・塊状・厚い・薄い・継長・横長など。
3. 石材状態：自然に存在している段階から、製作段階を経て、石器として完成するまでの過程

において、石器に用いられる材料としてどのような状態にあるかということ。石器製作のどの段階にあるかによって、表現内容の性質が変化する。加工前の原材の段階では、転疊・自然石・川原石・海岸疊など。加工以後は、切石・割石・分割疊など。製作工程においては、石核・剥片などのように、石器素材と同じ表現となる。

4. 石材形状：石器の形態と状態をあわせた表現。表現としては、円盤状の川原石・球状の川原石・板状の切石など。石器製作工程においては、薄い縦長剥片、などのように、石器素材の状態説明とほぼ同じ表現となる。

5. 石材性質：岩石の組織的性質に基づいて、物理的性質が生じるとの考え方から、以下の2要素を設定する。特に物理的性質は、石器の機能面を支配し、刃部の鋭さや、耐久性を決定するものであり重要である。

A. 組織的性質：鉱物の結晶構造、あるいは岩石の構成鉱物の大きさ、形、かみ合わさり方、配列などの内部構造。表現としては、粗い／緻密。

B. 物理的性質

i. 硬度：組織的性質で表される内部構造における結合の強さ。表現としては、硬質／軟質。

ii. 耐久性（耐衝撃性・韌性）：外部から加わる力に対応する性質。表現としては、高い／低い、強い／弱い、強韌／脆弱、など。

機能や用途については、大型粗製剥片刃器が大型直線刃石器の一部で、小型粗製剥片刃器や不定形刃器はスクレイパーの一部で、使用痕分析から用途が実証されている<sup>(2)</sup>ほかは、形態や石材性質からのいわば直感的な想像である。このため、「推定される」と記すものの実際には想像の域を出ない。

相当する従来器種には、今回設定する器種と従来器種との石器名称および内容の対応関係を簡単に示した。

以下、器種毎に、別図としてまとめたこと以外の留意点、西川津遺跡出土石器における特徴を解説する。

大型粗製剥片刃器（第41図1～4）は、器種認定上、RFやUFとの区別が難しく、実際にはRFやUFのうちの特殊なものとして抽出される。粗製という名称の由来は、素材剥片の形態を刃部として活かし、簡単な加工により形成した石器、つまり仕上げの粗い石器であるという石器製作上の特徴による。西川津遺跡出土石器における特徴は、石材石質として、流紋岩・やや变成の入った硬質の砂岩や頁岩などの堆積岩が使用されていることである。これらの石材石質は、本来、物理的性質の変異の幅が大きいが、大型粗製剥片刃器には、物理的性質として硬質で比較的強韌なもののが主として選択されている。

小型粗製剥片刃器（第42図1～6、第43図1）も、大型粗製剥片刃器と同様に、器種認定上はRFやUFとの区別が難しく、RFやUFのうちの特殊なものとして抽出される。西川津遺跡出土石器における特徴は、石材の特性としては、サヌカイトのような硬質で比較的強韌なもの、安山岩のような硬質で強韌なもの、頁岩や緑色凝灰岩のような軟質でやや脆弱なものが使用されている。当然、使用される石材の特性によって機能差が生じ、用途の違いによる石材の使い分けがあったことが推定できる。

また、緑色凝灰岩を使ったものには、石器の上面や側面に擦切溝が残るものがある。擦切溝を利

用して、素材剥片の剥離をおこなったことがうかがわれる（第42図5・6、第43図1）。

不定形刃器（第43図2～7）は、平面形態と調整剥離痕の大きさが比較的分かりやすい器種認定基準となる。平面形態は、不定形、または完全には整っていない崩れた幾何形（不整な長方形・三角形・台形や楕円形など）になる。調整剥離痕は、素材の中心域に達するような大きな剥離痕と、素材の周縁域に止まる小さな剥離痕の両方がみられる。近畿地方から瀬戸内地域にかけてのサヌカイト多用地帯では、非常に多様な形態のバリエーションがみられる。石器素材の点からは、大型と小型の粗製剥片刃器には、薄い板状の剥片が使用されるのに対して、不定形刃器にはやや厚みのある剥片が使用される。西川津遺跡出土石器における特徴は、石材については、安山岩のような硬質で強靭なもの、黒曜石のような硬質でやや脆弱なものの2種類が使用されていることである。両者の間には、機能差が推定され、用途の違いによる石材の使い分けがあったことが推定できる。

石庖丁様石器（第44図3～6）は、典型的な石庖丁が少ない島根県下で、これに代わる石器を認定しようとして器種設定されたと考えられる。石庖丁に使用されることの多い頁岩系や凝灰岩系の軟質で板状に割りやすい特性のある石材石質が使われていること、刃部の平面と断面の形状が石庖丁と良く似ていること、石庖丁の紐孔と同様であるため紐孔と考えられる穿孔がみられることから、石庖丁と同等の役割（機能・用途）を担っていたと推定されたのであろう。この推定には一定の妥当性が認められるものの、推定される役割に基づいた名称設定方法については慎重に検討する必要がある。また、石庖丁様石器は、小型粗製剥片刃器や不定形刃器の一部と、大きさや石材石質に共通点がみられる。特に小型粗製剥片刃器と石材石質が同様のものは、用途の上でも共通性がある可能性が高い。その意味では、対比して小型磨製刃器のような名称がより適当なのかもしれないが、石庖丁様石器は、島根県下で既に一般化している名称であるため、ここでは石庖丁様石器の名称を踏襲しつつも、器種の内容については以下に再定義をおこなう。

平面形態は、不定形刃器同様に、不定形または、完全には整っていない崩れた幾何形（不整な長方形・三角形・台形や楕円形など）になる。製法は、基本的には磨製か刃部磨製である。定型的な石器ではなく、石器製作において、形態上の厳密な規格性が求められない器種であるために、完成品と未完成品、完形品と破損品の区別が難しい場合がある。さらに大形石庖丁など、他の器種からの転用品と推定されるものもあるが、上記の理由からこちらも同様に峻別が難しい。

このように全体的な形態では、典型的な石庖丁との類似性は小さい場合が多いため、石庖丁と機能的に全く同一でない可能性がある。種摘み以外の、何らかの別の用途を想定しておく必要も考えられるが、現時点では情報が少ないために踏み込まない。

ところで、大型粗製剥片刃器・小型粗製剥片刃器・不定形刃器・石庖丁様石器の4器種は相互に、共通と相違の関係性の中で位置付けることが可能である。まず4器種は何れも定型的な石器ではない。大型粗製剥片刃器と小型粗製剥片刃器の違いは、大きさと、石材石質の多様性である。石材性質は、大型粗製剥片刃器では硬質で韌性の高いものが多いのに対して、小型粗製剥片刃器は硬質で韌性の高いものと軟質で韌性がやや低いものの2種類がある。西川津遺跡出土石器の場合は、軟質で韌性がやや低い石材性質の小型粗製剥片刃器が多い。また、軟質で韌性がやや低い石材性質の石材を使用するという点は、石庖丁様石器と共通している。さらに、小型粗製剥片刃器と石庖丁様石器は、石器素材が薄い板状の剥片であることが共通している。小型粗製剥片刃器と石庖丁様石器の素材について、形態と石材性質に共通点があるということは、石器素材そのものを共有することが

可能である点で示唆的である。

小型粗製剥片刃器・不定形刃器・石庖丁様石器の3器種は、大きさでは共通しているが、相対的な厚さでは不定形刃器だけは少し厚くなる。さらに石材石質については、不定形刃器だけが、他の2器種では使用されない緻密な石質の石材（黒曜石、水晶、玉髓など二酸化ケイ素を主成分とするガラス質の岩石や鉱物）が使用されることも多い。特に、西川津遺跡出土石器の場合は、不定形刃器には黒曜石の使用が多く、一方で小型粗製剥片刃器には緑色凝灰岩の使用が多い。石材石質の選択性において、排他的であることが明瞭である。そこには、両者の石器組成における役割（機能・用途）の違いが、如実に反映されていると考えることができよう。

## 2. 施溝分離石器製作技術体系

西川津遺跡には、弥生時代前期の管玉製作技法として知られる西川津技法がある。この技法については、米田克彦氏により簡潔にまとめられている（米田 2014）ので以下に引用する。

西川津技法は、軟質の緑色凝灰岩を用い、石核の小口面から施溝分割することで板状剥片を作出し、表裏両面を平坦になるように研磨して板状素材を作るところに特徴がある。施溝分割とは、石核や素材に石鋸で浅い溝をすり切った後、溝に沿って間接的な打撃を加えることで、割れ面が平らになるように素材を割る技術のことである。この技術は縄文時代の玉づくりではほとんど確認されておらず、本格的な稻作文化の伝播に伴って中国や朝鮮半島から伝わった大陸系磨製石器の製作技術を応用したものと考えられている（下條 1987、大賀 2002）。西川津技法では板状素材を作る初めの段階で管玉1個体分の幅（径）が定まる。板状素材は表裏面の端から施溝分割を連続的に行い、棒状の管玉素材を作ることで、同一規格品の大量生産を可能にした。同技法は山陰西部の西川津遺跡、布田遺跡などで前期後葉から中期にかけて主体的に行われ、中期前葉には京都府扇谷遺跡、福井県飯谷在田遺跡、愛知県朝日遺跡まで拡散した。

ここで述べられているように、西川津技法は、「施溝分割」と呼ばれる擦切溝を用いた剥片剥離によって得られた素材剥片を用いて、表裏両面を研磨することで製作される、管玉素材を切り出すための板状素材に、さらに施溝をおこない、今度はその擦切溝を利用して板状素材を折断することで、規格性の高い棒状の管玉素材を連続的に獲得する点が技法の核である。

ところが、このような玉作りにおける「施溝分割」技術が、西川津遺跡の石器製作の体系の中に組み込まれていることが、今回の再整理事業の過程で明らかになった<sup>(4)</sup>。以下に詳述する。

### 「施溝分割」技術の確認と検討

従来いわれてきた「施溝分割」技術とは、石核または素材に予め擦切溝を刻み、その溝を力学的に利用することで、剥片剥離や折断を、正確さを以て容易におこなうことを可能にする技術である。上記引用部分からも分かるとおり、「施溝分割」には、素材剥片の剥離を目的とするものと、板状素材の折断を目的とするものの2種類がある。さらに一般化して考えると、原材や石核、または石器素材を純粹に二分することを目的とする場合も想定できる。そこで今回の再整理事業のなかで、玉作りを離れ、石器製作において、擦切溝を利用した石器製作技術を検討するのに先立ち、従来の「施溝分割」の概念を作業内容から細分し、施溝剥離・施溝折断・施溝分割（狭義の施溝分割）の3用語を設定する。そして、これらを包括するものとして、施溝分離（従来の「施溝分割」に相当する。

狭義に対しては広義といえる。) という用語を設定する。整理して以下に示す。

#### <施溝分離技術>

石器製作技術の一種である。技術内容は、菅玉製作における「施溝分割」技術と同様である。

1. 定義：原材・石核・石器素材に擦切溝を刻み（施溝）、この溝を力学的に利用することで、それらの剥離・折断・分割といった加工を、正確さを保持しながらも、かつ容易におこなうことを可能にする石器製作技術。
2. 加工の作業内容
  - A. 施溝剥離：石核などの小口面また小端面に施溝をおこない、その擦切溝を利用して、板状の石器素材剥片を剥離する作業。
  - B. 施溝折断：石器素材などの表裏両面または片面に施溝をおこない、その擦切溝の位置で取り取りをおこなう作業。石器素材の平面形態を整えるために、主として板状の石器素材に対しておこなわれる。
  - C. 施溝分割：原材や石器素材の片面または表裏両面に施溝をおこない、その擦切溝を境として、左右に分割をおこなう作業。作業対象物を二分することを目的とする。主として塊状であるなどの形態上の理由で割りにくい要素がある、あるいは分割に正確さが求められるなどの理由からおこなわれる。

#### 施工分離技術が適用されたことを示す痕跡が残る石器（表9）

今回報告する地区では、今回報告の石器と既報告の石器のなかに、施溝分離のための擦切溝が残るもののが多数みられる。ここでは、これらの石器を列記し<sup>(5)</sup>、特徴的なものについて解説する。

##### 1. 今回報告の石器

小型粗製剥片刃器3点（第42図5・6、第43図1）

板状石器素材4点（第48図1～4）

##### 2. 既報告の石器のなかで特徴的なもの

石庵丁様石器1点（II第15図7）

小型粗製剥片刃器1点（II第15図8）

不定形刃器1点（II第15図9）

小型粗製剥片刃器3点（第42図5・6、第43図1）には、何れも表面上部に、上面側からの擦切溝の痕跡がみられる。施溝剥離による剥片を素材としていることが分かる。

板状石器素材（第48図2）は長さ13.6cm、幅4.8cm、厚さ0.4cmを測る逆台形の薄い板状の素材である。上辺に残る擦切溝の痕跡は、施溝剥離のためのものと推定される。左下方の斜辺にあたる左側面には、表裏からの擦切溝の痕跡が残ることから、施溝折断がおこなわれたことが分かる。一方、右側面は、丁寧に研磨されているために擦切溝の痕跡は消滅しているが、この部分でも左斜辺同様に施溝折断がおこなわれたことが想像できる。下辺は連続する剥離痕により形成されている。剥離調整加工により直線的に仕上げられたと考えられる。このような左右両斜辺と下辺の加工に注目するならば、逆台形は意図的な形と判断できる。もしもこの石器において、刃部相当部分である下辺が、打製でしっかり作り出されていれば小型粗製剥片刃器、磨製であれば石庵丁様石器に器種認定できるのであるが、現状では刃部相当部分の加工が完了しているかどうか判断しにくい。つまりこの石器は、現状ではどうしても板状石器素材と判断せざるを得ないのである。あるいは、小型

表9 施溝分離石器製作技術体系関連石器一覧表

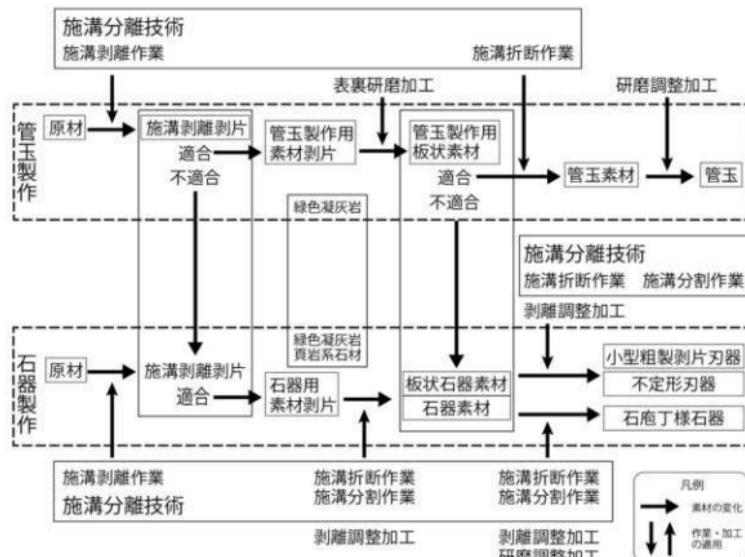
遺跡名	遺物番号	器種	作業と加工の種類	石材石質	報告書
西川津遺跡	第42図5	小型粗製剥片刃器	施溝剥離→剝離調整?	緑色凝灰岩	本書
西川津遺跡	第42図6	小型粗製剥片刃器	施溝剥離→施溝分割?・剝離調整	緑色凝灰岩	本書
西川津遺跡	第43図1	小型粗製剥片刃器	施溝剥離→研磨調整(側面)・剝離調整	緑色凝灰岩	本書
西川津遺跡	第48図1	石器素材	施溝剥離	緑色凝灰岩	本書
西川津遺跡	第48図2	板状石器素材	施溝剥離→素材表裏研磨→施溝折断→研磨調整→剝離調整	緑色凝灰岩 (管玉には不適)	本書
西川津遺跡	第48図3	板状石器素材	施溝剥離→素材表裏研磨	緑色凝灰岩	本書
西川津遺跡	第48図4	石器素材	施溝剥離	緑色凝灰岩	本書
西川津遺跡	II第15図7	石庖丁様石器	施溝剥離→研磨調整	黒色頁岩	鳥根県教委1982年
西川津遺跡	II第15図8	小型粗製剥片刃器	施溝剥離→研磨調整→剝離調整	黒色頁岩	鳥根県教委1982年
西川津遺跡	II第15図9	不定形刃器	施溝剥離→剝離調整	緑色凝灰岩	鳥根県教委1982年
布田遺跡	139	石庖丁未成品または不定形刃器	施溝剥離→施溝分割→剝離調整	緑色凝灰岩	鳥根県教委1991年
布田遺跡	358	石庖丁様石器未成品または不定形刃器	施溝剥離→素材表裏研磨→剝離調整・研磨調整(側面)	灰色凝灰岩	鳥根県教委1991年
布田遺跡	914	UF(あるいは小型粗製剥片刃器)	施溝剥離	緑色凝灰岩 (硬質)	鳥根県教委1991年
布田遺跡	916	RF(石庖丁様石器または小型粗製剥片刃器)	施溝剥離→剝離調整	緑色凝灰岩 (硬質)	鳥根県教委1991年
布田遺跡	917	小型粗製剥片刃器	施溝剥離→剝離調整	緑色凝灰岩 (硬質)	鳥根県教委1991年
布田遺跡	1006	大型粗製剥片刃器	施溝剥離→剝離調整	緑色凝灰岩 (硬質・管玉には不適)	鳥根県教委1991年
布田遺跡	1009	石庖丁未成品または不定形刃器	施溝剥離→施溝折断→素材表裏研磨→剝離調整	緑色凝灰岩	鳥根県教委1991年

粗製剥片刃器または石庖丁様石器の未成品である可能性までは指摘できる。ところが、可能性を指摘できる石器器種が、小型粗製剥片刃器か石庖丁様石器である点が問題を複雑にする。何れも定型的な石器ではないこと、しかもその未成品であることが、器種の正確な特定を困難にしているのである。とはいえ、施溝剥離によって得られた剥片を素材として、表裏を研磨調整することで完成される管玉製作と同様の板状の石器素材を用いて、製作がおこなわれている点が重要である。また、石材石質に注目すると、緑色凝灰岩ではあるものの黒色の粗い砂粒が層状に混入しており、管玉の石材としては必ずしも優良ではなかったのではないかと推定できる。

以上のことから、この石器からは、石器素材の獲得と利用について、二つの可能性を考えることができる。一つは、管玉製作において、管玉の石材としての品質の水準を満たすことができなかつたために不適合品として除外された管玉製作の板状素材が、石器素材へと流用された可能性である。そしてもう一つは、初めから石器素材とすることを目的としながら、管玉製作の板状素材製作と同じ技術で施溝分離と表裏面研磨の作業がおこなわれた可能性である。前者であれば、石器素材の相互共有、後者であれば石器製作技術の相互共有を示す。いずれにせよ、何らかの形で石器製作システムを相互に共有する構造をみることができる。

なお、小型粗製剥片刃器(II第15図8)も上記の板状石器素材(第48図2)と同様の事例であるが、こちらは石材石質が管玉の石材としてはより不適合な黒色の砂質頁岩である点が重要である。この石器の場合は、石器製作技術の相互共有ということになる。

不定形刃器(II第15図9)には、施溝分離の痕跡が多く残る。左右の側面には、ともに表裏両



第65図 施溝分離石器製作技術体系構造概念図

面からの擦切溝の痕跡が残っており、施溝折断がおこなわれたことが分かる。折断面は研磨されているが溝の痕跡は明瞭である。上面には、施溝剥離のための擦切溝の痕跡が表裏両面にみられ、素材剥片が連続的に剥離されたことを示している。さらに注目されるのは、上面中央部に長手方向に斜交するように一筋の擦切溝がみられることである。実際の分割は実施されていないが、この石器を半截するための準備として施溝されたのであれば、この溝が素材の平面に対して斜交していることは重要である。施溝分割による半截によって、素材の分割と刃部の作り出しを、同時に実現可能であるということを意味し、非常に効率的な方法といえる。まさに石器製作に特化した施溝分離技術が存在したことが想起させられるのである。

剥離調整加工については、表面には素材の中心域にまで到達する大きな調整剥離痕がみられるが、裏面にはみられない。半月形の刃部は、素材の表裏からの細かな剥離調整によって作り出されている。

以上特に2点の石器（第48図2・II第15図9）について特徴を詳述した。ここから分かる西川津遺跡における石器製作技術の特徴をまとめる。

- 1) 管玉製作と石器製作において、施溝分離技術という技術基盤が安定的に共有されている。
- 2) 施溝剥離剥片（施溝分離技術で得られる、ある程度規格的で平板状を呈する素材剥片）が、管玉製作用板状素材（施溝剥離剥片の表裏両面を研磨調整することで完成される板状素材。これから施溝折断により管玉素材が取り出される。）へと加工されたり、石器素材として使用されたりと、管玉製作と石器製作の間で相互に共有されている。
- 3) 管玉製作用板状素材が、石器製作のための素材（板状石器素材）として提供される場合がある。

- 4) 施溝剥離片、および菅玉製作用板状素材から、小型粗製剥片刃器・不定形刃器・石庖丁様石器などの複数の器種が製作されている。
- 5) 施溝分離技術は、菅玉の石材である緑色凝灰岩のみならず、黒色頁岩にも使われていている。
- 6) 施溝折断により石器の平面形態を整えるなど、施溝分離技術を多様に利用した石器製作がおこなわれている。

これらのことから、一部に推定部分を残すものの、西川津遺跡には、施溝分離技術を基盤とし、緑色凝灰岩や頁岩など、組織的性質が粗く、硬度が軟質で韌性がやや脆弱ではあるけれど加工しやすい石材を使い、施溝剥離によって石器素材を獲得し、施溝折断や施溝分割によって石器素材の加工をおこなうことで、小型粗製剥片刃器・不定形刃器・石庖丁様石器などの複数器種の石器を作り出す石器製作の体系、すなわち施溝分離石器製作技術体系が存在したことがみてきた（第65図）。西川津遺跡には典型的な石庖丁がみられず、その代わりに石庖丁様石器があることも、施溝分離石器製作技術体系の存在、特に施溝剥離片の規格幅に関係しているのかもしれない。

### 3. 黒曜石製の調整剥離痕のある剥片（RF）および使用痕のある剥片（UF）

今回の再整理事業では、黒曜石製の剥片・チップ・調整剥離痕のある剥片（RF）・使用痕のある剥片（UF）が大量に出土している状況が再認識された。ところで、縄文時代と弥生時代の複合遺跡で打製石器が出土した場合、明確な根拠もないままに、縄文時代の石器の混入として捉えられることがあるが注意が必要である。西川津遺跡の場合も縄文時代の遺物の出土があり、しかも石器の多くが包含層からの出土遺物であるために、遺構出土遺物のような共伴土器からの細かな時期比定ができないため、上記のような黒曜石製石器も、縄文石器が一定量混入している可能性を考慮する必要がある。しかし問題は、その混入の程度である。これを正確に測ることは不可能であるが、遺構密度や土器出土状況から、ある程度の推定をすることは可能である。今回の再整理事業では、時代別、時期別、さらには土器型式別に、詳細な土器重量の計測が実施された。この結果を参考にするのが、現状では最も妥当であろう。そこで、縄文土器と弥生土器の総重量比較をおこなうと、縄文土器 41,654g に対して弥生土器 796,179g である。縄文土器の出土量は、土器の全体量の 5% 弱に過ぎないのである。もちろんこの数字を以て、例えば黒曜石剥片の約 5% が縄文時代のものであるというようなことまではいえない。けれども一つの目安にはなる。大半が弥生時代（特に中期以前）の所産であると捉えても大過は生じないと考えられる。以下はこの立場で考察する。

黒曜石剥片類の内容を詳しくみると、大きさでは長軸 3cm 程度の小さな不定形剥片が多いようを感じる。最大でも 7cm 程度である。これらのこととは、黒曜石製の定型的な石器は、小型品である石鏃だけであることに符合する。一方で、定型的な石器の製作に関わるような、もう少し大型の剥片はほとんどみられない。さらに、調整剥離痕のある剥片（RF）・使用痕のある剥片（UF）は多い。黒曜石製の楔形石器の多さとも連動している感がある。剥片の形態は、縦長のものから横長のものまで、三角形・長方形から円形まで、大きさ・形・厚さのバリエーションが大きく規格性を見出しつき。

石核も一定量みられるが、こちらも大きなものから小さなものまで多様である。石核調整をおこない、ある程度規則的な剥片剥離をおこなったことを推察できるものもごく僅かにみられるが、多くは不規則的で無造作な剥片剥離をおこなった結果を示している。この傾向は、比較的大きな石核

に限っても同様で、もしも意図したならば、長さ5～7cm程度の縦長剥片を連続して剥離することができたであろうと推定できる、大きさも質も十分な原材を使いながらも、それでもやはり無造作に小さな剥片を剥離している。その様相は、相當にぞんざいな剥片剥離とさえ感じられるものである。しかし、その様相の実態は、剥片剥離に労力を割いて、丁寧な石核調整までして手間と原材を浪費するよりは、無造作に剥ぎ取った、大きさも形態も不揃いな不定形剥片を、簡単に加工しただけで(RF)、あるいは加工もしないままに(UF)、そのまま小型の刃器として、適材適所で使う方が結果的に効率的であった、ということを物語っているように感じさせられる。

ところで、このような剥片利用形態の成立を可能とした背景には、次に述べるような条件を想定することができる。

1. 大きく長い刃部を持つ石器が必要とされなかった。理由には、下記のようなことが考えられる。
  - A. 黒曜石製の石器では、大型動物の解体がおこなわれなかった。
  - B. 黒曜石製の定型的な石器や剥片以外で、これに代わる大型の刃器があった。
2. 黒曜石を豊富に安定して、しかも比較的簡単に入手できた。
3. 入手した黒曜石が、概ねどこを割っても均質な刃部が取れるような、原材として良質の黒曜石であった。

上記の1.については、現在、明確な答えを持たないが、2.と3.については、地理的な条件に基づいた石材環境の側面から肯定できる。隱岐という優良な黒曜石産地の存在と入手手段の確保を背景としながら、割り放しにした不定形な剥片の刃器を、あたかも使い捨ての刃器のように大量生産・大量消費しながら、日々の生業を営んでいた様子を思い描くことができるのである。しかしこれは同時に、そのような地理的な優位性を、自由に活用することを可能とした社会的な諸条件の整備が、実現されていたことを示している点で重要である。今後はその社会的な条件整備の実態解明が課題となる。

#### 4.まとめ

弥生時代の石器研究では、大陸系磨製石器が中心になることが多い。そのため、相対的に打製石器や剥片類への注目度は低くなる。しかし、弥生時代においても打製石器は盛んに製作され、使用され、人びとの生業となにより日々の生活を支える大切な役割を担っていた。大陸系磨製石器が、大枠としては、それが列島に初めてたらされた北部九州地域中核部を起点として、各地域への伝播とそれに伴う形態変容論の枠組みの中で捉えることができるのに対して、打製石器は地域の様々な状況に、より密接に結びついている。それは、地域に根ざして優れて個性的な側面を持ち、そこには、地域の特性がいっそう色濃く表れる。

西川津遺跡の弥生石器も、はじめに述べたように従来は山陰地域における大陸系磨製石器の典型として位置付けられてきたのであるが、今回の報告地区ではそのような華々しい磨製石器は出土していない。代わりに豊富な打製石器が出土しており、そこからはまさにこの地の石器文化の特色をうかがい知ることができたのである。

はじめに、大型粗製剥片刃器・小型粗製剥片刃器・不定形刃器・石庖丁様石器の4器種の非定型的な剥片石器類を取り上げ、各器種を定義した上で、大きさと石材から共通点と相違点を整理した。そして、石器組成における役割の違い、相互に補完できる点について指摘した。

つぎに、從来、菅玉製作のための技術として注目されてきた「施溝分割」技術について、石器製作の觀点から整理をおこない、施溝割離・施溝折断・施溝分割に作業内容を細分した上で、それらを総括して、施溝分離技術という技術体系を設定した。これをもとに、西川津遺跡では、小型粗製剥片刃器・不定形刃器・石庖丁様石器・板状石器素材について、施溝分離技術を軸とする石器製作上の構造=施溝分離石器製作技術体系（第65図）が存在する可能性を示した。

最後に、黒曜石製の剥片・チップ・調整剥離痕のある剥片（RF）・使用痕のある剥片（UF）に注目した。そして、これらが大量に出土している背景として、隠岐という優良な黒曜石産地を擁した西川津遺跡ならではの石器文化を見出した。それは、黒曜石製剥片をそのまま刃器として利用し、これを大量生産・大量消費することで、適材適所の剥片利用をおこない、生業と生活を営むような石器使用形態である。

上述のように、今回の再整理事業では、西川津遺跡の石器文化について複数の新たな所見を得ることができた。しかし、根拠事例の蓄積はまだ十分とはいえない。現時点では作業仮説ともいえる段階である。今後は、周辺遺跡の状況を参照するとともに、継続実施される再整理事業の成果によってさらなる事例が蓄積され、西川津遺跡の石器文化について、より克明な実態解明がおこなわれてゆくことを期待する。

（村田裕一 山口大学人文学部）

#### 【註】

- (1) これらの大部分は、斎野裕彦氏が設定した大型直線刃石器に含まれる。斎野氏が大型直線刃石器を設定した意図および学術的な意義は認めつつも、そこに包括される石器の内容があまりに広範である点は、器種分類としては必ずしも有効とはなり得ない場合もあるため、本稿では、細分器種を設定した。また、愛知県周辺の粗製剥片石器とは近接する。
- (2) 斎野裕彦氏、原田幹氏によって精力的に進められた使用痕研究の成果である（斎野 1993・1994、原田 2017など）。
- (3) 破損品など却下された石器について、刃部などの機能部位をそのまま、あるいは一部を引き継いで利用して新たな石器を作るように再利用形態を転用と規定する。一方、機能部位を作り替えるなどして、却下された石器の機能部位を引き継がずに新たな石器を作るように再利用形態を再製作と規定する。なお、転用か再製作か判別が難しい場合は、一括して再利用と表記する。
- (4) 大賀克彦氏は、西川津遺跡において「菅玉生産と他の石器生産が未分化である点」を既に指摘している。また布田遺跡でも、「同様な状況が確認される」としている。さらに「すなわち山陰においては、半島系磨製石器の本格的な導入と菅玉生産の開始が軌を一にする現象であり、かつ両者は施溝分割を多用し、板状品を介在させる製作技法の共有によって、有機的に結びついているのである。」という極めて重要な指摘をおこなっている（大賀 2002、pp.117-118）。しかし本稿では、共有されている石器製作技術の内容の捉え方と、その技術の適用範囲の捉え方が、大賀氏とは異なっている。また、現時点では、大陸系磨製石器との関わりは精緻には評価しない。
- (5) ここに列記している西川津遺跡出土石器の観察によって得られた所見に基づいて、施溝分離石器製作技術体系を見出し、構造概念図（第65図）を作成した。けれども、ここにあげた10点の石器だけでは、体系を見出すには不十分であることは否めない。そのため、立地および遺跡の時期と規模が近接している布田遺跡（鳥根県教育委員会1991）の石器を参考し、補強をおこなった。このときに参考した石器が、表9に収録している布田遺跡の7点の石器である。

#### 【参考文献】

- 斎野裕彦 1993 「弥生時代の大型直線刃石器」（上）『弥生文化博物館研究報告』第2集 大阪府立弥生文化博物館  
 斎野裕彦 1994 「弥生時代の大型直線刃石器」（下）『弥生文化博物館研究報告』第3集 大阪府立弥生文化博物館  
 鳥根県教育委員会 1982 『朝酰川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅱ』  
 鳥根県教育委員会 1991 『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』（布田遺跡）  
 下條信行 1989 『鳥根県西川津遺跡からみた弥生時代の山陰地方と北部九州』『朝酰川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書V（海崎地区3）』鳥根県教育委員会  
 寺村光晴 1990 「タマの道ータマからみた弥生時代の日本海」（網野善彦ほか編）『日本海と北国文化海と列島文化』第1巻 小学館  
 原田幹 2017 「東アジアにおける石製農具の使用痕研究」六一書房  
 米田克彦 2014 「弥生時代における玉づくりの展開」（小松市埋蔵文化財センター『フォーラム』、日本海を行き交う弥生の宝石在小松』）小松市・小松市教育委員会  
 <米田克彦 2014からの引用部分に含まれる参考文献>  
 大賀克彦 2002 「日本列島における菅玉生産の成立」『瀬谷』（『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書VI』）  
 下條信行 1987 「東アジアにおける擦切技術について—弥生時代擦切石器の系譜—」『東アジアの考古と歴史』上（『岡崎敬先生退官記念論集』）岡崎敬先生退官記念事業会 同朋舎

## 第5節 結語

西川津遺跡は、これまで 1980（昭和 55）年から 2011（平成 23）年にかけて、数次にわたり島根県教育委員会や松江市教育委員会により発掘調査が行われ、山陰地方を代表する弥生時代の大規模な拠点集落として知られている。

しかしながら、調査箇所の大部分は朝酌川の河道かその氾濫原にあり、集落本体の構造や実態は、鶴場地区や海崎地区の一部を除いて未だ不明な状態にある。そうした中、調査初年度である宮尾坪内地区の昭和 55・56 年度調査分について、コンテナ 169 箱分の遺物の再整理作業を着手するに至った。最後に、今回の再整理の主な成果や今後の課題をまとめ、本書の結語としたい。

### 1. 西川津遺跡（昭和 55・56 年度調査）の「再整理」の成果

#### （1）縄文土器からみた西川津遺跡の動態

縄文土器は縄文時代早期中葉から晩期末にかけて各時期のものが出土しており、縄文時代を通じた集落の継続性をうかがうことができる。ただし、時期によって出土量に顕著な差があり、特に前期前葉（西川津式）と晩期後葉に大きなピークがあることが明らかとなった。

一方で前期後葉から後期前葉にかけては出土量が相対的に低調で、これには気候の冷涼化に伴う地勢環境の変動が影響している可能性を指摘することができた。

#### （2）弥生土器からみた西川津遺跡の動態

弥生土器は西川津遺跡の全時代を通じた出土土器類のうち 9 割以上を占める。その膨大な出土量の推移から、当該調査区においては前期後半に出土量のピークがあり、中期後葉に著しく減少することが明らかとなった。これらの成果と鶴場地区や同時期の拠点集落である布田遺跡の統計データの比較から、現時点での予察的な見通しではあるが、西川津遺跡の拠点集落としての画期は①拠点集落の成立（前期前半）、②拠点集落の盛行（前期後半）、③拠点集落の衰退（中期後葉）、④拠点集落の解体（後期）という変遷を素描することができる。

また今回明らかとなった出土遺物に関しては、海崎地区や鶴場地区と同様に、前期から中期にかけて関門地域の影響を受けた土器（綾羅木系土器）や半島系の土器（無文土器系土器）が確認できた。その他に両地区との共通性を示す出土品としては、緑色凝灰岩製の管玉製作関連資料や豊富な木製農耕具類及び未成品、鳥形木製品、磨製石剣などがある。一方で、交易・生産拠点であることを示す遺物（搬入土器、漆塗土器、鋳造鉄斧、骨角器、多量の大陸系磨製石器や大型蛤刃石斧未成品等）や祭祀の場であることを示す遺物（土笛、分銅形土製品、人面付土器、青銅器等）、首長の存在が想定されるような遺物（玉類、貝輪、威儀具等）は確認できていない（ただし、土笛は 1994・1995 年度の II・III 区の調査で出土例がある）。

拠点集落としての西川津遺跡を評価した田中義昭は、弥生時代の遺構と遺物は海崎地区とその南方の宮尾坪内地区一帯で検出されていることから、両地区を個別の集落として捉えている。そのうえで両地区的集落の関連について、朝酌川の流れをいわば共有するかのような占地をとる集落群が孤立分散状態にあったとは考えられないとして、地形復元と遺物の内容から海崎地区を核（生産・交易・祭祀）として朝酌川の流れに沿って數珠状に並ぶ集落群を想定している<sup>(1)</sup>（田中 1996・2011）。

今回の成果を積極的に考慮するならば、いわば西川津遺跡は海崎地区や鶴場地区を中心とした集落と

し、宮尾坪内地区はその衛星的な近接集落として機能していたことを裏付けるような結果になったといえ、まさに拠点集落を構成する単位集団としての様相の一端を反映していることが示唆されよう（第66図）。

### （3）古墳時代以降の動態

西川津遺跡では弥生時代中期後葉以降、土器の出土量が減少の一途をたどる。特に後期後葉に至っては確実にこの時期に比定される土器が確認できなくなるが、後期末～古墳時代初頭には若干の回復傾向がある（230 g）。以後は各時期において300 gを超えない出土量で推移しており、今回のデータからは調査区周辺域での活発な生産活動をうかがうことはできない。

### （4）土器の種実圧痕の成果

土器のレプリカ法による種実圧痕の調査において、縄文時代晩期後葉の土器片からイネ糲を確認した。これにより、西川津遺跡においては晩期後葉（突帯文土器）にイネが存在することが確実となった。

また、土器のイネ糲圧痕は弥生時代前期から中期前葉にかけて確認することができ、この間、イネが確実に存在したこと示すものといえる。収穫用石器類の様相との関わりも含め、弥生時代の生業を検討する上で貴重な事例となった。

### （5）石器について

今回確認できた石器の特徴として、典型的な大陸系磨製石器は極めて少ない反面、豊富な打製石器が認められ、①非定型的な剥片石器類が多いこと、②「施溝分割」の技術が石器製作に用いられていること、③黒曜石製の調整剥離痕のある剥片（RF）・使用痕のある剥片（UF）が大量に出土していること、があげられる。特に①②については、從来、菅玉製作に関連する技術と位置付けられてきた「施溝分割」が、他の複数器種の剥片石器製作にも用いられることを明らかにし、西川津遺跡の石器製作に施溝分離技術が体系的に組み込まれている可能性を指摘できたのは大きな成果といえる。③については、石鎚以外の黒曜石製の定型的な石器が少ないことも含め、このような不規則な小型剥片石器の利用形態を検討する上で貴重な資料といえる。

以上のように、これらの資料は出雲東部地域における弥生時代石器の様相を端的に示す石器群として捉えることが可能といえ、今後は他地区的出土石器の様相とも比較し、



第66図 西川津遺跡の立地復元図  
(島根県 2017 を引用、一部改変)

さらに検証を進める必要がある。

## 2. 今後の課題と活用に向けて

以上のように、今回の再整理作業では、掲載・非掲載遺物の分類と定量的なデータ化に取り組み、調査区内における時期的な遺物出土量の推移や出土石器の様相を示すことができた。

しかしながら、この成果が西川津遺跡における集落の盛衰をどこまで正確に反映しているかについては、慎重にならざるを得ない。即ち、この調査区は朝釣川の氾濫原にあり、遺構が検出されていないことに加え、遺跡に埋蔵された遺物が一つ、どこから、どうやってもたらされたのか、その形成過程が全くの不明瞭であることは改めて指摘されるまでもないといえる。

西川津遺跡では、遺物出土量がコンテナ数1,000箱を超える海崎地区をはじめ、數次にわたり調査が行われた他地区（II～VI区）や同じ朝釣川遺跡群を形成するタテヨウ遺跡や前の前遺跡が存在する。今後はこれらの遺跡出土品の再整理にも継続的に取り組み、今回示した成果の妥当性をクロスチェックで確認し、未だ不明な点の多い西川津遺跡の拠点集落としての具体像や地域性を明らかにする必要があるだろう。特に弥生時代中期後葉の集落衰退現象は布田遺跡と共通する注目すべき画期といえ、出雲平野の拠点集落である矢野遺跡や松江市北部の講武地区の様相や、山陰の弥生文化を特徴づける他の要素（青銅器、玉生産、高地性集落、墓制等）の展開とも比較検証し、今後の山陰地域における弥生時代研究の枠組みの中で別途検討すべき課題といえる。

また、今回の再整理では全ての出土資料のデータベース化に重点を置いたため、特に土器類については、時間的な制約もあり個別資料を対象に詳細な検討を進めることができなかった。そういう意味では、西川津遺跡出土品の特色を網羅的に示すに至っておらず、今後は今回の基礎的データを元に出土品の属性について新たに検討を加え、その具体的な様相を明らかにすることも求められる。この他、石器の帰属時期についても石器自体の型式から検証していく必要があり、今後の課題といえる。

さて、今回の再整理の最終的な目的は、調査の成果の公開・活用を図ることにあるのは言うまでもない。今回の成果については、本報告書で基礎的データを公開するとともに、今後の地域研究の場や展覧会の開催等で積極的に活用したいと考えている。

残された課題も多いが、このような作業を積み重ねることで、出土品の再評価や価値付けが行われることとなり、将来的な文化財指定も視野に入ってくるものと思われる。そのためにも、今後も朝釣川遺跡群の再整理を進め、基礎的データを蓄積し、地域の歴史像の解明や出土品の新たな保存管理及び公開・活用に努めていきたい。

（深田 浩）

### 【註】

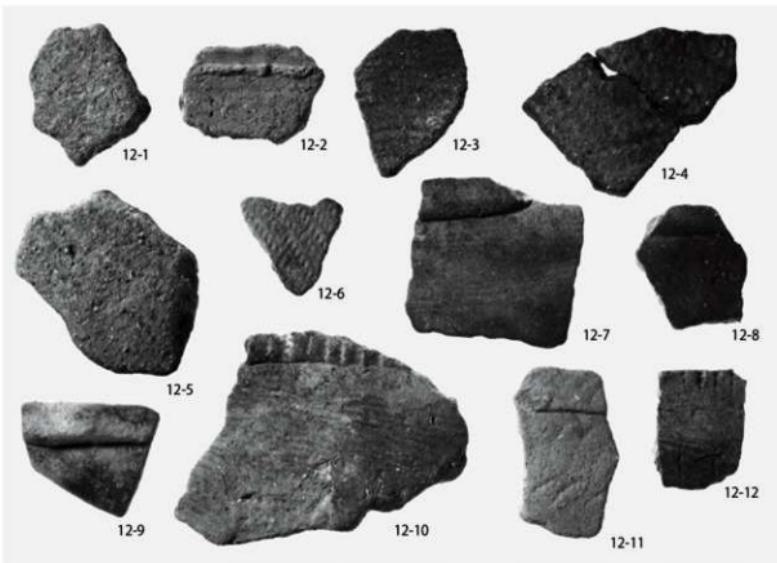
- (1) 田中によれば、弥生時代の拠点集落を特徴づける要素として、(a) 複数の集落単位を内包すること、(b) 集落に一定期間の継続性が認められること、(c) 農耕具や金属器などの生産用具を製作した手工業的生産の場であること、(d) 農耕祭祀の場であること、(e) 首長とみられる人物の存在が想定できること、の5点を挙げ、海崎地区はすべての要件が満たされていると評価する(田中 2011)。また田中は、宮尾坪内地帯の集落は、朝釣川左岸の奥部で西にU字状に開く山丘の裾部から縁辺にかけて営まれたことを想定している(田中 2011)。

### 【参考文献】

- 島根県教育委員会 2017 『意宇平野の集落遺跡』島根県古代文化センター調査研究報告書 53
- 田中義昭 1996 「弥生時代拠点集落としての西川津遺跡」『山陰地域研究』No.12 島根大学汽水域研究センター
- 田中義昭 2011 『弥生時代集落址の研究』新泉社

# 写真図版



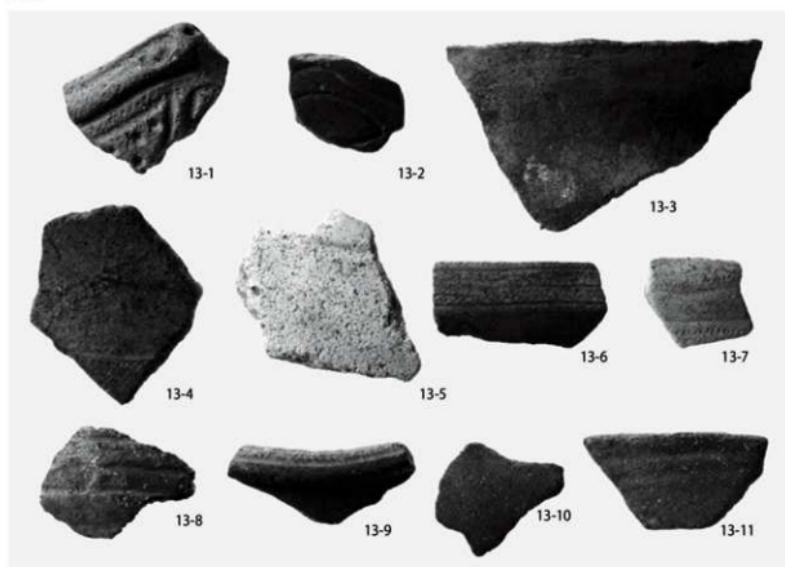


1. 昭和 55・56 年度調査出土縄文土器 (1)

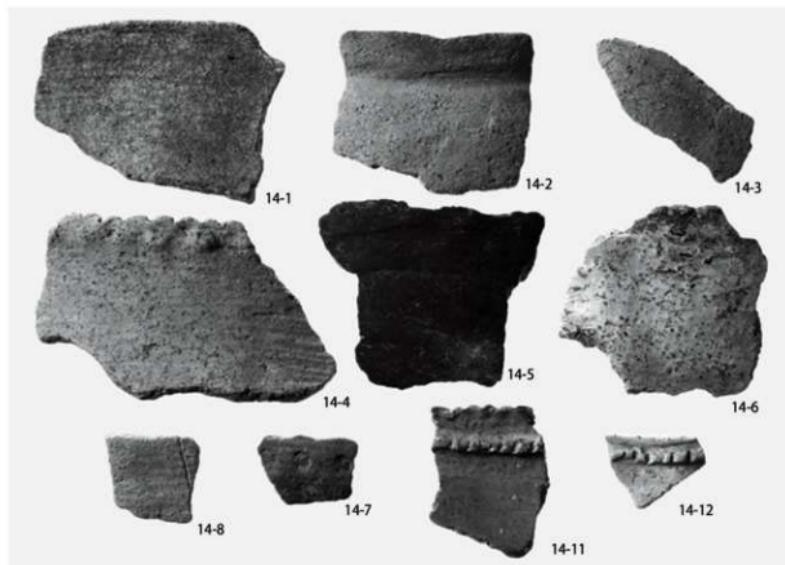


2. 昭和 55・56 年度調査出土縄文土器 (2)

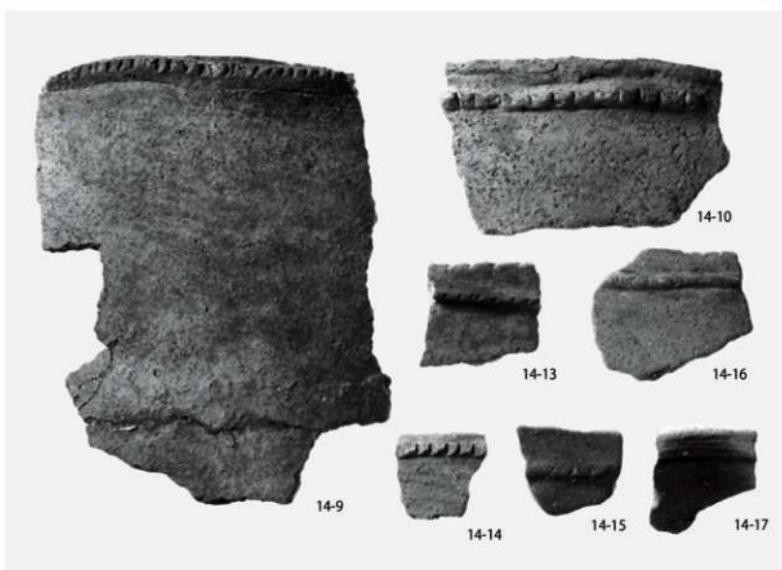
図版 2



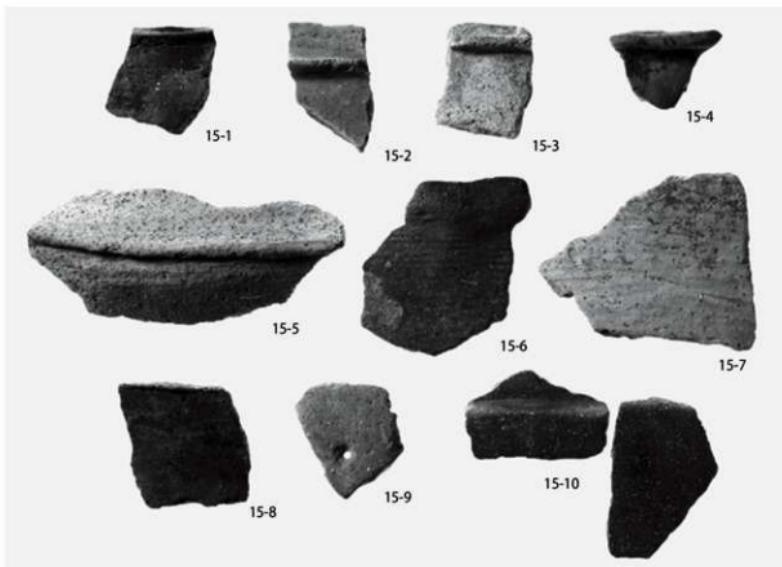
1. 昭和 55・56 年度調査出土縄文土器 (3)



2. 昭和 55・56 年度調査出土縄文土器 (4)

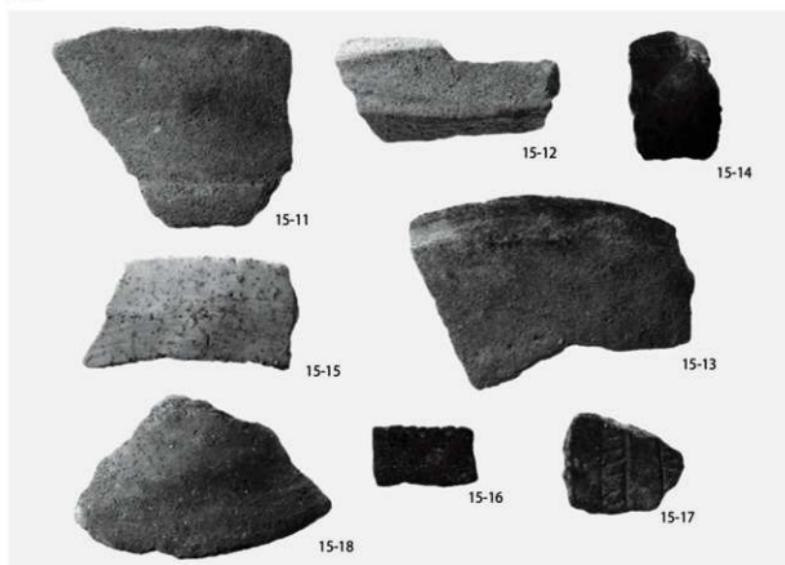


1. 昭和 55・56 年度調査出土縄文土器 (5)

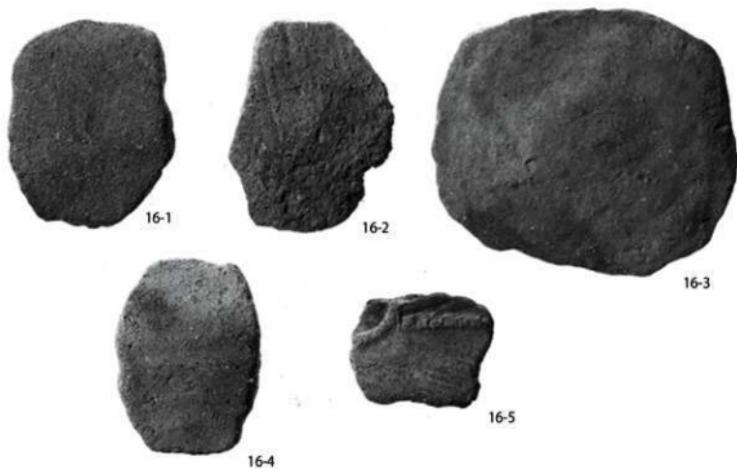


2. 昭和 55・56 年度調査出土縄文土器 (6)

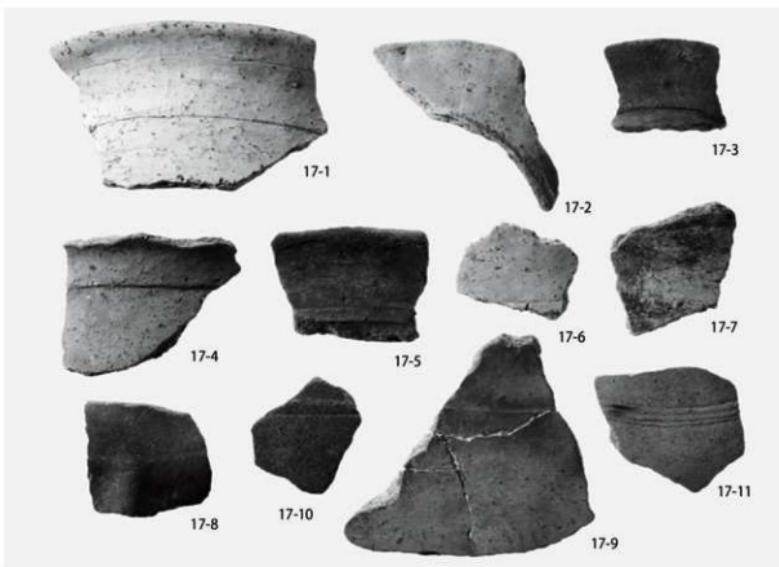
図版 4



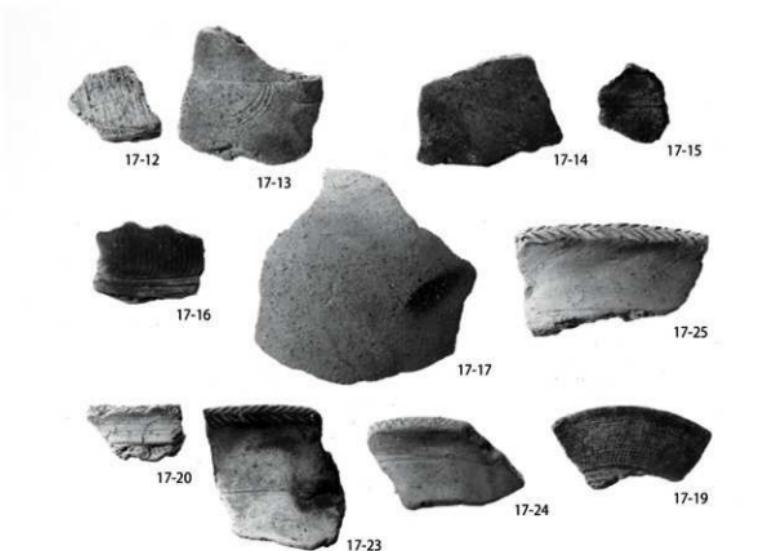
1. 昭和 55・56 年度調査出土縄文土器 (7)



2. 昭和 55・56 年度調査出土縄文土器 (8)



1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (1)



2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (2)

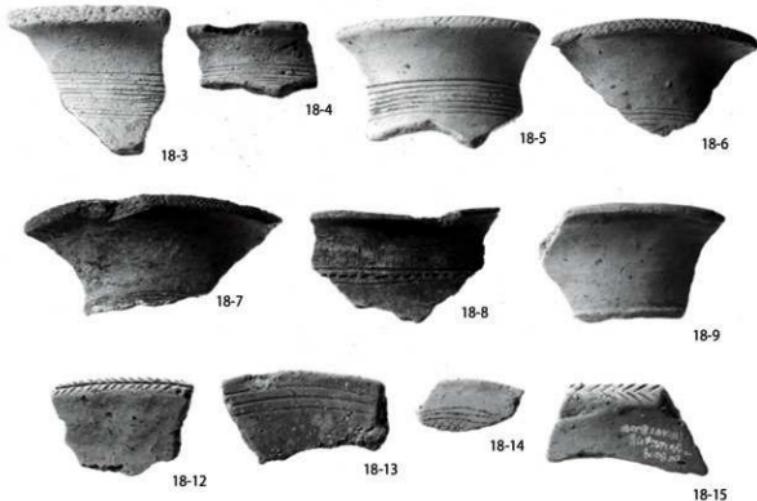
図版 6



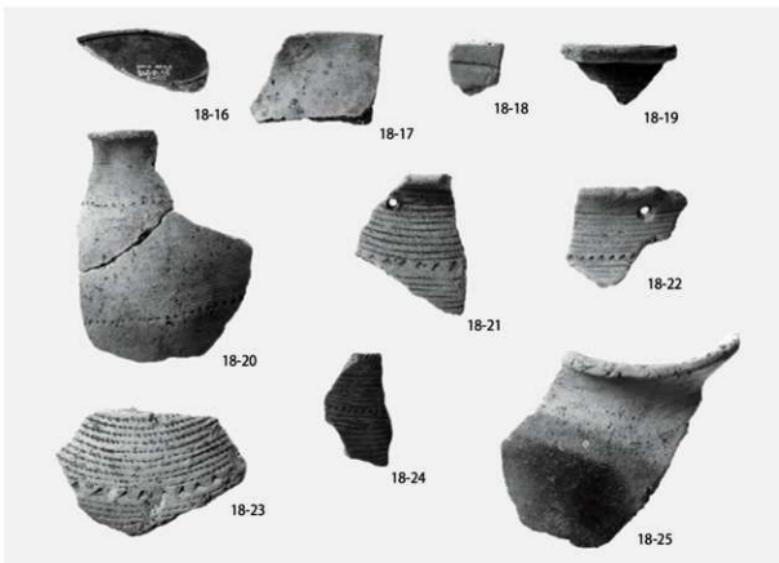
1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (3)



2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (4)



1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (5)



2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (6)

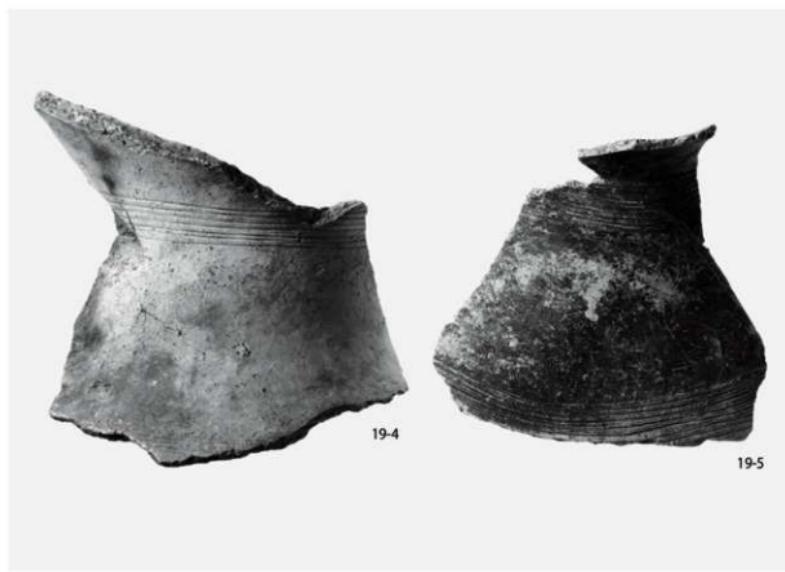
図版 8



18-26

19-3

1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (7)



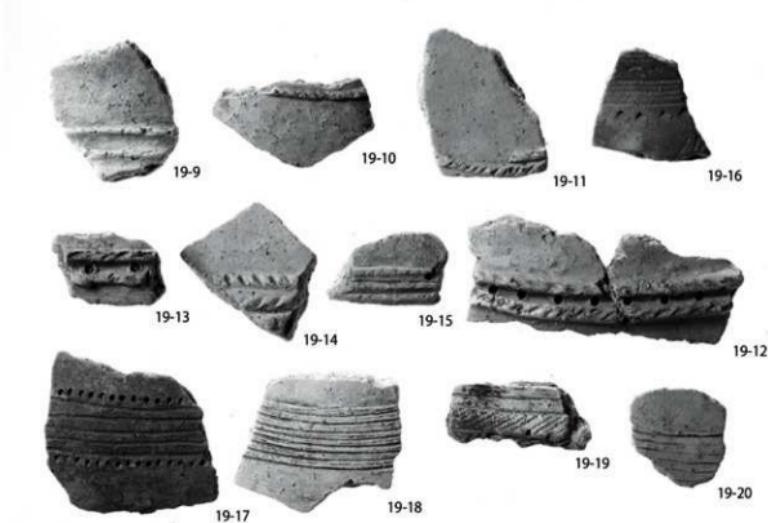
19-4

19-5

2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (8)

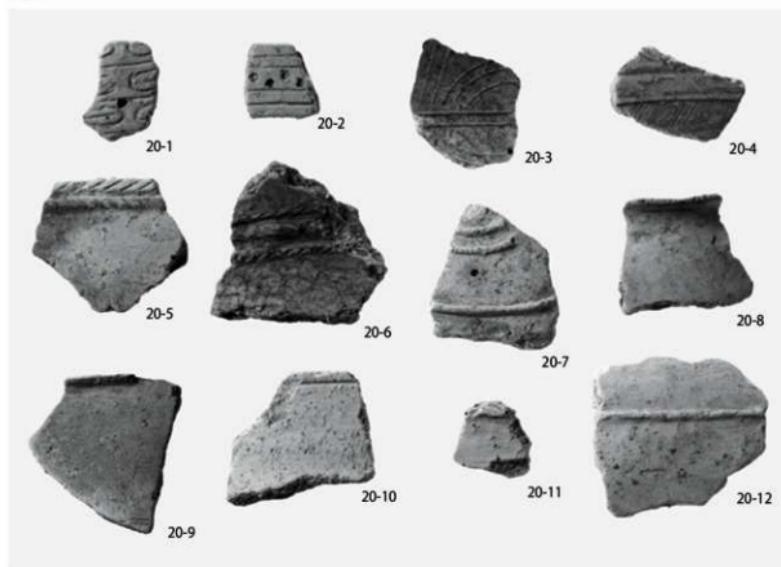


1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (9)

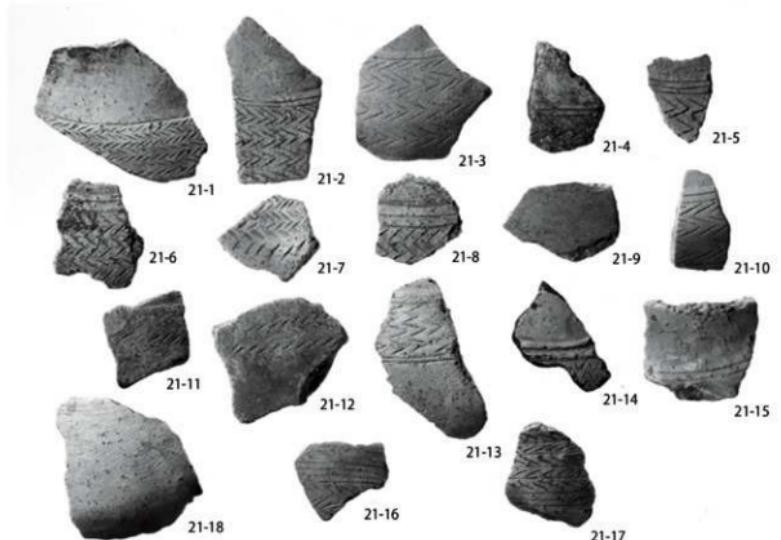


2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (10)

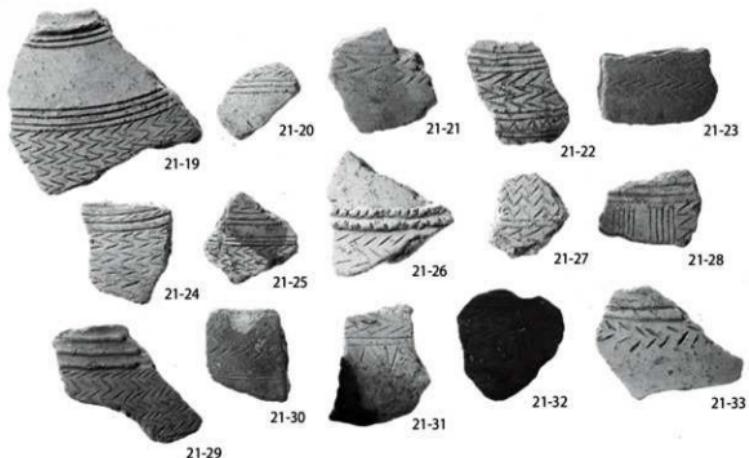
図版 10



1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (11)



2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (12)



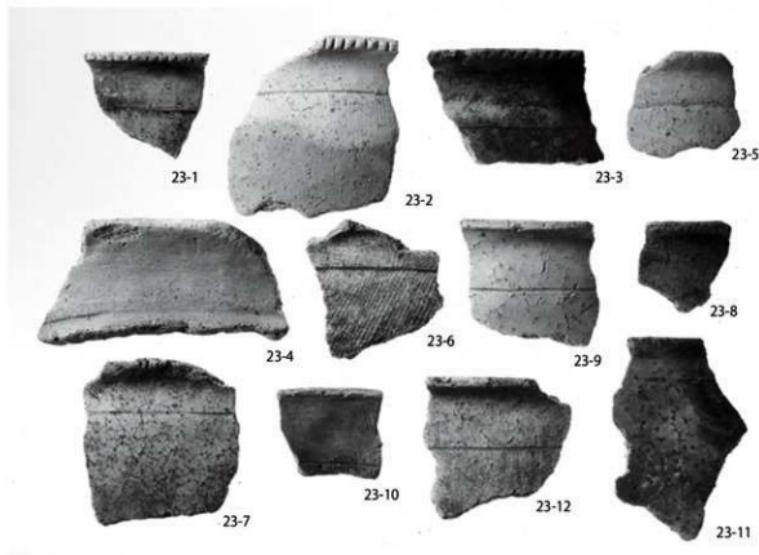
1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (13)



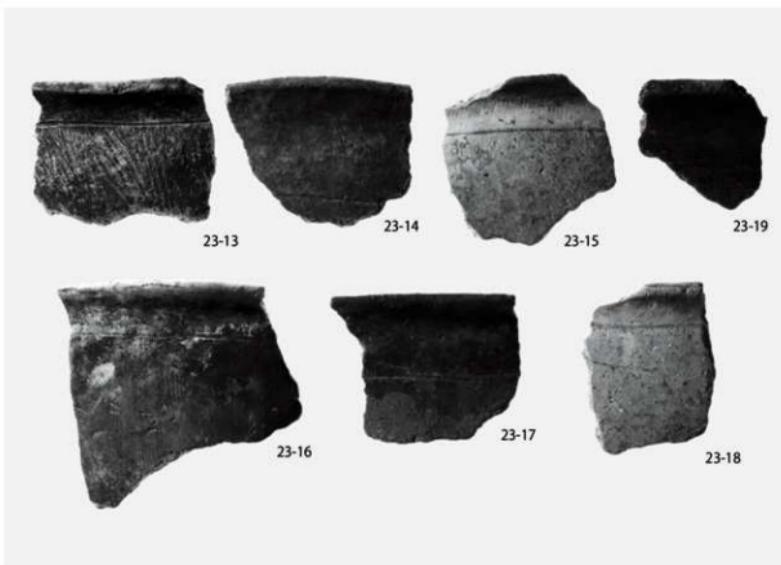
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (14)



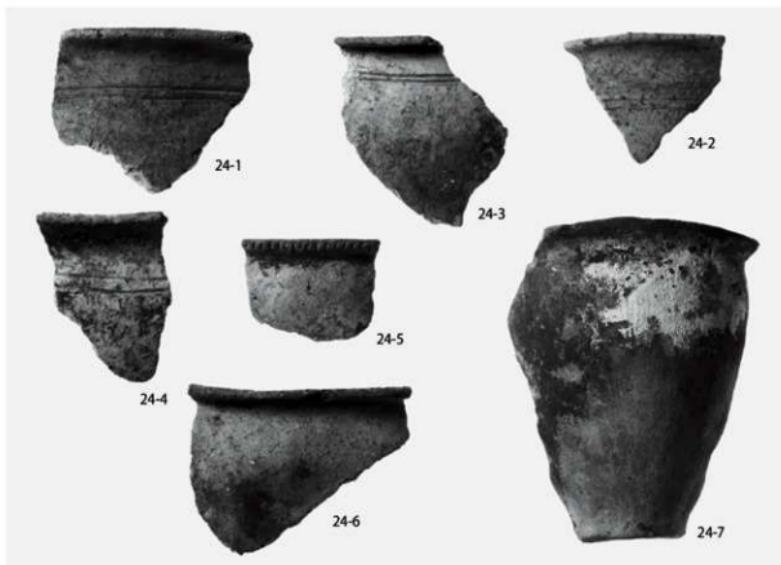
1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (15)



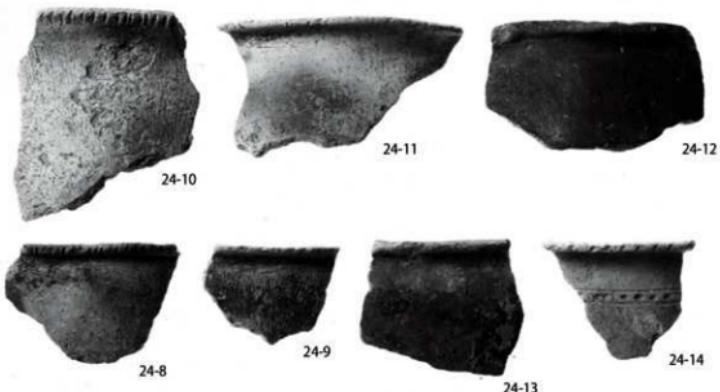
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (16)



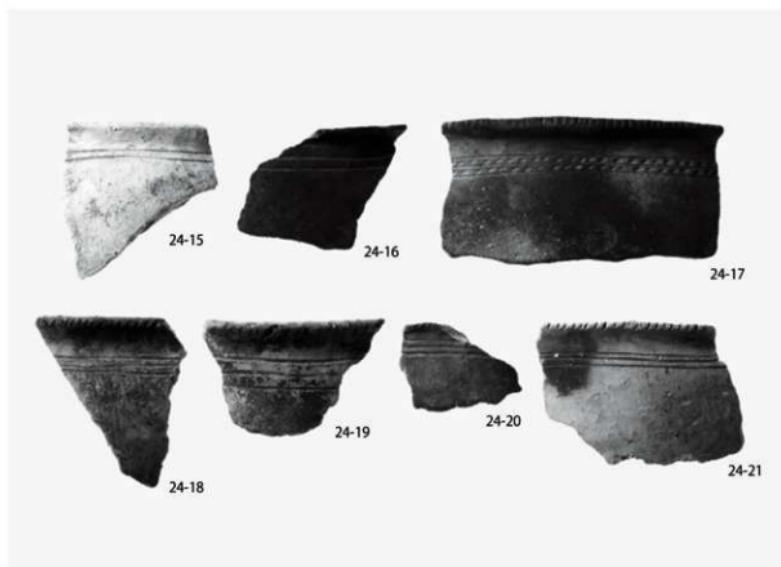
1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (17)



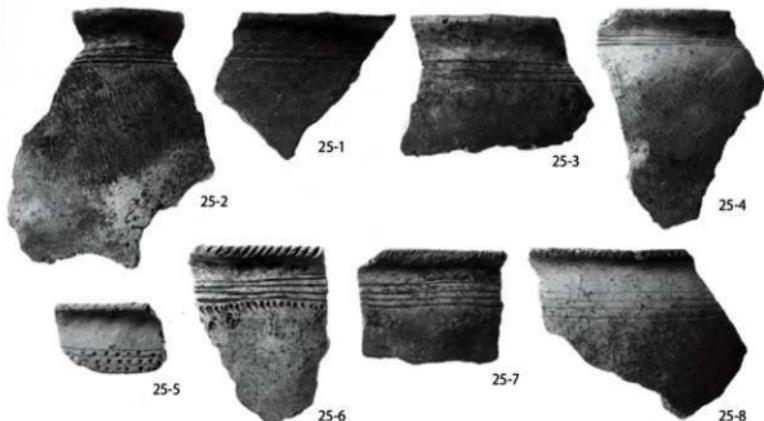
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (18)



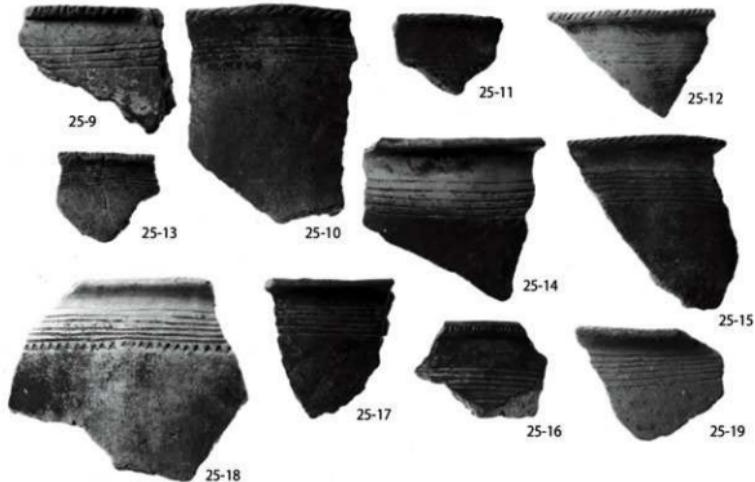
1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (19)



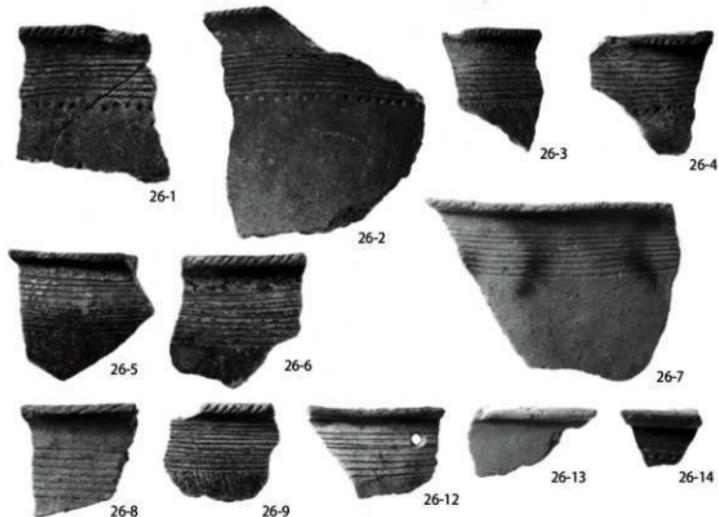
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (20)



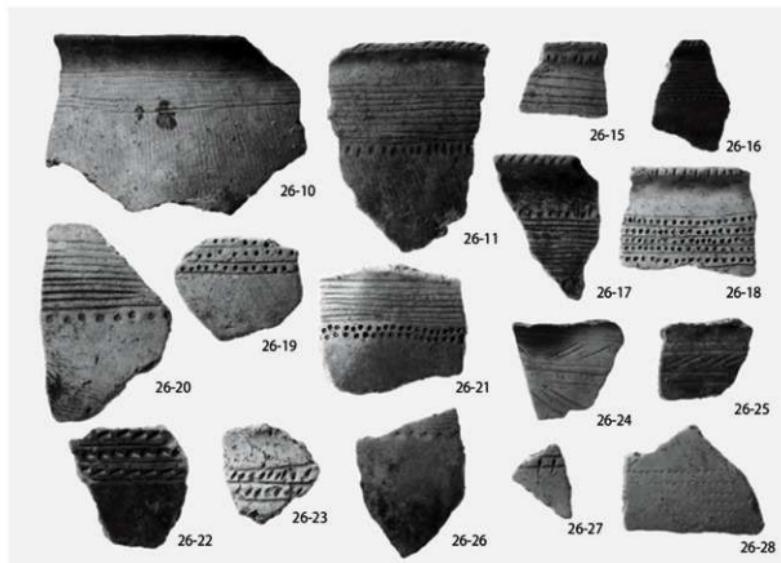
1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (21)



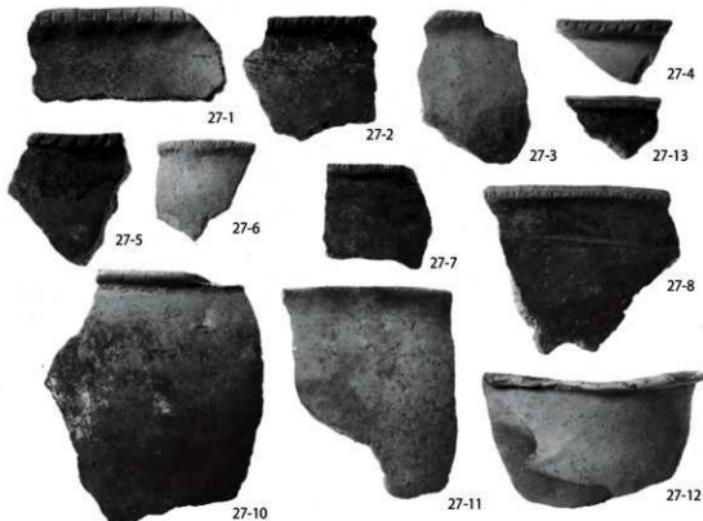
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (22)



1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (23)



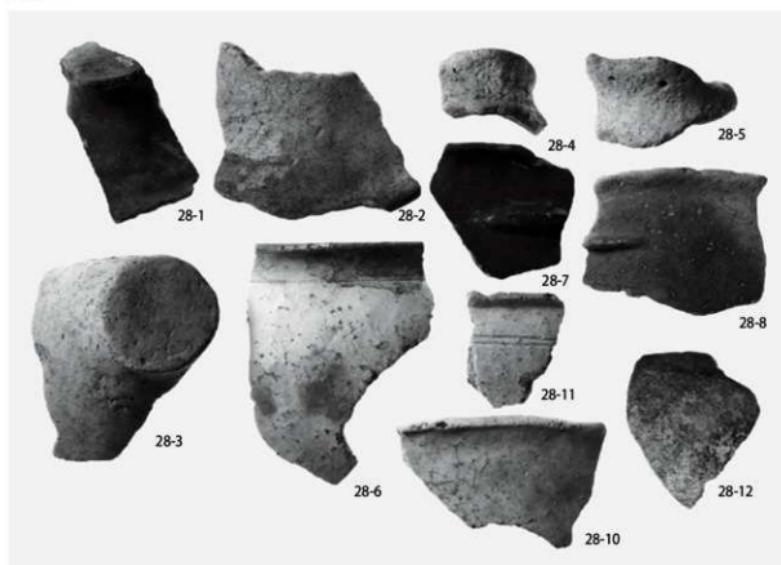
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (24)



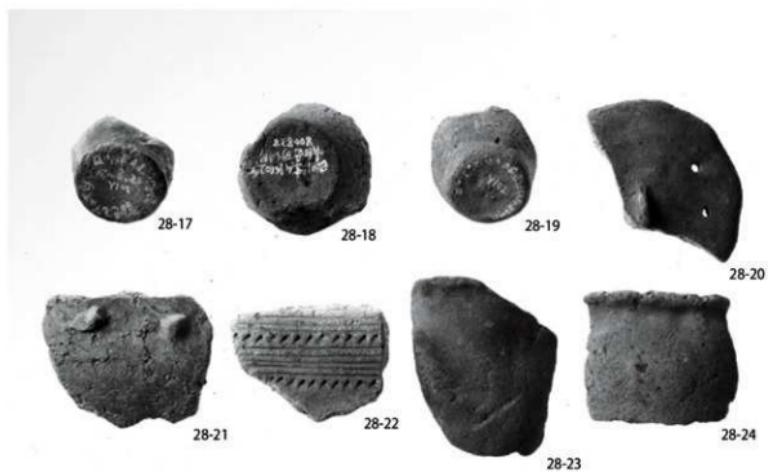
1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (25)



2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (26)



1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (27)



2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (28)



1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (29)



2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (30)



29-15

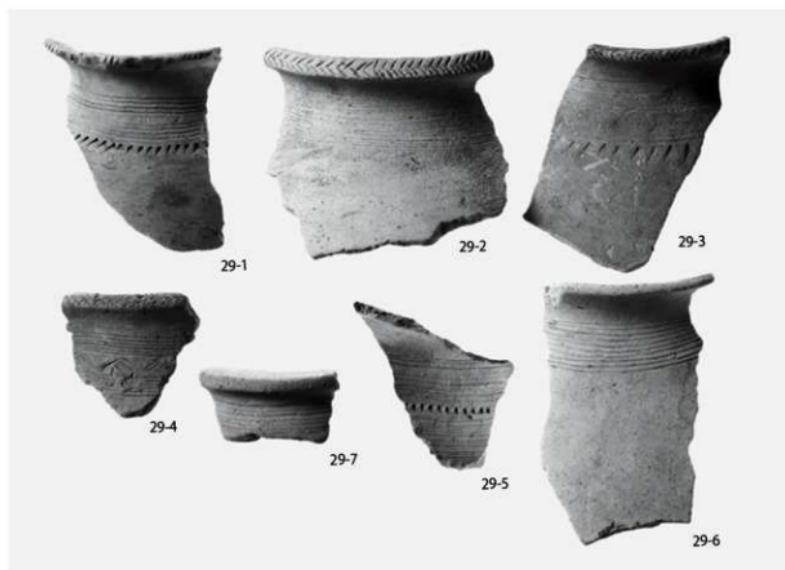


30-18



30-14

1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (31)



29-1

29-2

29-3

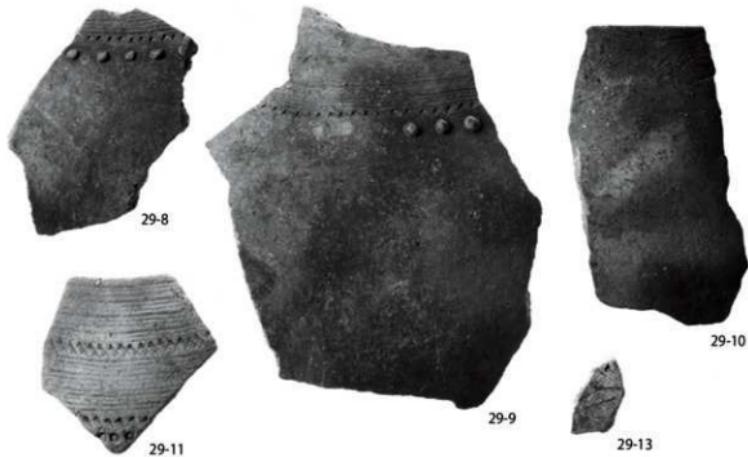
29-4

29-7

29-5

29-6

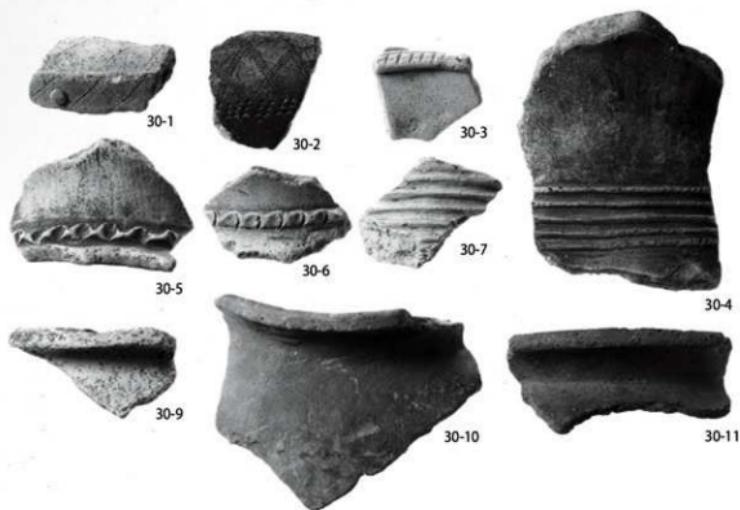
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (32)



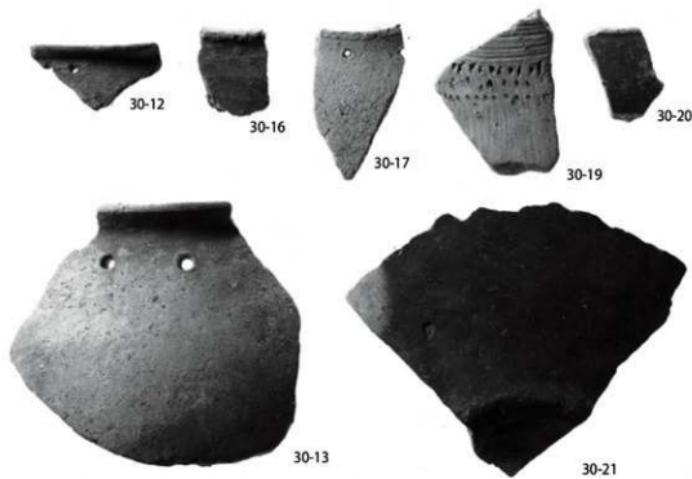
1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (33)



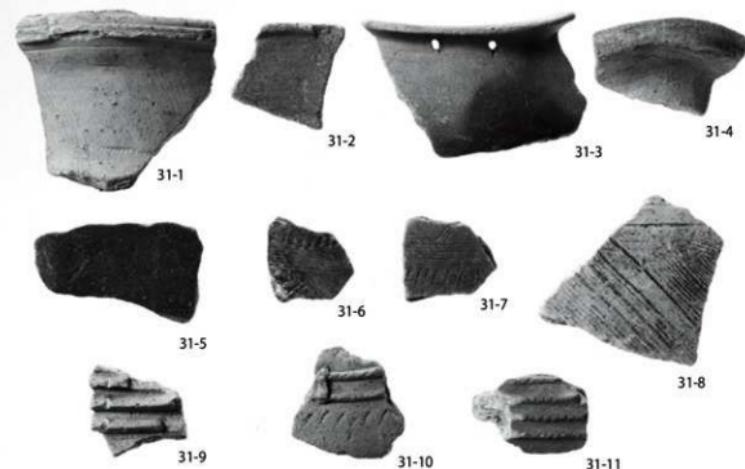
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (34)



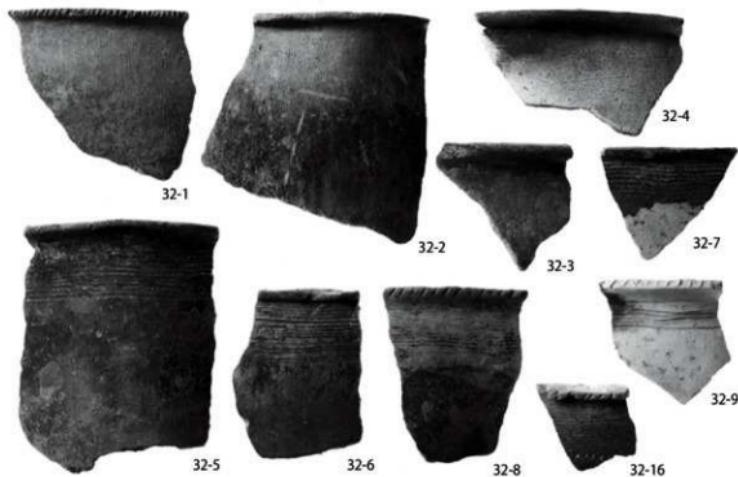
1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (35)



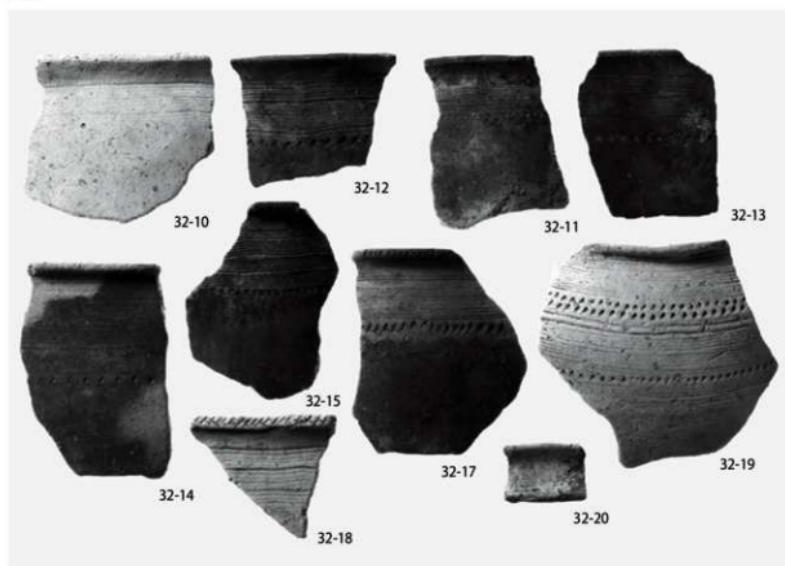
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (36)



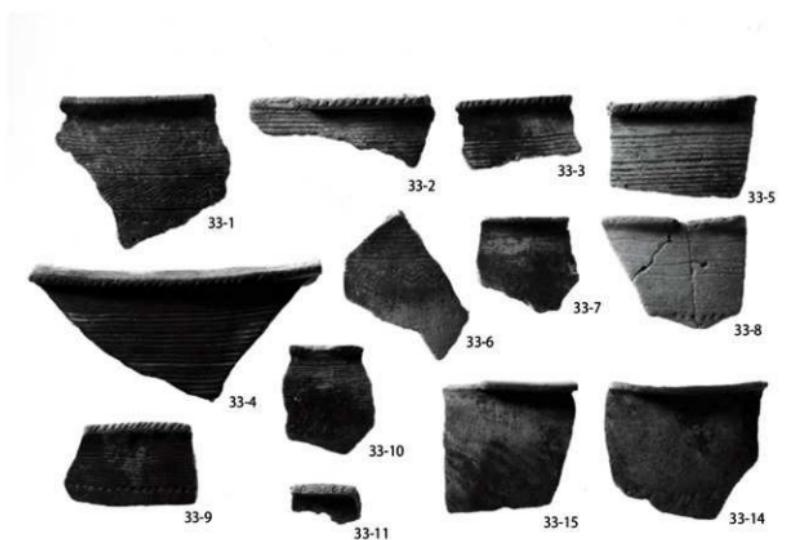
1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (37)



2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (38)



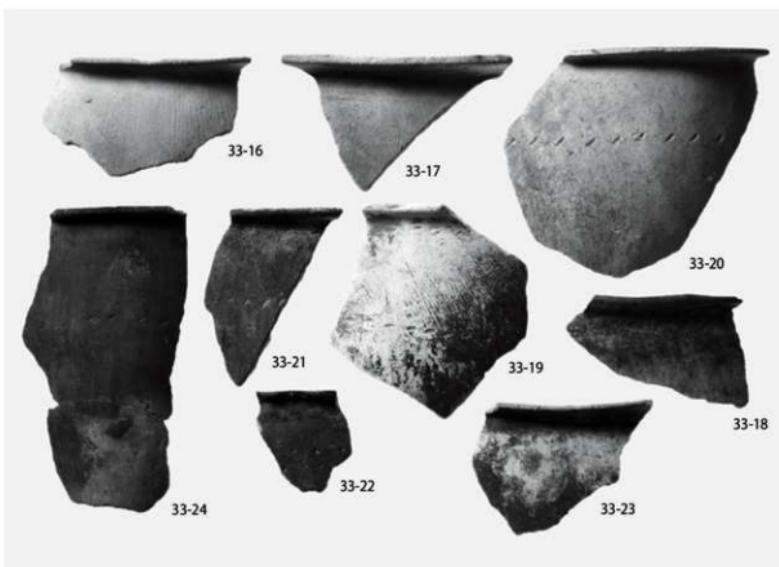
1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (39)



2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (40)

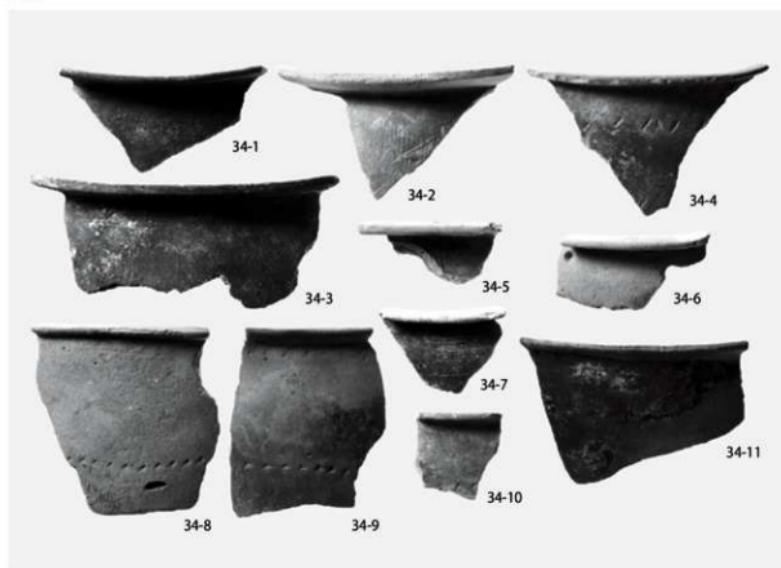


1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (41)

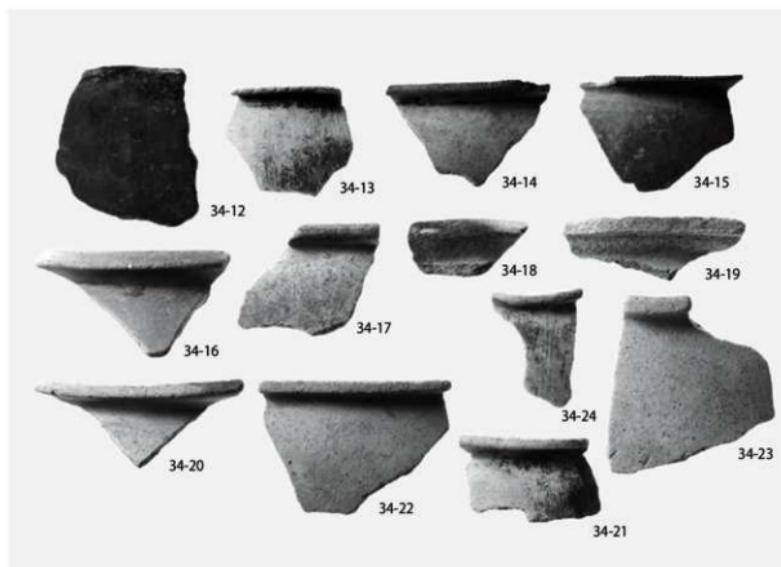


2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (42)

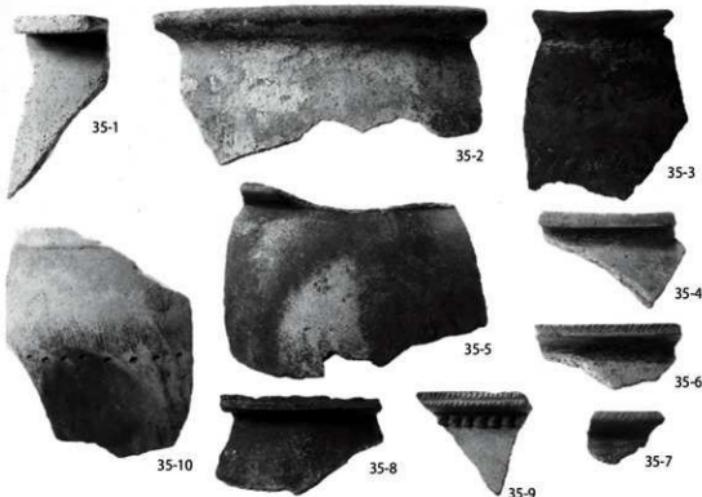
図版 26



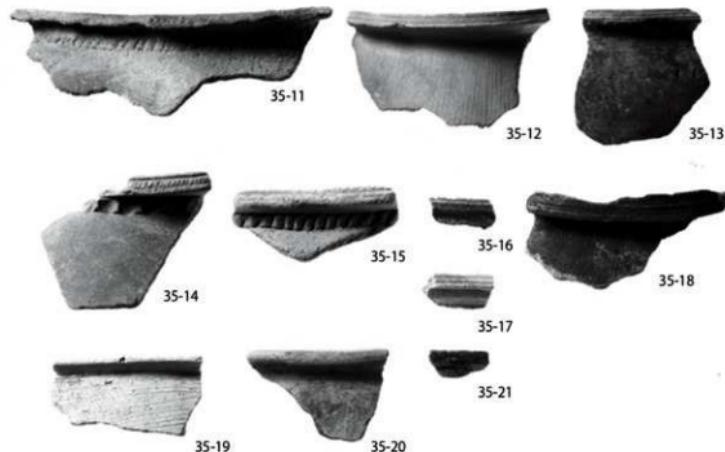
1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (43)



2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (44)

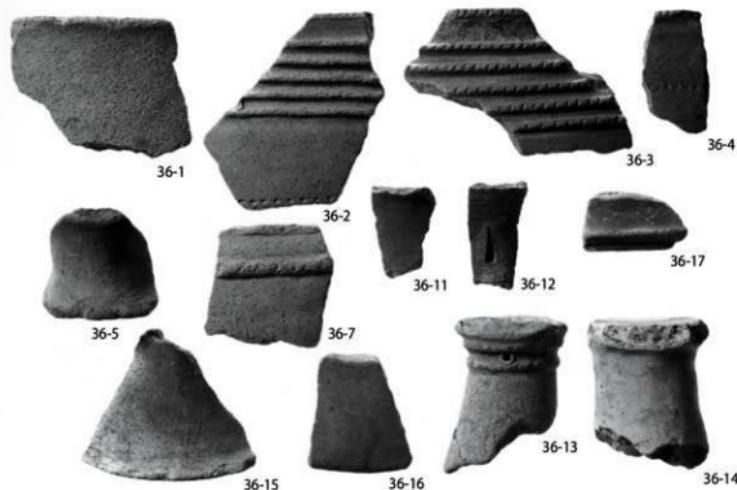


1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (45)

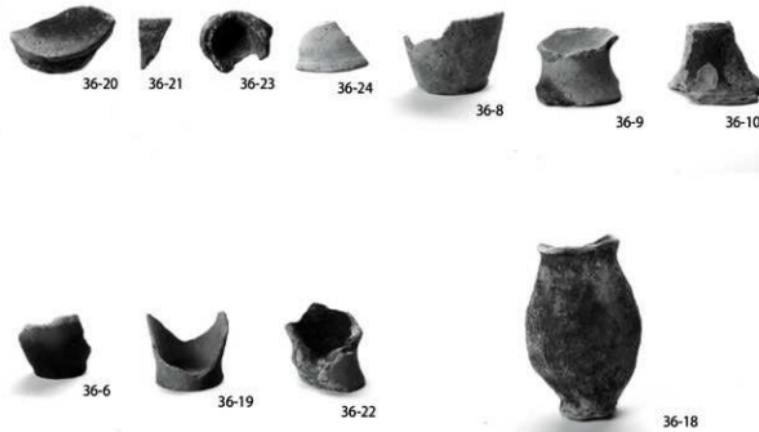


2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (46)

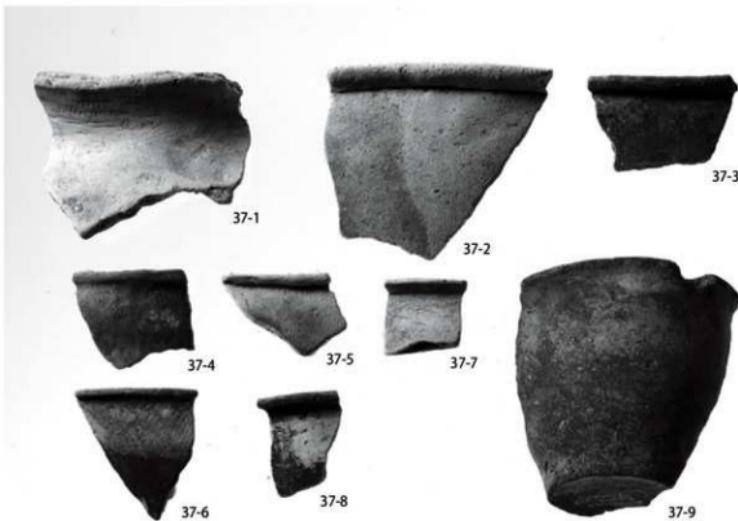
図版 28



1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (47)



2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (48)



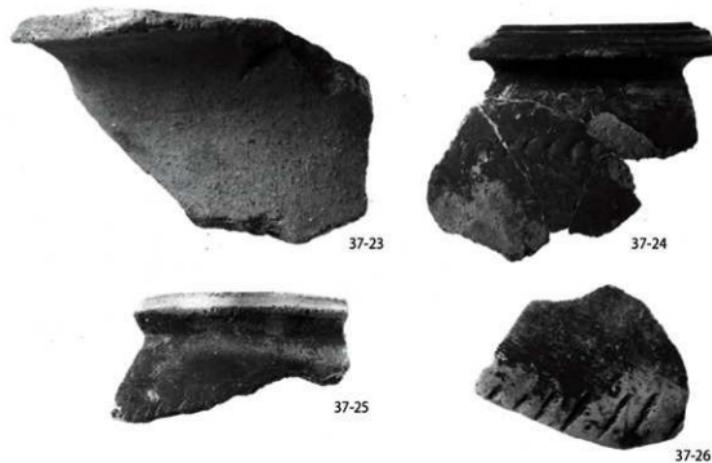
1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (49)



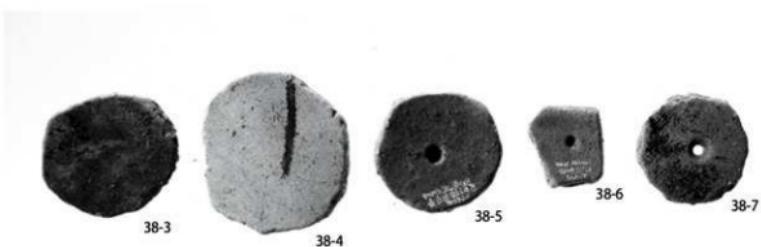
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (50)



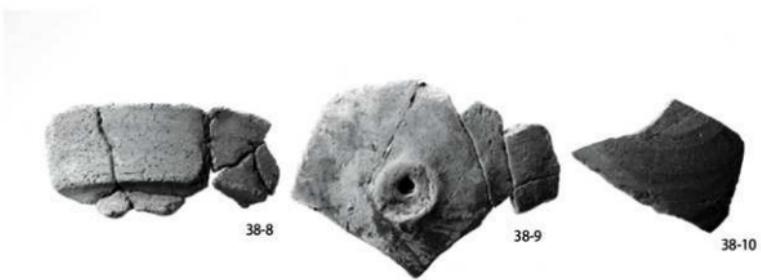
1. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (51)



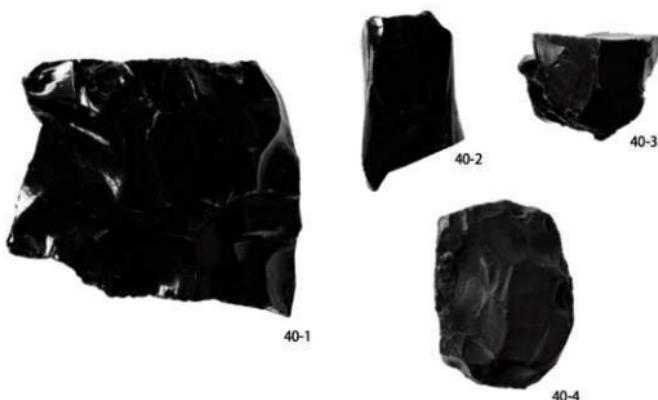
2. 昭和 55・56 年度調査出土弥生土器 (52)



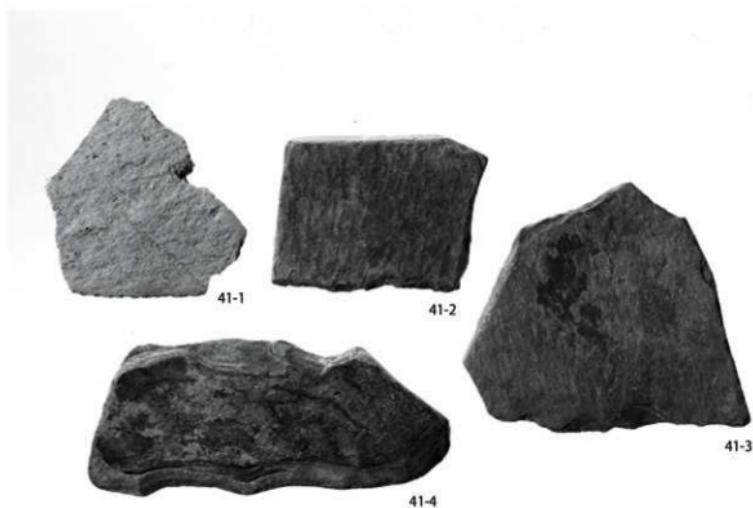
1. 昭和 55・56 年度調査出土遺物 (1)



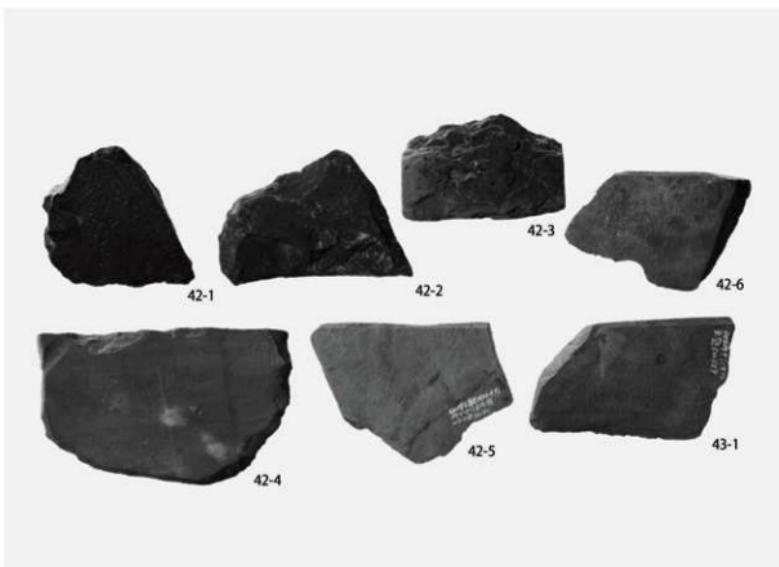
2. 昭和 55・56 年度調査出土遺物 (2)



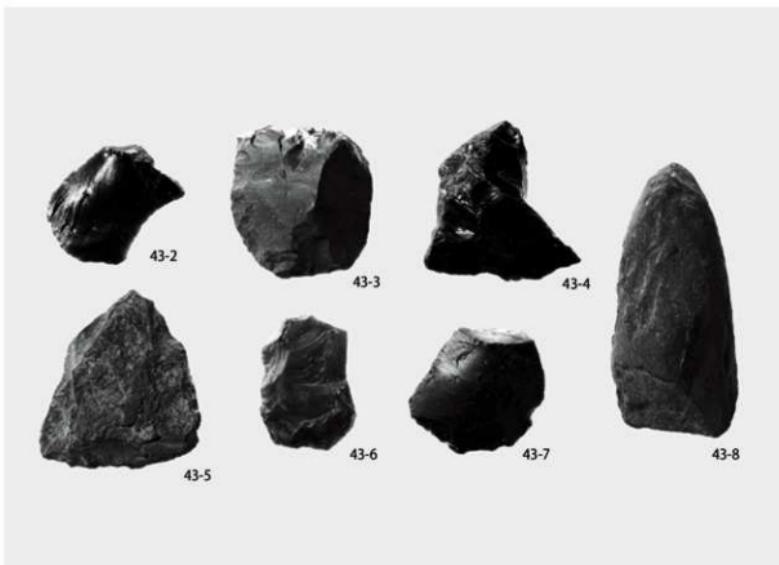
1. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (1)



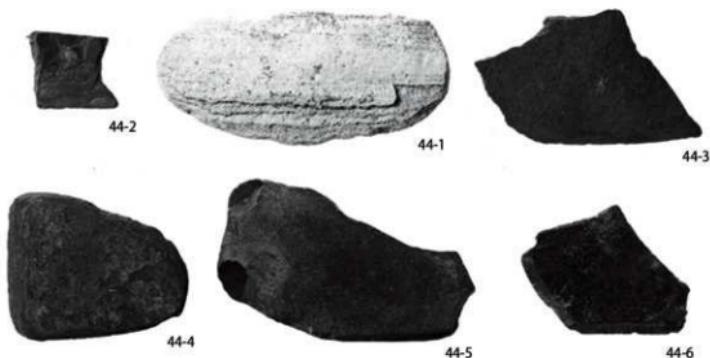
2. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (2)



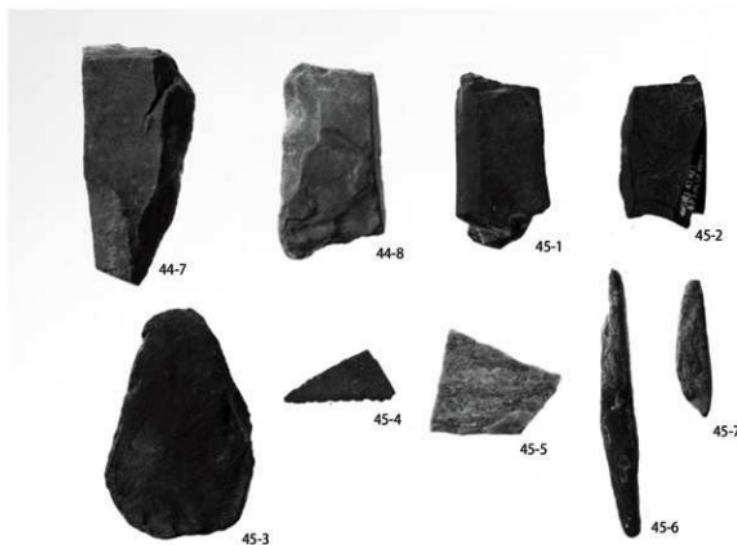
1. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (3)



2. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (4)



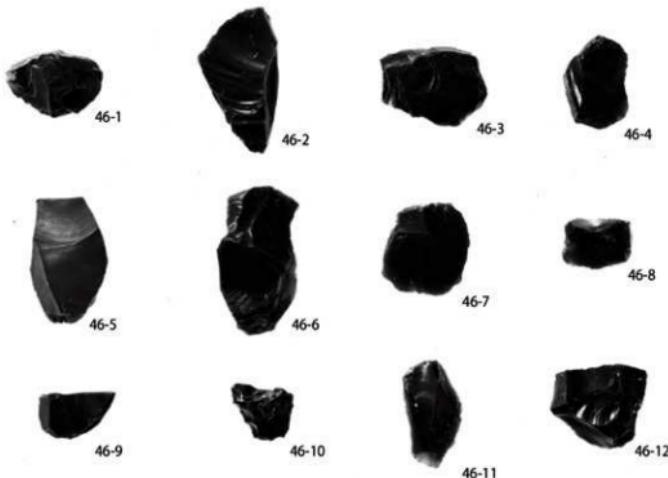
1. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (5)



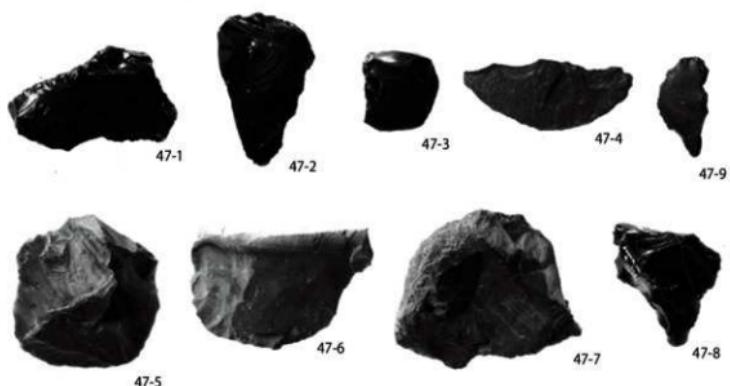
2. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (6)



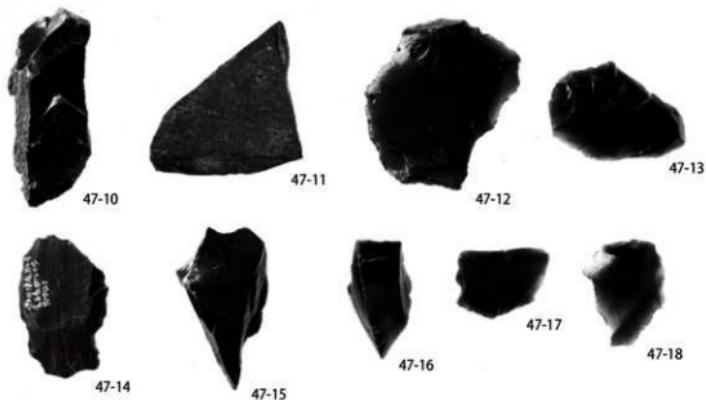
1. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (7)



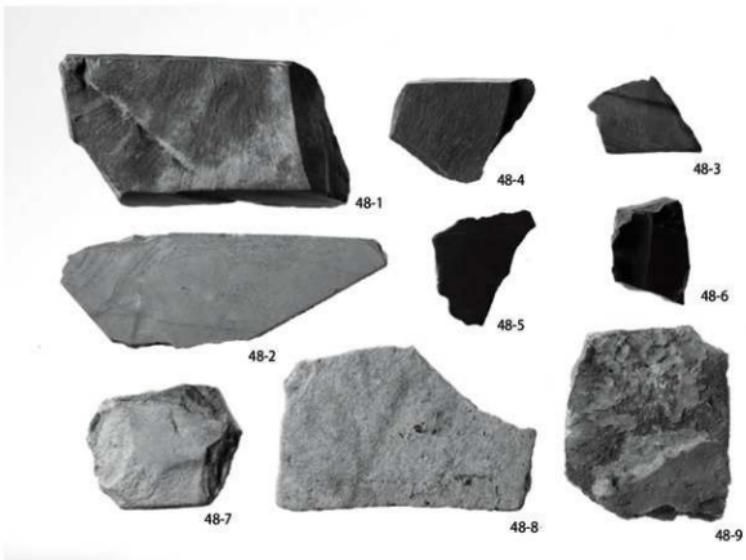
2. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (8)



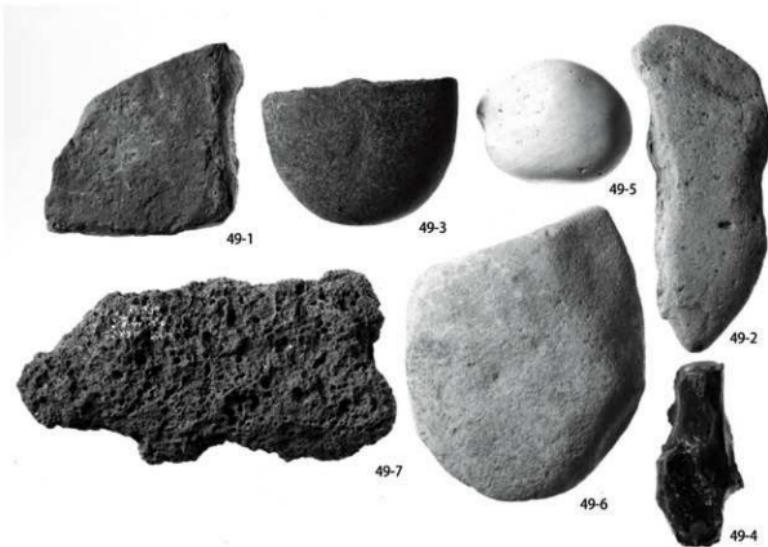
1. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (9)



2. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (10)



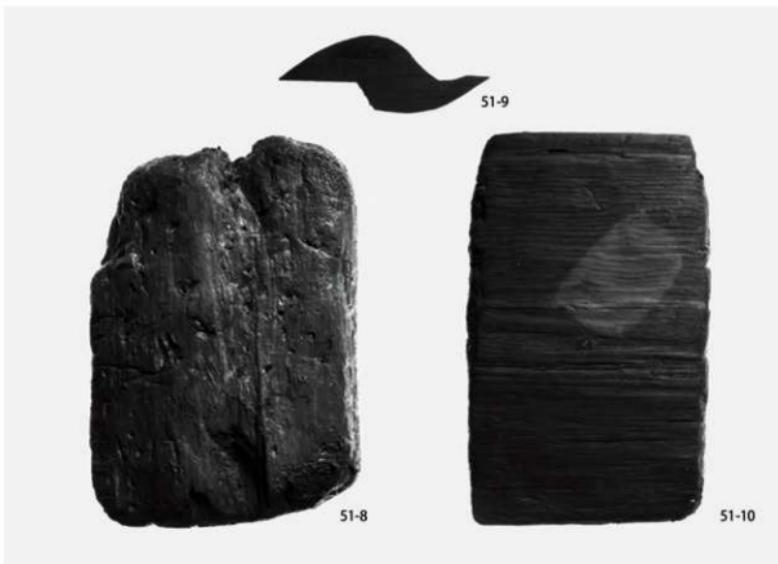
1. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (11)



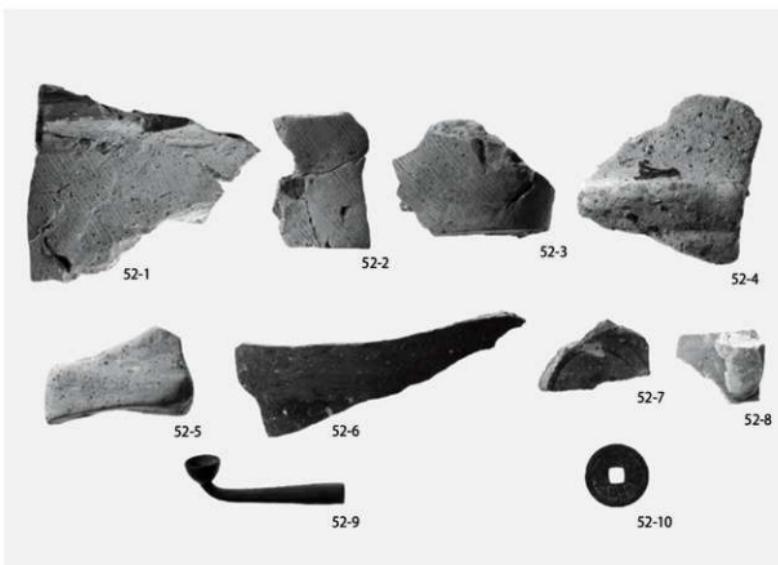
2. 昭和 55・56 年度調査出土石器 (12)



昭和 55・56 年度調査出土木製品 (1)



1. 昭和 55・56 年度調査出土木製品 (2)



2. 昭和 54 年度試掘調査出土遺物



## 報 告 書 抄 錄

# 島根県西川津遺跡出土品 1

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所蔵資料再整理事業報告書 2  
島根県古代文化センター調査研究報告書 56

発 行 2021（令和3）年3月

発行者 島根県教育委員会

編 集 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒 690-0131 島根県松江市打出町 33 番地

電話 0852-36-8608

<https://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/>

印 刷 有限会社 松本印刷